令和２年度

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」

研究開発実施報告書・第２年次

令和３年３月

岡山県立岡山城東高等学校

地域との協働による高等学校教育改革推進事業【グローカル型】　全体構想概念図

「ステージは『世界』だ！」～岡山発グローバルリーダーの育成～

岡山県立岡山城東高等学校

目指す人材像

～ 持続可能な郷土岡山の実現に向けて ～
○ グローバルな視点を持ちながら地域に根差し地域社会を支える人材
○ 郷土や日本への貢献意識を持ちながら、国際社会で活躍する人材

育成したい資質・能力

- 創造的・批判的思考力
- 高度な英語運用能力
- グローバルな視野と多様性の理解
- 自主的・自律的な行動力と社会貢献意識

地域密着の課題研究

3年次 GLOBAL Ⅲ（個人研究）
高度な課題研究《選択者》

・個人で研究を深化
・論文作成（英語または日本語）

2年次 GLOBAL Ⅱ（グループ研究）
本格的な課題研究《全員》

・「学類コア科目」（１単位）と「総合的な探究の時間」（１単位）が連動した学類の専門性を活かした探究活動
・地域でのフィールドワークを重視した実証的な研究

- 人文社会学類（主なテーマ）文学、歴史、経済、法学、国際、教育
- 理数学類（主なテーマ）自然科学、環境、科学技術
- 国際教養学類（主なテーマ）アジア研究、国際理解、異文化共生
- 音楽学類（主なテーマ）民族音楽、伝統、宗教、文化

1年次 GLOBAL Ⅰ（グループ研究）
スキル学習・課題研究《全員》

・教科横断的なリサーチスキルの学習
・県内企業訪問でグローバルな地域課題の学習
・ＳＤＧｓの 17 のゴールを参考に課題研究の演習を実施

総合的な探究の時間　各教科・科目
学校設定科目「学類コア科目」

異文化交流の深化

教員の指導力向上

○英語の授業改善
・聞く力、話す力の重視
・国際教養学類での先進的な取組
・先進的取組の他の学類・他校への普及

○評価方法の研究
スピーキングテストの実施によるパフォーマンス評価の研究

海外体験・国際交流

○海外研修の充実【単位認定の研究】
～現地の地域課題調査等
２年次後半：大学等で研究発表（イギリス）
２年次前半：アジアでの交流（韓国、台湾、マレーシア）
１年次：多文化社会の体験（カナダ、オーストラリア）

○海外姉妹校・提携校等訪問の受け入れ、外国人留学生の受け入れ
○留学の促進
○岡山大学の留学生との交流
○ＩＣＴを活用した海外との交流

各教科・科目　特別活動
外国語（英語）

自主性・自律性を育成する取組

社会貢献活動

○学類の専門性を活かした地域のニーズに基づくボランティア活動等
・小学生の学習支援ボランティア
・校外出前演奏
・観光地での通訳ガイド
・地域行事への参画

高大連携

○アカデミック・インターンシップの推進

リーダー育成

○生徒会活動や委員会活動の活性化

特別活動
教育課程外

コンソーシアム　岡山県内の関係機関と連携しながら、県全体をフィールドとして生徒が活動

- 県経済団体連絡協議会：課題研究での協働 インターンシップ
- 岡山城東高等学校
- 岡山県教育委員会
- 岡山県・岡山市：地域課題を共有し地域振興に参画
- 岡山大学：課題研究の指導 留学生の派遣
- 海外大学・高校：留学生派遣と受入 海外研修 姉妹校交流

これまでの取組（スーパーグローバルハイスクール H26～H30）

成果
・課題研究に必要な基礎的スキルの定着
・チーム力やプレゼン能力の向上(異力の統合)
・海外研修等による異文化理解の深化
・思考力や言語活動を重視した授業改善

課題
・地域の理解や地域との関わり
・課題研究と学類の強み・専門性との関連
・英語力強化の取組と全校・他校への普及
・課題研究等で得られた知見を生かした自主的な実践

地域密着の課題研究

GLOBALⅠ　スタート（年次集会）

GLOBALⅠ　スキル学習
（仮説・実験・検証ガイダンス）

GLOBALⅠ　講演会
「知っておこう！SDGs・ESD」

企業訪問（オージー技研）

企業訪問　事前学習

企業訪問（ナカシマプロペラ）

地域と連携した「高校の魅力化」フォーラム参加

GLOBALⅠ　統計グラフコンクール応募

地域密着の課題研究

GLOBALⅡ　課題研究
（理数学類　実験まとめ）

GLOBALⅡ　課題研究
（音楽学類　ストリートピアノ）

GLOBALⅡ　課題研究（文献調査）

GLOBALⅡ　JICA による国際理解ワークショップ

GLOBALⅡ　中間発表会（オンラインにて）

GLOBALⅡ　論文作成

Glocal High School Meetings 2021 参加
（オンラインにて）

地域密着の課題研究

課題研究発表会

課題研究発表会　ステージ発表

課題研究発表会　質疑応答

課題研究発表会　ステージ発表

課題研究発表会　ステージ発表（人文社会学類）

課題研究発表会　教室発表

成果報告会

異文化交流の深化

留学生（ドイツ）との交流　３年次・２年次　国際教養学類 HR

英語ディベート講習会

JOTO STEEEEM 2020（Science,Technology,Engineering,
Environment,Entrepreneurship,English,Math）

JOTO STEEEEM 2020
現地アメリカとオンライン交流

ITC（Intensive Training Camp）
Skit

ITC（Intensive Training Camp）Presentation

英語公開授業

自主性・自律性を育成する取組

社会貢献活動　献活デー（芥子山幼稚園）

広報活動ボランティア
（高知県宿毛市）

献活デー　オンラインレクリエーション
（サービス付き高齢者向け住宅 VERZ 城東）

制服（新規女子スラックス）採寸補助（カンコー学生服）

リーダー研修会

小学生登校見守り活動

風紀委員会（スマホ啓発活動）

保健委員会（教室消毒）

巻　頭　言

岡山発グローバルリーダーの育成にむけて
～ コロナ禍の中で ～

校長　前川　隆弘

岡山城東高等学校は、令和元年度からの三年間、文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業【グローカル型】」の指定を受け、様々な取組を行っている。ここに二年目の取組概要及び成果と課題を報告できることを大変有り難く思うとともに、この事業の推進が、本校の教育をますます充実させ、新たな学びのスタイルを全国に発信するものになると期待もしているところである。

本校は、昭和62年に「普通科総合選択型」の新しいタイプの高等学校として開校された。「進取・協同」を校訓とし、県下各地から、また海外からも個性豊かな生徒が集い、自由で明るい校風のもと、自主的・自律的な生活を送っている。本校のミッションは、生徒一人ひとりの多彩な才能が開花する教育を行い、グローバル社会や地域コミュニティ等において、リーダーとして必要な資質・能力を備えた人材を育成することである。そのため、単位制により、多様な知的好奇心に応える幅広い選択科目を開設している。また、二年次から、四つの学類（人文社会・国際教養・音楽・理数）にわかれ、学類コア科目、学類専門科目、学類研修等で、より専門性を深める探究的学習が進められている点も本校の大きな特色である。

本校は、平成14年度から３年間「SELHi開発研究校」に指定された。さらに、平成24年度から「ステージは『世界』だ！」というグローバル人材育成の取組を開始し、文部科学省事業「英語力強化の拠点校」を経て、平成26年度には「SGH（スーパーグローバルハイスクール)」に指定され、一昨年度までの５年間、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えた人材を育成する研究開発を行い、一定の成果をあげてきた。

このたびの「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」では、SGHで培ったノウハウを活かして、「岡山発グローバルリーダーの育成」をスローガンとして掲げている。持続可能な郷土岡山の実現に向けて、グローバルな視点を持ちながら地域に根差し地域社会を支える人材、郷土や日本への貢献意識を持ちながら国際社会で活躍する人材を育成することが、本校の本事業における研究開発の目標である。そのために、「地域密着の課題研究」「異文化交流の深化」「自主性・自律性を育成する取組」の三本柱を設定し、PDCAサイクルを回しながら実践・研究を進めているところである。昨年度の反省を活かし、今年度新たな試みや改善を計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大により、思うように行かなかった事業もあった。しかし、そういった状況の中でも、できないことを悔やむのではなく、できることを見つけて工夫をしてきたつもりである。詳細は各担当のページに譲ることとするが、例えば、本校の学園祭である翠緑祭では、生徒たちがリモートによる動画中継を行うなど、今年ならでは、城東ならではの企画を立てて実施してくれた。まさに本校の校訓の「進取・協同」の実践であり、本校生徒たちに自主・自律の精神が確実に身についている証左であると感じたところである。本冊子には、コロナ禍の中で工夫したこれまでの取組概要等をまとめている。お目通しいただき、忌憚のないご意見やご助言をいただければ幸いである。

本事業は、多くの方々のご支援があって成り立っている。この場をお借りして、コンソーシアムを構成していただいている岡山県、岡山市、岡山県経済団体連絡協議会、岡山大学、岡山県教育委員会の関係者の皆さま、運営指導委員の皆さま、その他本事業に関わっていただいているすべての皆さまに、心から感謝申し上げるとともに、今後とも、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

目次

第１章　令和２年度研究開発実施報告 …… 1
1. 研究開発構想名
2. 対象
3. 研究開発の目的・目標
4. 研究開発の概要
5. 研究開発の内容
6. 令和２年度の実施計画
7. 事業実施体制
8. 課題項目別実施期間
9. 成果の普及及び評価・検証
第２章　地域密着の課題研究
第１節　「GLOBALⅠ」の実施 …… 7
1. シラバス・年間指導計画の作成と共有
2. 実施概要
3. 講演会の実施
4. 今年度の成果と課題、次年度の取組
第２節　「GLOBALⅡ」の実施…… 13
1. シラバス・年間指導計画の作成と共有
2. 実施概要
3. フィールドワークの実施
4. 今年度の成果と課題、次年度の取組
第３節　「GLOBALⅢ」の実施に向けて …… 24
第４節　課題研究発表会・成果報告会 …… 27
第５節　JLPの取組 …… 31
第３章　異文化交流の深化…… 32
1. 先進的な取組を取り入れた英語の授業の実施
2. 海外研修の充実（JOTO STEEEEM 2020）
3. 海外研修の充実（令和元年度海外修学研修の実施）
4. 海外研修の充実（海外文化体験研修）
5. 海外姉妹校・提携校等の受け入れ、外国人留学生の受け入れ
6. 今年度の成果や課題、次年度の取組
第４章　自主性・自律性を育成する取組 …… 43
1. 社会貢献活動の実施・ボランティア活動の実施
2. 生徒会活動や委員会活動の活性化
3. 今年度の成果や課題、次年度の取組
第５章　カリキュラム開発…… 51
1. カリキュラム・マネジメントの推進
2.「GLOBALⅠ」、「GLOBALⅡ」の評価
3. アカデミック・インターシップの状況
4. 指定３年目の「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発
5. 今年度の成果や課題、次年度の取組
第６章　各種委員会の開催…… 62
1. 運営指導委員会・コンソーシアム運営会議
2. 教育改革推進委員会
第７章　広報活動…… 69
生徒報告　「GLOBALⅠ」…… 70
「GLOBALⅡ」…… 72
関係資料　教育課程表…… 78
総合的な探究の時間　全体計画 …… 82
キャリア教育　全体計画…… 83
各種資格試験の結果…… 84
令和２年度学校自己評価アンケート …… 85

第１章　令和２年度研究開発実施報告

１．研究開発構想名

「ステージは『世界』だ！」～岡山発グローバルリーダーの育成～

２．対象（令和２年度）

対象とする生徒数　１年：320名　２年：317名　３年：355名　（令和２年５月１日現在）
学校全体の規模　設置学科：全日制普通科　在籍者数：992名（令和２年５月１日現在）

３．研究開発の目的・目標（構想調書）

平成26年度から５年間「スーパーグローバルハイスクール」（以下「SGH」という。）の指定を受け、「課題研究」「学類コア科目」「海外体験」を柱に研究を行い、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えたグローバルリーダーを育成してきた。課題研究においては、主な連携先である岡山大学の教員や大学院生の手厚い支援を受けるとともに、その他の連携先である東京大学、JICA岡山県デスク、特別非営利活動法人AMDA、岡山県経済団体連絡協議会、山陽新聞社等の協力を得ながら質の高い探究活動を実施し、生徒は自ら課題を発見し他者と協働して課題解決に向けて提案・実践する力を身に付けた。また、海外研修プログラムを開発し、異文化理解を深めるとともに、グローバルな視野を課題研究に生かすことができた。一方、グローバルな課題を意識するあまり、地域でのフィールドワークに基づいた研究が少なく、グローバルリーダーに必要とされる郷土の理解と貢献意識を十分に伸ばしきれていないという課題が残った。

これまで、本校では、国際的な実践力を備えた次代を担うリーダーの育成を進めてきたが、社会の変化に伴い、地元地域に貢献できる人材育成も求められるようになっており、この研究では、地元企業や大学、自治体等との協働を強化し、地域でのフィールドワークを重視した課題研究を実施することにより、グローバルな視点を持ってローカルで活躍したり、郷土愛を持ちながらグローバルに活躍したりしながら、郷土岡山の持続可能な発展のために貢献できる「岡山発グローバルリーダー」の育成を目指す。コンソーシアムと連携して、生徒は、地域におけるフィールドワークを重視した課題研究を通じて、岡山の歴史や文化を理解し、そこに内在する地域課題を解決し、郷土の持続可能な発展に向けた提言を、SDGsを踏まえながら作成する。自らの研究を深めるだけでなく、他のグループ研究にも接し、地域社会で活躍する人々と密接に関わる中で、多様性を学ぶ。課題意識を持って上級学校に進学し、将来は岡山発のグローバルリーダーとして国際社会で活躍したり、グローカル人材として地域社会を支えたりするために、自主的・自律的に行動できる人材へと成長していくことを目指す。

なお、本事業において育成したい具体的な資質・能力は次のとおりである。

（１）創造的・批判的思考力　　（２）高度な英語運用能力
（３）グローバルな視野と多様性の理解　（４）自主的・自律的な行動力と社会貢献意識

４．研究開発の概要

学校設定科目「学類コア科目」と総合的な探究の時間「GLOBALⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を教科横断的に連動させ、地域と連携して、郷土岡山の地域課題を踏まえ、創造的・批判的思考力を育成しながら、本校の類型である学類の専門性を生かした課題研究に取り組む。並行して、海外研修の充実、留学の促進、海外姉妹校等からの訪問の受け入れや英語教育の改善により、グローバルな視野と多様性の理解、高度な英語運用能力を育成する。また、学類の専門性を生かした地域ニーズに基づくボランティア活動、生徒会活動の活性化により、自主性・自律性を育成する取組を強化し、持続可能な郷土岡山の実現に向けて、将来、地域社会を支えたり、国際社会で活躍したりする「岡山発グローバルリーダー」の育成カリキュラムを開発する。

５．研究開発の内容

（１）目的・目標

郷土岡山の創生のために､次代を担う多様性を理解したグローカル人材が求められている。そこで、海外や地域社会で活躍する人々から文化や社会の多様性やグローバル課題について学び、地域課題の解決に向けた地域でのフィールドワークを重視した課題研究に取り組む。それを通じて、将来グローバルリーダーとして国際社会で活躍したり、グローカル人材として地域社会を支えたりする、自主的・自律的に行動できる人材を育成する。

（２）現状の分析と研究開発の仮説

①現状の分析

本校では、平成26年からSGH事業において、「課題研究」「学類コア科目」「海外体験」を柱として、グローバルな視野と主体的・協働的な実践力を備えた人材を育成する研究開発を行った。生徒、教員及び卒業生への調査から、生徒は課題研究で育成したい基礎的な資質・能力を概ね習得し、教員も思考力、判断力、表現力を育成する協同的な活動を重視した授業実践を各教科で行うようになった。また、海外体験が高校卒業後のキャリア形成意識に有為に働いていることも明らかになった。

一方、課題として、地域でのフィールドワークを含む地域密着の取組が少なかったこと、異文化理解のための英語活用能力を十分に身に付けさせることができなかったこと、地域社会の持続的な発展に積極的に参画しようという態度の育成と活発な実践には至らなかったことなどが挙げられる。

②仮説及び期待される効果

仮説１：「課題研究」と学類を特長付ける「学類コア科目」等とを教科横断的に関連付けた新しい学びのカリキュラムを開発することによって、生徒の創造的・批判的思考力を育成することができる。

仮説２：「異文化交流」を深化させるため、英語運用能力を高度化する指導法の開発と各種海外研修及び交流事業を関連付けることによって、生徒の高度な英語運用能力、グローバルな視野と多様性の理解を育成することができる。

仮説３：学類の特長を生かしたボランティア活動の在り方等について、生徒主体の企画等も含めて研究することにより、生徒の自主的・自律的な行動力を育成するとともに社会貢献意識の醸成につなげることができる。

（３）地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画

①課題研究

（ａ）「教科・科目」と「総合的な探究の時間」との関連を図った指導の展開

本校独自の学類ごとに設定した「学類コア科目」等で学類での専門性を高めるとともに郷土岡山の特色に関連した探究課題を発見させ、それを総合的な探究の時間における課題研究に関連付ける。

（ｂ）地域との連携の在り方

１年次での企業訪問（全員参加）や県主催の企業説明会等を通じた学習をもとに、２年次で地域におけるフィールドワークを行い、地域社会の課題の発見につなげる。

（ｃ）学習形態の工夫

１年次生・２年次生における課題研究をグループ研究で行い、生徒同士のコミュニケーションが活発に行えるようにする。また、全体発表会や論文やレポートの作成等により、創造的思考とそれを支える論理的思考が高められるようにする。

②異文化交流の深化

（ａ）高度な英語運用能力の開発

・三年間の指導過程・指導内容の策定
・指導法の改善（校内研究授業：年３回、授業公開：年３回）
・評価方法の開発

（ｂ）海外体験・国際交流の充実

・海外文化体験研修（カナダ・オーストラリア）【単位認定】、海外学類研修（韓国、台湾、マレーシア）、海外修学研修（イギリス）【単位認定を研究中】
・長期留学生受け入れ及び姉妹校との交流の発展（韓国：慶南外国語高等学校・金海外国語高等学校）

（４）カリキュラム・マネジメントの推進体制

①推進体制

（ａ）課題研究：カリキュラム開発係が中心となって、地域連携係と協働で学習活動の内容及び進め方について開発を行う。

（ｂ）異文化交流の深化：国際交流係と外国語教育推進係が協働で学習活動の内容及び進め方について開発を行う。

②カリキュラム・マネジメントの視点

（ａ）実施状況の評価・改善を図る方策

月単位～年単位の期間の中で、各係単位から推進委員会が定期的に進捗状況を確認できるようにする。

（ｂ）必要な人的又は物的な体制を確保し、その改善を図る方策

・県内全域との連携による学習を支援するため、地域協働学習実施支援員の協力を得ながら、地域連携係が、コンソーシアムとの連絡・調整を行う。
・海外研修の新規企画など海外との交流に係る業務について、海外交流アドバイザーの協力を得ながら、国際交流係が、連絡・調整を行う。

６．令和２年度の実施計画

・１年次「GLOBALⅠ」の実践を行う。（前年度の内容を改善した学習内容を行う。）
・１年次生の企業訪問の取組を改善し実施する。
・２年次「GLOBALⅡ」と学類コア科目とを２時間連続させた時間割とし、教科等横断的に連動させ学類の専門性を生かした探究活動を実践する。
・３年次「GLOBALⅢ」のシラバスを作成する。
・GTECの成績分析及び改定したCAN-DOリストをもとに、高度な英語運用能力を育成する授業展開について研究・実践を行う。
・海外文化体験研修（１年次）、海外学類研修（２年次前半）及び海外修学研修（２年次後半）を、課題研究に関連したフィールドワークの実践の場として位置付けるとともに、グローバルな視野と多様性の理解につながるよう、３年間を見通して内容の改善実施に取り組む。
・海外研修の充実と単位認定に向けて課題を洗い出す。海外留学と留学生受入れ等を推進する。
・アカデミック・インターンシップの実践研究及び学類の専門性を活用したボランティア活動を行う。
・生徒の到達度等を測定する各種調査の実施により、各取組の効果を検証しカリキュラム・マネジメントを進める。（卒業生調査も参考にする。）
・運営指導委員会、コンソーシアム運営会議を開催し、事業の成果と課題について評価検証を行うとともに、各機関との連携を強化する。
・課題研究発表会等の開催及び報告冊子の作成・Webページの活用により県内外へ成果を普及する。

７．事業実施体制

（１）研究開発に係る校内の実施体制

「岡山城東高等学校教育改革推進委員会」

（コアメンバー）

校長、副校長、教頭、事務部長、主幹教諭、教務課長、学類主任（人文社会・理数・国際教養・音楽）、年次主任

（必要に応じて出席するメンバー）
カリキュラム開発係主任（教務課長補佐）、地域連携係主任（生徒課長）、国際交流係主任（国際課長）、外国語教育推進係主任（外国語科研究主任）、情報発信係主任（総務課長）、記録係主任（図書文化課長）、会計係主任（事務室）

（２）校内係

課題項目	実施場所	事業担当責任者
「GLOBAL Ⅰ」の実施	各HR等	１年次主任　１年次GLOBAL係
大学教授等の派遣		主幹教諭
「GLOBAL Ⅱ」の実施		２年次主任　２年次GLOBAL係
「GLOBAL Ⅲ」の準備		教務課長補佐
総合的な探究の時間のカリキュラム開発		教務課長補佐　各学類主任
公開授業	各HR等	教務課長　JLP(Joto Learning Project)
評価・検証		教務課長
大学との連携の調整		主幹教諭
企業との連携の調整		生徒課長　進路指導課長
ボランティア活動の研究		生徒課長
生徒会活動の活性化		生徒課長
英語教育の改善	各HR等	指導教諭（外国語）
海外修学研修の改善	イギリス	国際課長　教務課長
留学・国際交流の推進		国際課長　教務課長
情報発信・HP更新		総務課長
報告書作成・配布		図書文化課長
英語に関する外部検定試験支援		進路課長　指導教諭（外国語）
課題研究発表会	体育館等	２年次主任
成果報告会	セミナー室	主幹教諭

（３）運営指導委員会（６名）

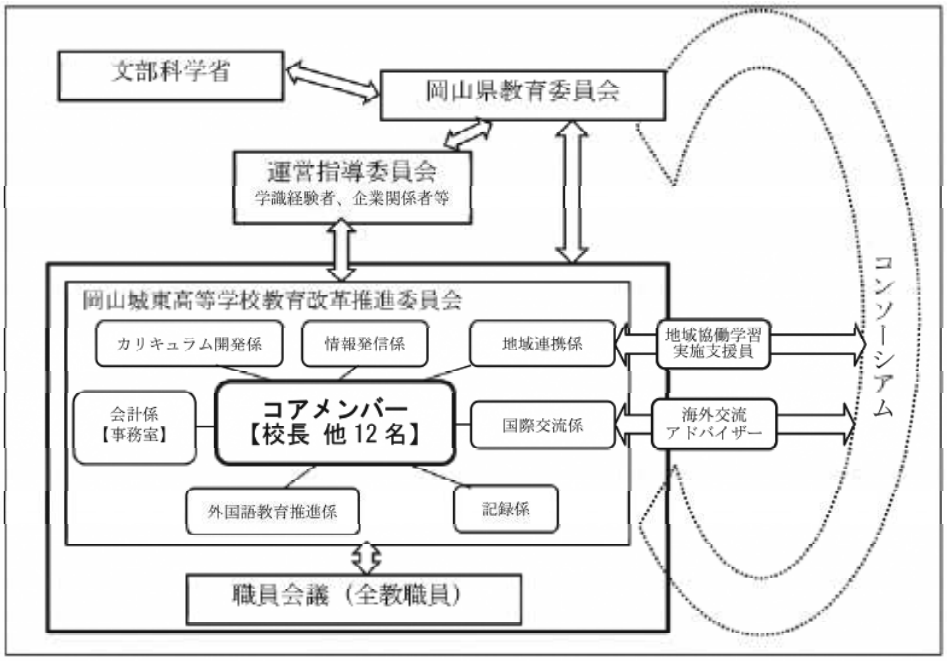
氏名	所属・職	備考
岡本　弥彦	岡山理科大学・ 教育推進機構　教職支援センター教授	課題研究の手法に関する指導
小川　正人	環太平洋大学・ 国際・教養教育センター　センター長	グローバル人材育成や探究学習に関する指導
神崎　浩二	岡山県経済団体連絡協議会・事務局長	産業界が高等学校に求める教育の在り方に関する知見
国定　啓人	山陽新聞社編集局・局次長	グローバルな社会課題、地域課題に関する知見
杉山　慎策	中国学園大学・中国短期大学・副学長	高度な英語力の育成に関する指導
谷一　　尚	一般財団法人林原美術館・館長 山陽学園大学・副学長	地域文化に関する知見 グローバル人材育成に関する指導

（４）高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
岡山県	知　事・伊原木　隆太
岡山市	市　長・大森　雅夫
岡山県経済団体連絡協議会	座　長・中島　博
岡山大学	学　長・槇野　博史
岡山県立岡山城東高等学校	校　長・前川　隆弘
岡山県教育委員会	教育長・鍵本　芳明

（５）カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
海外交流アドバイザー	朴　浣	岡山県県民生活部国際課国際交流推進員	県庁職員の業務の一環として
	アラン・チャンブリス	岡山県県民生活部国際課国際交流員	県庁職員の業務の一環として
	大塚　崇史	岡山県教育庁高校教育課指導主事(主幹)	県庁職員の業務の一環として
地域協働学習実施支援員	木科　孝夫	岡山県教育庁生涯学習課社会教育主事（総括主幹）	県庁職員の業務の一環として
	大塚　崇史	岡山県教育庁高校教育課指導主事(主幹)	県庁職員の業務の一環として



８．課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（令和２年度）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
○「GLOBAL Ⅰ」の実施												
年間指導計画等作成	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
評価の研究・実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○「GLOBAL Ⅱ」の実施												
年間指導計画等作成	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
評価の研究・実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○「GLOBAL Ⅲ」の準備												
指導方法・体制の準備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
年間指導計画等作成	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
評価方法の研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○英語教育の充実												
指導方法の研究・実践	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
海外研修の実施と単位認定の研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
海外修学研修の準備・改善	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
留学・国際交流の推進	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○自主性・自律性の育成												
ボランティア活動の実践	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
生徒会活動の活性化	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○外部機関との連携												
大学・企業との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
NPO法人との連携開発				○	○	○	○	○	○	○	○	○
○事業評価												
事業評価の実施			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○会議の実施												
運営会議の実施	○	○				○					○	
運営指導委員会の実施						○					○	
教育改革推進委員会の実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○研究成果の発信												
研究冊子等の作成									○	○	○	○
HPでの発信	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
成果報告会の実施											○	

９．成果の普及及び評価・検証

・課題研究中間発表会、課題研究発表会及び成果報告会を開催する。
・事業の評価・検証を行い、報告冊子の作成やWEB ページを活用して成果の普及を行う。
・生徒の到達度等を測る各種調査を実施する。(GPS-Academic、独自作成質問紙調査、教員意識調査、卒業生調査)
・運営指導委員会、コンソーシアム運営会議により、事業の進捗状況の確認と成果の評価・検証を行う。

第２章　地域密着の課題研究
第１節　「GLOBAL Ⅰ」の実施

１．シラバス・年間指導計画の作成と共有

（１）「GLOBAL Ⅰ」の基本的方針

「GLOBAL Ⅰ」は、１年次全員を対象のグループ研究とし、「総合的な探究の時間」（１単位）において課題研究に必要となるスキル学習や演習に取り組む。昨年度に引き続き、総合的な探究の時間を中心に、課題研究に取り組む。１学期は研究発表に必要な基礎的な知識や技能を身に付けさせるための「スキル学習」を行い、２学期は「SDGs　持続可能な世界を実現するための 17 のゴール」の中から自らの興味や関心に合わせてグループを編成し、研究を行った。

生徒が協力しながら共通の課題について情報を収集し、解決策を研究するための指導助言は、主にクラス担任が支援を行う。

（２）生徒の状況と「GLOBAL Ⅰ」の方向性

情報機器や、インターネットの利用が低年齢化する中、幼いころから様々なデバイスを使い慣れている生徒たちは、情報収集、発信、共有の能力は高く、授業においてもインターネットを使い、調べることには十分対応できている。その一方で、手軽に得られた情報のみで端的な結論を出してしまい、そこからさらなる課題を見出して情報を基に自分なりの見解を持とうとする姿勢が乏しい。複数の情報をどのように複合的に理解・活用していけばいいのかということ、加えて、情報の正誤の判断や著作権の理解も不十分で、正しく引用することにも大きな課題があった。技術面では、プレゼンテーションソフトや文書作成ソフト、表計算ソフトの使用が初めての生徒も非常に多く、苦労していた。スマートフォンやタブレットが浸透し、家庭にパソコンがない生徒も少なくないと考えられる。情報端末に関しての基礎知識や技術の学習の重要性を再確認できる機会となったかもしれない。

「GLOBAL Ⅰ」前期では、教科の特性を生かした「スキル学習」を研究活動に先立って行い、課題研究を進めていく上で基礎的な知識や技能を習得することとした。プレゼンテーションソフトの使用の仕方、文献やインターネット上での情報の引用の仕方、著作権について学習させた。複数の教材を準備したり、複数のクラスを合同で授業を行ったり、教員自身もそれぞれ自分の教科での強みを活かして必要な知識・技能をお互いに共有し合うなどして実施した。

「GLOBAL Ⅰ」後期では、課題研究において情報収集だけでなく、可能な限りグループでのディスカッションに費やすことができるように配慮した。情報収集等の作業は必ず家庭や授業外で行うことを指導し、事前に目を通した参考文献、必要な情報をプリントアウトした用紙等を「GLOBAL Ⅰ」の時間に持ち寄ることで、コンピュータ室や図書館ではなく教室においてのディスカッションや資料作りに重きを置いた。

各教科との連携も図った。情報の授業において「GLOBAL Ⅰ」での学習活動の補足を行い、夏季休業課題として数学科・情報科が「統計グラフコンクール」に応募する作品作成を課すことで、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりすることができるようにした。

「SDGs　持続可能な世界を実現するための 17 のゴール」からテーマを一つ選択し行う課題研究を通じては、自分たちと岡山、世界とのつながりを意識させ、自らが当事者となって問題解決に臨む姿勢を身に付けさせ、地域から世界に、世界から地域へと視野を移し、グローバルでローカルな視点や意識を常に持つことのできる人材を育成しなければならない。他者の意見を鵜呑みするのではなく、多面的、批判的に解釈し、積極的に質問、意見することで、質の良い共有とさらなるアイデアが生みだそうとする姿勢を持てるようにしたい。「GLOBAL Ⅱ」に向けて更なる検討を重ね、改善していきたい。

２．実施概要

（１）研究における目標

「GLOBAL Ⅰ」においては、昨年度に引き続き「SDGs　持続可能な世界を実現するための17のゴール」からテーマを選択し、岡山、世界とのつながりを意識し、自らが当事者となって問題解決に臨む人材を育成することを目標とした。この課題研究の過程において、生徒達は①自らの意見を述べることができる。②他の意見を受け入れることができる。また、その雰囲気づくりができる。③相手の意見を受け、批判的に考えて自らの意見を言うことができる。という昨年同様の３段階の力を付けていくことが必要となる。

（２）スキル学習

１学期は各教科の教員が順に授業を行い、今年度から採用したBenesseの「探究ナビ」を活用して研究に必要な基本的なスキル学習を行った。コロナウイルスの感染拡大による休校の影響もあり、スタートは遅れたが、夏期休業の短縮等もあり例年どおりの時間数を確保することができた。昨年度はPower pointの使い方をPC教室で行ったが、今年度はシンキングツールの使い方について各教室で行った。

日付	1組	2組	3組	4組	5組	6組	7組	8組
6/26	シンキングツール（各HR）		研究手法・文献調査（合併教室）		統計（標準偏差・偏差値）（各HR）		仮説・実験・検証ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ（各HR）	
7/10	研究手法・文献調査（セミナー室）		統計（標準偏差・偏差値）（各HR）		仮説・実験・検証ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ（各HR）		シンキングツール（各HR）	
7/28	統計（標準偏差・偏差値）（各HR）		仮説・実験・検証ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ（各HR）		シンキングツール（各HR）		研究手法・文献調査（合併教室）	
7/31	仮説・実験・検証ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ（各HR）		シンキングツール（各HR）		研究手法・文献調査（セミナー室）		統計（標準偏差・偏差値）（各HR）	
8/7	研究倫理・インタビュー（各HR）							

研究手法・文献調査：研究手法の種類と文献調査の仕方（地歴科教員担当）
統計：偏差値の求め方を例にとった統計法の紹介（数学科教員担当）
仮説・実験：仮説を立てたうえでの実験、検証（理科教員担当）
シンキングツール：シンキングツールの種類と効果的な使い方（GLOBAL係教員担当）
研究倫理・インタビュー：結論の導き方やインタビュー法（国語科教員担当）

（３）企業訪問

地域課題に取り組む企業の実態や、世界市場で活躍する企業戦略等を学習するとともに、自分と社会との関わりについて考えを深める契機とするため、１年次生全員を対象に企業訪問を実施した。今年度は４つの企業の協力で２日間にわたり、１年次生全員が訪問した。事前に自らの興味・関心や将来の進路に合わせて訪問先の希望をとり、１年次の教員での検討も踏まえ生徒ごとの訪問先を決定した。

	企業名	訪問日		参加生徒数
1	（株）両備ホールディングズ	8月20日（木）	8月21日（金）	40名×2
2	（株）ベネッセホールディングズ・ ベネッセコーポレーション	8月20日（木）	8月21日（金）	40名×2
3	（株）ナカシマプロペラ	8月20日（木）	8月21日（金）	40名×2
4	（株）オージー技研　邑久工場	8月20日（木）	8月21日（金）	40名×2

【オージー技研での訪問の様子】

それぞれの企業からは、SDGs17のテーマに関連する独自の取組について説明があり、生徒が実際の商品に触れる機会、フェイスシールドを作成する機会（オージー技研）などが提供された。日頃触れることのない企業の実態を知るだけでなく、地元岡山の未来についても考える機会を持つことができ、生徒には非常に貴重な経験となった。また、岡山に在りながらも、世界市場を経済活動の拠点として競争している地元企業の戦略を直接的に知ることができたことも、地元企業の良さを再確認するよい機会となった。

（４）課題研究

10	20	火	研究①	『探究ナビ』p.38,39と 付録ワーク　SDGsのゴール毎にグループを作る。
10	23	金	研究②	『探究ナビ』p.44～46と付録ワーク　Research Question（課題）を設定。 探究計画書及び文献調査リストの作成
10	27	火	研究③	
10	30	金	研究④	『探究ナビ』p.48～p.51と 付録ワーク調査・実験（1）
11	13	金	研究⑤	『探究ナビ』p.48～p.51と 付録ワーク調査・実験（2）
11	17	火	研究⑥	結果・考察をはさんで調査・実験（3）
11	27	金	講演会	「知っておこう！SDGs・ESD」
12	1	火	研究⑦	『探究ナビ』p.48～p.51と 付録ワーク調査・実験（4）
12	15	火	研究⑧	テキストp.101 結果・考察
12	22	火	研究⑨	『探究ナビ』p.106,107 プレゼンの技法
1	12	火	研究⑩	『探究ナビ』p.106,107 プレゼンの技法
1	15	金	研究⑪	発表準備（スライド表紙＋5枚以上を目安） スライドは家で作り、学校では集約のみ

1	22	金	クラス発表①	クラス発表会①(1～4班)(要旨A4で1枚提出、相互評価、クラス代表選出)
1	26	火	クラス発表②	クラス発表会②(5～8班)(要旨A4で1枚提出、相互評価、クラス代表選出)
1	29	金	作業	代表者発表準備、その他生徒論文準備
2	3	水	全体まとめ	全体発表会(体育館)
2	5	金	全体まとめ	評価等　まとめ

①研究テーマ

「SDGs　持続可能な世界を実現するための17のゴール」をテーマに研究を始めて２年目になる。年度当初の休校の影響が懸念されたが、２学期からの「研究①～⑪」に関しては、昨年は研究⑪までだったことを考えると同等の時間数を確保することができた。SDGsについて深めるために、「探究ナビ」の該当ページを学習すると同時に、各々文献を読み興味・関心の近い生徒同士で５・６人のグループを編成し、１クラス７～９グループ程度のグループで研究を進めた。もちろん複数の生徒の興味や関心が同じにはならないが、話し合いながら一つのテーマで研究を深めていかねばならない過程において、自分の意見を述べると同時に他の意見を受け入れ、とりまとめていく力が必須となった。

②研究手法

テキストに従い「アンケート」「インタビュー」「実験」等の研究手法を提示し、生徒が自分たちの研究にあわせて手法を選んだ。手法に関しては、コロナの影響で出向いていくことが困難になり、直接企業や団体を訪問することがなかなかかなわなかったが、それでもオンラインを活用して団体にインタビューをしたり、校内の同級生にアンケートを採ったりなどして研究を深めたグループもあった。

③考察・結論・展望

昨年は研究に入った２学期時点から岡山大学のティーチングアシスタント（TA）７名に指導に加わってもらったが、今年度はその指導は得られなかったため、生徒達は外部等の第三者からアドバイスをほとんど受けることなく研究を進めざるを得なかった。そのため、調査結果をもとに結果・考察をまとめる際、論理的に展開していくことに苦労している生徒や、筋が通っていないことを認識できていない生徒が目立った。文献の読み込み不足等による論理面での未熟さは多く見受けられたが、未熟ながらも自分たちなりに探究心をもって筋を通そうと研究する姿勢や意欲的な意見交換は多く見られ、成長の良い機会となった。

④教室発表・質疑応答・全体発表リハーサル

今年度は、体育館発表を学年から２グループ、教室発表をそれぞれ各クラスから３グループずつ選出した。クラス発表での生徒の相互評価と担任の評価を総合しクラス代表を決定し、その後、年次の教員間で８グループのPower pointデータを共有し体育館発表グループを決定した。本番前におこなったリハーサルでは、生徒は熱心に改善を行い、発表の順序やパフォーマンスの詳細に至るまで多くの新たな気づきを得ることができた。

３．講演会の実施

（１）目的

課題研究に取り組むに当たり、必要な資質・能力はどのようなものか、そしてその資質・能力が将来どのように活かされるのかを理解するとともに、実際に行われている岡山県での取組を知ることにより、主体的に課題研究に取り組む姿勢を身につける。

（２）実施内容

目的に基づき、年２回の講演会を実施した。第１回は、「GLOBAL Ⅰ」の第１時に、本校教員による課題研究全体についての講義およびワークショップとした。第２回は、課題研究における調査を行い、仮説の検証、解決策の提案を行う前段階に、SDGs の理念、成り立ちを、実際に SDGs の達成に取り組む岡山市の実践を通して再確認することで、課題研究のゴールをより明確にする機会とした。

■第１回

期日　令和２年６月 19 日

講師　松村　將由　　岡山県立岡山城東高等学校　教諭

演題　「GLOBAL Ⅰ」イントロ

概要　課題研究でどのような能力を養うことができ、その能力が社会のあらゆる場面で求められていることを知り、「GLOBAL Ⅰ」での取組内容を俯瞰した。また、会場となった体育館を地球に、１年次生徒 320 人を世界の全人口に見立てて、各大陸の面積比で区切ったスペースに、人口比に基づいてそれぞれ生徒が移動したり、飴を富に見立てて、それぞれに配付したりすることで、人口爆発、富の偏在など課題研究で扱う課題を抱える社会の現状を体感するワークショップを行った。

■第２回

期日　令和２年 11 月 27 日

講師　小川　卓志　氏　岡山市市民協働局市民協働部 SDGs・ESD 推進課　課長

演題　「知っておこう！SDGs・ESD」

概要　地域密着の課題研究に取り組むなか、SDGs の 17 の目標が作成された背景やターゲットなどについて理解を深めさせるとともに、今後の探究活動において SDGs の観点を踏まえた地域の課題やグローバルの課題を見いだし、研究を深めさせることを目的とした。

SDGs 策定までの経緯や理念を、岡山市の取組を通して、再確認できた講演会であった。アフリカの一人の少女の生活に、SDGs がいくつ関連しているのかを考えることで、SDGs の一つ一つが独立したものでなく、密接に絡み合っていることを理解することで、講演会時点で行っていた課題研究での調査結果を、多角的に、仮説の検証、解決策の提案に落とし込んでいくための視点を得ることができた。

４．今年度の成果と課題、次年度の取組

（１）成果

課題研究では、課題研究発表会で代表として、体育館発表及び教室発表を行ったグループだけでなく、その他のグループもしっかりとした発表を行うことができた。

スキル学習では、今年度も１年次の担任と各教科の教員が連携し、後半の課題研究の充実を目指して実施できた。内容も昨年度の改善を踏まえた内容となり、新たにシンキングツールの活用を導入し、より課題研究が充実する内容にした。スキル学習後の企業訪問での振り返り、課題研究におけるテーマ設定でも「シンキングツール」を使い、多面的に思考する場面が見られた。また数学科と情報科が連携し、全生徒に統計グラフコンテストへの応募作品を作成させ、優秀な 19 作品を応募することができ、必要な統計スキルの意識付けとなった。

県教育委員会主催の「地域と連携した「高校の魅力化フォーラム」」（令和２年 10 月 19 日）において、１年次５名が本校における課題研究、企業訪問、社会貢献活動での学びを発表することができた。

SDGs に関する講演会も実施でき、ESD と SDGs の経緯や関係も理解させ、課題研究を一層深める契機となった。「身近な岡山でも SDGs の具体的な取組があることを知った」、「これからの課題研究に生かすことができそうだ」といった生徒の感想も伺えた。

企業訪問では、SDGs と絡めたワークシートを、事前、訪問、事後を通して活用することで、目的意識を明確に持って企業訪問に臨むことができた。今年度は、生徒が訪問先を選択できるようにし、それぞれの興味・関心にあった企業への訪問となった。また、２年次の学類選択も踏まえた１年次団の教員による訪問選択の指導が行われた。

（２）課題

課題研究では、SDGs に関連付けた課題を設定し、文献調査にとどまらず製品の試作、実験、アンケート、インタビューなど多様なアプローチで課題に取り組んでいたが、コロナウイルス感染拡大防止による制約があった。夏季休業が短く、集中的に文献を読む機会が確保できなかったことは、研究の深まりに大きな影響を与えた。また、ティーチングアシスタント(TA)の来校も叶わなかったが、その代わりに担任による指導を通して、議論を深められていた。

課題研究発表会の様子から、質疑応答に関しては、あまり慣れていないようだった。「GLOBAL Ⅰ」の中で指導できればよいが、発表スキルのように、他の教科、教育活動でも育むことができるよう方策を研究したい。

スキル学習では、一定の内容を確立することができているが、さらなる教科横断的な指導の在り方を研究し、課題研究が一層充実するようにしたい。

企業訪問では、生徒、教員、企業ともに概ね評価は高かったが、到着後すぐに見学が始まるなど、企業訪問当日のスケジュールを事前に確認できたり、担当者と訪問する教員が簡単な打ち合わせを行えたりすると、より企業訪問が充実する。また、生徒が訪問前に予想していた SDGs の目標番号と異なるものの気づきなど、訪問企業に対してもフードバックができるようにしていきたい。訪問企業との繋がりを大切にするとともに、事業終了後の継続的な訪問についても、次年度に検討したい。

（３）次年度の取組

課題研究では、最終発表会までその都度、活動内容をまとめ、振り返りシートを用意したが、課題研究のリサーチ、発表準備が始まると時間に追われ、その都度の振り返りが疎かになりがちだった。来年度から導入する生徒一人一台端末の活用も踏まえ、課題研究で活用を図るとともに、ポートフォリオの効果的な蓄積についても研究をしたい。

スキル学習では、引き続き教科横断的な学習を取り入れ、探究活動に生かせるツールとして、内閣府の「RESAS」（地域経済分析システム）の活用についても研究をしたい。

企業訪問では、現在の訪問企業との繋がりを大切にするとともに、新たな訪問先の検討、訪問先へのフィードバック、キャリア教育への明確な位置づけ、事業終了後の企業訪問の形態の検討を行いたい。

第２節　「GLOBALⅡ」の実施

１．シラバス・年間指導計画の作成と共有

（１）「GLOBALⅡ」の基本的方針

「GLOBALⅡ」は、２年次生全員が履修することとしており、グループで研究する学習形態により、生徒のコミュニケーション力や協働する力を育成する。SGHで取り組んできた「GLOBALⅡ」と異なる点として、「学類コア科目」と「GLOBALⅡ」を連動させることによって、学類ごとにグループを編成し、各学類の特徴や専門性を生かした探究活動に取り組む。また、教科・科目の知識を学びながら世界の諸地域の文化や生活について幅広い教養を身に付けられるよう、新たなカリキュラムでは地域におけるフィールドワークを幅広く行うことを通して、より実証的な研究になるよう工夫する。

さらに、「GLOBALⅠ」で経験した探究型課題研究をより深めるため、岡山大学の教員や経済界等と連携し、専門的な立場から研究テーマについての指導や助言を受ける。イングリッシュ・ティーチャーとして２名の外国人講師からの協力を得て、より深い研究活動を目指す。また、プレゼンテーション能力を高めるために、10月にグループ毎の中間発表、１月にはグループ毎の研究成果発表会を行い、その結果をもとに選抜された代表班が２月の課題研究発表会で発表する。

（２）「GLOBALⅡ」の方向性

「GLOBALⅠ」で学んだ技術や手法をもとに、より発展的な探究型学習を週３時間の授業を中心に展開する。今年度からは、学校設定科目「学類コア科目」（１単位）と、総合的な探究の時間「GLOBALⅡ」（２単位）を教科横断的に連動させることで、学類の専門性を生かした課題研究に取り組む。従来の学類コア科目をベースとしながらも、週３時間の一貫性をもった探究活動とする。

学類・コア科目毎に合計10グループを編成し、さらに各グループで数班に分かれて課題研究に取り組む。外部からの支援として、各グループは、10月の中間発表と１月のグループ内研究成果発表会の２回、岡山大学教員から指導を受ける。また、英語発表を予定する班には、毎時間ETから指導を受けることができる体制を整え、語学力に対する意識を高める。なお、研究過程で何らかの情報収集が必要となった場合には、企業や公的機関等の訪問も含め、積極的にフィールドワークをするように勧める。最終的に、中間発表を含め何度か予定している発表会では、発表者としてのプレゼンテーション能力とともに、聴衆として質問する力を高める機会と捉える。

（３）教員間での方針の共有

昨年度までは「異力の統合」を合言葉に、クラスや学類の枠を超えて研究班を編成してきたが、今年度は、学類・コア科目毎に合計10グループを編成した。よって、すべての教員にとって、初めての指導体制となる。今年度の課題研究では、学類や教科の専門性を生かしながら、SDGsとの関連を意識し、地域社会の問題解決につながるようなテーマを設定することが望まれる。昨年度までの「GLOBALⅡ」とも、従来の「学類コア科目」とも異なるため、教員の意識改革も必要であり、テーマ設定の指導には苦労があった。

「GLOBALⅡ」の時間は、原則として２年次所属の教員が指導し、「学類コア科目」の時間は、教科指導の立場から他年次教員も指導に加わる場合があった。したがって、週３時間のすべての指導に関わることができない教員もいるので、生徒への指導が継続できるように、関係教員で緊密に連携する必要があった。

課題研究のテーマ設定や研究手法については、各グループの指導教員に一任し、年間計画やルーブリック、研究成果物の様式については年次で統一するようにした。

（様式４－２）

総合的な探究の時間　年間指導計画

令和２年度

学校名　　岡山県立岡山城東高等学校　　記入責任者　　國定　英之

名　　称	科・コース	学年又は年次	単 位 数
ＧＬＯＢＡＬⅡ	普通科	２年次	２単位

学習活動	時数	学習活動の詳細	実施上の留意点
１．探究的学習	36	【学類の特徴を活かしながら、グローカルな問題についての課題研究を行わせる】 ①講座編成 学類特有の科目との２時間連続の授業設定で実施する。 ②研究テーマの決定 学類特有の科目と関わりのある研究テーマを設定させ、SDGsの１７の目標と関連づけさせる。 ③RQの設定、仮説を立て、研究計画書の作成 GLOBAL Ⅰの経験を活かし、RQを設定させ、それに対する仮説を立て、研究計画を考えさせる。 ④調査・研究・検証 インタビューやアンケートだけではなく、実験、ディベート、ディスカッションなどを取り入れながら調査・研究方針を検討したり、仮説の検証をさせる。 ⑤研究内容のまとめ・発表 研究論文を作成させる。発表用のプレゼンテーションをPowerPointで作成させる。班の中で分担して作成したものをひとつにまとめさせる。 学類ごとに代表を選出し、全体発表会で発表させる。	・学類特有のテーマ設定を行い、SDGｓとの関連を考慮する。 ・研究手法として生徒参加型の検討ができる場を設けるようにする。
２．学類研修	16	【学類ごとに決められたコースの中から、興味のあるコースを選択し研修を行わせる】 ①学類研修のコース別にグループを編成する。 ②研修先での課題を設定し、事前調査を行わせる。 ③研修中に調査を行いつつ、そこでしかできない体験活動を行わせる。 ④研修後、成果を各自でまとめて学類研修発表会で成果を報告させる。	・研修の事前・事後指導を充実させ、研修中は現地調査や体験活動が有意義なものになるよう調整する。
３．外部講師等との連携	18	【学類を横断しての講演会、学類ごとのワークショップなどキャリア教育となる行事を体験させる。】 ①地域の課題と関わるグローバルな話題を聴くことで、グローカルの意義や重要性を理解させる。 ②職業への意識やライフワークバランスなど人生に関わる話や体験を通してキャリヤ意識を持たせる。	・講演により生徒が広い視野を持てるような人材を選ぶよう配慮する。
４．学習成果の発信	8	【学類ごとに研究内容をまとめ、校内外での発表の機会を持たせる。】 ①研究成果を報告書でまとめ、外部に対して公表する。 ②発表の場を設け、プレゼンテーションを実施して、外部の機関に評価してもらう。 ③海外修学研修を通して、グローバルレベルでの評価を受ける機会を設ける。	・成果発表会を公開会場で行い、多くの人に発信できるよう手配する。
時　数　計	７８		

備　考	

科目	GLOBAL Ⅱ 人文社会学類 （総合的な探究の時間）

単位数	2
習得年次	2

担当者
2年次人文社会学類所属教員

目標	・SDGsに関連する事項について課題を設定し、調査や研究を踏まえた具体的な提案をする。 ・GLOBAL Ⅰで習得した課題研究を行うために必要なスキルを実際に活用することができる。 ・社会の諸事情に対して問題意識を持ち、諸問題を解決に導いていく思考力と行動力を身に着ける。

◆　何ができるようになるか［どのように資質・能力を身につけていくのか］

評価の観点 学びの三要素			知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達スケール	S	探究 （究める）	仮説に対する検証過程に説得力があり、その根拠となるデータ等にも具体性がある。	一つの考え方に固執することなく設定した課題に対し複数の視点から検討できている。	研究を通して気づいた諸問題についても検証を進めていこうとする意欲がみられる。
	A	熟練 （使える）	研究の発表内容が論理的であり適切にICT機器を使用することができている。	自分たちの仮説を検証することができ、導き出した考察や新たなる仮説を発表できる。	SDGsと関連づけた課題の仮説に対して他者と協働してその検証をすることができる。
	B	上達 （わかる）	実際の社会的事象について正しく理解し、仮説を立てようとすることができている。	リサーチクエスチョンに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	グループで情報を共有しSDGsに関連した諸問題を発見しようとすることができる。
	C	習得 （できる）	各教科・GLOBAL Ⅰのスキル学習を通じて基本的な知識・技能を身につけている。	テーマを決め、リサーチクエスチョンを考え、他者に伝えることができる。	新聞やニュースから社会で起きていることについての情報を得ることができる。
１０の資質・能力			［論理的思考力］ ［ICT活用能力］	［課題解決能力］ ［批判的思考力］ ［自己表現力］	［コミュニケーション能力］ ［グローバルな視野］ ［人を大切にする心］
評価方法			授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

◆　何を学ぶか［授業内容］

1学期	・講習会 ・情報分析や実験の手法などのスキル学習 ・先行研究のリサーチ
2学期	・講演会 ・ルーブリック作成 ・リサーチクエスチョンを考える ・仮説を立て、研究計画を作る ・調査・研究を行う ・研究論文を作成する
3学期	・発表用プレゼンテーション作成 ・課題研究発表会

◆　何を学ぶか［教材］

・課題研究メソッド

◆　どのように学ぶか［主体的・対話的で深い学び］

・グループワーク等によるスキル学習
・KJ法等によりリサーチクエスチョンの決定
・シンキングツールにより仮説を立てる
・情報収集、実験、アンケート、フィールドワーク等により調査研究を行う
・論文を作成する

科目	GLOBAL Ⅱ　理数学類 （総合的な探究の時間）

単位数	2
習得年次	2

担当者
2年次理数学類所属教員

目標	・課題研究を行うために必要な理系的な視点やスキルを習得する。 ・理数学類ならではの視点で、SDGsに関する身近な課題を発見する。 ・GLOBAL Ⅰや理数科目で得た知識を用いて、調査・研究し解決方法を提案する。

◆　何ができるようになるか［どのように資質・能力を身につけていくのか］

評価の観点 学びの三要素			知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達スケール	S	探究 （究める）	仮説を繰り返し検証し、理論的に説明するための根拠を示すことができる。	仮説の検証を繰り返すことで、新たな課題を見つけて研究を深化させ、研究成果をまとめて発表できる。	他者に積極的に働きかけ、課題研究に取り組み、その結果をもとにより大きな課題に取り組む姿勢がみられる。
	A	熟練 （使える）	仮説を検証し、更に理論的に説明するための新たな根拠を示す方法を提案できる。	自分たちの仮説を検証することができ、導き出した考察や新たなる仮説を発表できる。	地域の課題解決に向けて仮説を立て、他者と協働してその検証することができる。
	B	上達 （わかる）	情報分析や実験結果から仮説を検証することができる。	リサーチクエスチョンに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	グループで情報を分析しながら地域の諸問題を発見しようと努力することができる。
	C	習得 （できる）	情報の収集方法や実験の手順を理解し、正しく扱うことができる。	テーマを決め、リサーチクエスチョンを考え、他者に伝えることができる。	新聞やニュースから社会で起きていることについての情報を得ることができる。
１０の資質・能力			［論理的思考力］ ［ICT活用能力］	［課題解決能力］ ［批判的思考力］ ［自己表現力］	［コミュニケーション能力］ ［グローバルな視野］ ［人を大切にする心］
評価方法			授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

◆　何を学ぶか［授業内容］

1学期	・情報分析や実験の手法などのスキル学習 ・先行研究のリサーチ
2学期	・講演会 ・ルーブリック作成 ・リサーチクエスチョンを考える ・仮説を立て，研究計画を作る ・調査・研究を行う ・研究論文を作成する
3学期	・発表用プレゼンテーション作成 ・課題研究発表会

◆　何を学ぶか［教材］

・課題研究メソッド
・各教科の教科書、スキル学習用プリント

◆　どのように学ぶか［主体的・対話的で深い学び］

・グループワーク等によるスキル学習
・KJ法等によりリサーチクエスチョンの決定
・シンキングツールにより仮説を立てる
・情報収集、実験、アンケート、フィールドワーク等により調査研究を行う
・論文を作成する

科目	GLOBAL Ⅱ　国際教養学類 （総合的な探究の時間）

単位数	2
習得年次	2

担当者
2年次国際教養学類所属教員

目標	・SDGｓをテーマとしたディベートやプレゼン等の活動をすることで、自身の知見を広げる。 ・Global Studiesで習得した技能や知識等を活用し、国際的な視野をもち地域に根ざした課題を見つける。 ・SDGsに関連する身近な課題について調査・研究し、解決方法をグループで提案する。

◆　何ができるようになるか［どのように資質・能力を身につけていくのか］

評価の観点 学びの三要素			知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達スケール	S	**探究** **（究める）**	研究成果を英語で発表した後、英語での質疑応答に対応することができる。	問題解決のために仮説検証を繰り返すことで、さらに研究を進めることができる。	世界を取り巻くあらゆる問題に対して課題意識を持ち、新たな課題に向けて研究を進めることができる。
	A	**熟練** **（使える）**	英語による研究手法をとり、必要となる情報を精選し、英語で論文を発表することができる。	課題解決に必要となる情報を精選、分析し、仮説を検証することで客観的根拠を持って論理的に説明することができる。	立場の違う意見を理解し、他者と協力して課題を解決する糸口を見つけることができる。
	B	**上達** **（わかる）**	英語文献などから必要な情報を取り出し、研究論文を英語でまとめ発表することができる。	課題解決に必要となる情報を収集して取り出し、仮説を立て様々な観点から自分の意見を述べることができる。	自分の意見と他者の意見を多角的にとらえ、考えをまとめることができる。
	C	**習得** **（できる）**	研究論文を英語でまとめる際に必要なスキルを身につけている。論文を英語で発表することができる。	あらゆるメディアから国内外の情勢について情報を得て、課題解決に必要となる情報を収集することができる。	自分の意見を述べ、他者の意見を理解することの重要性を理解している。
１０の資質・能力			［基礎学力］ ［自己表現力］	［論理的思考力］ ［批判的思考力］ ［課題解決能力］	［コミュニケーション能力］ ［グローバルな視野］ ［人を大切にする心］
評価方法			授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

◆　何を学ぶか［授業内容］

1学期	・SDGｓテーマに関する映画鑑賞 ・講演会（ワークショップ） ・リサーチクエスチョンを考える ・仮説を立て，研究計画を作る
2学期	・ルーブリック作成 ・調査・研究を行う ・研究論文を作成する
3学期	・発表用プレゼンテーション作成 ・課題研究発表会

◆　何を学ぶか［教材］

・課題研究メソッド
・Global Studies の関連資料

◆　どのように学ぶか［主体的・対話的で深い学び］

・SDGｓ関連の論題でディベート
・異文化理解をテーマにしたプレゼン発表
・リサーチクエスチョンの決定
・シンキングツールにより仮説を立てる
・情報収集、アンケート、フィールドワーク等により調査研究を行う
・論文を作成する

科目	GLOBAL Ⅱ 音楽学類 （総合的な探究の時間）

単位数	2
習得年次	2

担当者
音楽学類所属教員

目標	・課題研究を行うために必要なスキルを習得する。 ・スキル学習で取得した技能や知識等から、SDGｓに関する音楽文化における身近な課題を見つける。 ・SDGｓに関する音楽文化における身近な課題について調査・研究し解決方法を提案する。

◆　何ができるようになるか［どのように資質・能力を身につけていくのか］

評価の観点 学びの三要素			知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達スケール	S	探究 （究める）	自分たちの研究を論文やプレゼンにまとめることができ、他者にしっかりと伝えることができる。	仮説の検証を繰り返すことで、新たな課題を見つけ研究をさらに進めることができる。	課題研究の成果をもとに、音楽文化普及のためにより大きな課題に取り組む姿勢がみられる。
	A	熟練 （使える）	自分たちの仮説を検証するために学んできたスキルを活用できる。	自分たちの仮説を検証することができ、考察や新たな仮説を導き出せる。	音楽の歴史や音楽文化、音楽教育における新たな課題の解決に向けて、仮説を立て協同して研究することができる。
	B	上達 （わかる）	考えを整理するためにブレインストーミングやロジックツール等を利用できる。	リサーチクエスチョンに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	情報を分析しながら音楽の歴史や音楽文化、音楽教育における新たな課題を発見しようと努力することができる。
	C	習得 （できる）	スキル学習（論文の書き方、文献調査、実験検証、統計等）の内容を理解できる。	音楽文化における身近な課題からテーマを決め、リサーチクエスチョンを考えることができる。	音楽の歴史や音楽文化、音楽教育について多角的に情報を得ることができる。
１０の資質・能力			［ICT活用能力］ ［論理的思考力］	［課題解決能力］ ［批判的思考力］	［コミュニケーション能力］ ［グローバルな視野］ ［自己表現力］
評価方法			授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

◆　何を学ぶか［授業内容］

1学期	音楽の歴史、音楽文化、音楽教育等における基礎知識の学習 課題設定
2学期	課題探求のための仮説・検証 （アンケート調査や関連機関への訪問、演奏等のアウトリーチ活動） 中間発表 研究論文の作成
3学期	発表用プレゼンテーション作成 研究論文の作成 課題研究発表会

◆　何を学ぶか［教材］

・課題研究メソッド
・課題研究ノート

◆　どのように学ぶか［主体的・対話的で深い学び］

・グループワーク等によるスキル学習
・情報収集をもとに仮説を立てる
・アンケートやフィールドワーク、実践的な活動等により調査研究を行う。
・論文を作成する

２．実施概要

（１）「GLOBALⅡ」の展開

課題研究テーマ一覧（次ページ）に示したように、今年度より、学類・コア科目ごとに10の研究グループを編成し、さらにグループ内で６～10班に分かれて課題研究を行った。

・理　数　学　類 … 数学・物理・化学・生物の４グループ
・人文社会学類 … 文学探究、歴史探究、国際理解の３グループ
・国際教養学類 … ７組、８組の２グループ
・音　楽　学　類 … １グループ

（２）実施方法

２年次全クラス共通で、水曜７限に「GLOBAL」の授業を実施し、次に示す２時間連続の授業「学類コア科目＋GLOBAL」と合わせて、週３時間「GLOBALⅡ」の授業を実施した。

・理　数　学　類 … 木曜５～６限
・人文社会学類 … 木曜６～７限
・国際教養学類 … 金曜６～７限（７組)、金曜５～６限（８組）
・音　楽　学　類 … 金曜６～７限

時間割の都合上、２年次教員全員が指導にあたることができるのは水曜７限のみであった。一方で、コア科目の時間には、他年次の教員が教科の専門性を生かして指導に加わるケースが、複数のグループで見られた。

（３）活動の経過

年度当初、今年度からの新しい指導体制について説明し、共通理解を図った。課題研究の成果を、年度末には４種類の成果物にまとめ、提出することを確認した。

①発表用パワーポイントのスライド　②A4版１枚の要旨（日本語）
③A4版１枚の要旨（英語）　④研究論文

４月中旬～５月末まで、新型コロナウイルスの影響で休校となったため、課題研究のスタートは実質６月からとなった。研究テーマを絞り込み決定するまでに、先行研究の調査などに多くの時間を要したので、テーマ決定が７月末になるようなケースもあった。

・10月１日・２日　グループ内の中間発表(岡山大学の先生によるオンライン指導・講評)
ルーブリックに基づいて生徒は相互評価を行い、発表後は評価表を交換してその後の改善に役立てた。
・１月21日・22日　グループ内の最終発表（２回目のオンライン指導・講評）
・２月３日　課題研究発表会（各グループの代表数班が、体育館や教室で発表）

新型コロナウイルスの影響で、校外での活動が大きく制限され、フィールドワークが難しい時期が続いたが、各学類で工夫して、外部講師の招聘、施設訪問、インタビュー、アンケートなどの活動を、かなり取り入れることができた。

（４）オンラインの活用

例年、岡山大学から課題研究の指導の講師として来校いただいているが、コロナ禍においてGoogle Meetを活用し、中間発表と最終発表を実施した。今後、新しい形のオンラインでの指導の在り方も研究をしたい。

（岡山大学の先生によるオンラインでの指導の様子）

GLOBALⅡ 課題研究テーマ 一覧　全体発表の代表班:◎　教室発表の代表班:○　※国際教養学類は、全ての班が英語発表

学類	コア科目等	番号	代表	班	課題研究テーマ
理数学類	Global Science 数学	01		1	日本のサッカークラブが経営難を乗り越えるために
				2	ヒートアイランド現象は緑化で緩和できるのか
			○	3	米の敵「ジャンボタニシ」への対抗策
				4	食品ロスと私たち
				5	生活習慣と成績との間に相関はあるのか？
				6	声援がスポーツに与える影響
			○	7	香川県ネット・ゲーム依存症対策条例は本当に意味があるのか？
				8	睡眠研究会
			○	9	打倒！COVID－１９！！
			○	10	AIによる介護
	Global Science 物理	02		1	バックウォーター現象～モデルを作っての研究～
				2	糸電話の拡張
				3	空気砲の有効活用
			○	4	紙飛行機をより遠くに飛ばす条件
			○	5	防音効果の高い構造って何？
			○	6	パスタの割れ方の研究
			◎	7	どれが最強の柱かしら
	Global Science 化学	03	○	1	高吸水性高分子の可能性
			◎	2	ナチュラルクリーニングの洗浄効果と環境への負荷に関する研究
				3	マイナスイオンと科学リテラシーに関する研究（ニセ科学にだまされないために）
				4	ビタミンCの必要性と摂取量
			○	5	環境浄化微生物・愛媛AIの消臭・除菌効果，利用法に関する研究
			○	6	プラスチック問題（生分解性プラスチックの性質，身近な環境の汚染状況）に関する研究
	Global Science 生物	04		1	私たちの生活と光触媒　－酸化チタンの光触媒効果を傷絆創膏に－
			○	2	アルギン酸ゲルをシート状にすることの有用性　－私たちの生活をより便利にするためのアイデア－
			○	3	印象的に伝えるために　－目立つ配色と伝える配色－
				4	新しい饑餓　－先進国特有の食生活の危険性－
				5	みんなのヒーロー“服薬ゼリー”　－薬に対する苦手意識を無くそう！－
			○	6	快適マスクライフ　－マスクの不快感を軽減するための改善案－
人文社会学類	文学探究	05	○	1	なぜ日本とギリシャで似た伝説の生き物が生まれたのか―ヤマタノオロチとヒュドラとの比較―
			○	2	死生観―宮沢賢治と小川未明を比較して―
				3	平安時代の「あはれ」―『竹取物語』『伊勢物語』『枕草子』の比較―
			○	4	『源氏物語』と『とりかへばや物語』の比較―「光」の持つ意味―
				5	近代の『源氏物語』恋と女性―与謝野晶子・谷崎潤一郎の『源氏』への想いから読み解く―
				6	太宰と梶井の死生観―梶井基次郎「のんきな患者」と太宰治「人間失格」を視座として―
	歴史探究	06	○	1	歴史的建造物の課題を探る
				2	岡山県の魅力の活性化～聖地巡礼編
			○	3	日本の教育格差について
			○	4	岡山県の魅力の再発見と発信
				5	中継地点　岡山
				6	電子化と教育の関係性
			◎	7	歴史的建造物を残していくために
	国際理解	07		1	発展途上国における水と健康の関係について－ナイジェリアの事例－
			○	2	岡山市における新たな視点での観光業の振興について
			◎	3	国際交流における姉妹都市縁組の役割と課題
				4	NPOの活動の質を高めるためには
			○	5	日本における技能実習制度の実態と展望
			○	6	視覚障がい者にとって住みやすい社会にするためには何が必要か
国際教養学類	Global Studies	08	○	7A	Let's reduce the waste of paper
				7B	Efforts to reduce air conditioner usage
			◎	7C	Non-Slaughtered Meat
				7D	To Improve our Academic Ability
			○	7E	Educational Videos on YouTube
			○	7F	Gender Gap
		09		8A	Invisible Poverty
				8B	Current Situation of the Japanese School System
				8C	The Language We Should Learn Next
			○	8D	Water in our Life
			○	8E	What we can do to protect the sea
				8F	Improve water pollution
				8G	How the fast fashion industry affects climate and our solution
音楽学類	Global Music	10	◎	1	ストリートピアノの現状と今後の活用の可能性
			○	2	誰もが楽しめる音楽の提供　～聴覚障害者への支援を中心として～
				3	ピアノの誕生と歴史と今後の変遷の一考察
			○	4	音楽がスポーツにもたらす効果
				5	音楽がもたらす心理的影響
				6	どんな音楽が伝わりやすいのか
				7	ユーフォニアムに関する研究

３．フィールドワークの実施

（１）フィールドワークの導入

SGH 事業においての課題の一つとして、地域でのフィールドワークを含む地域密着の取組が少なかったことが挙げられた。１年次での企業訪問（全員参加）や県主催の企業説明会等を通じた学習をもとに、２年次で地域におけるフィールドワークを行い、地域社会の課題の発見につなげることをねらいとしている。課題研究において、グローバルな視点を踏まえて地域課題の解決に向けた探究活動を行うと同時に、課題研究の質的向上を図るために、地域におけるフィールドワークを充実させ、グローバルな視点を持ちながらより柔軟な発想で地域課題に対する解決策を追求させる。

（２）「GLOBALⅡ」におけるフィールドワークの位置付け

「GLOBALⅡ」では、研究過程で何らかの情報収集が必要となった場合には、企業や公的機関等の訪問も含め、積極的にフィールドワークをするよう勧めている。また、研究を始める第一歩として、校外の施設を訪問する形を取ることもある。今年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延の影響で、外部の機関を訪問することが難しい場合もあったが、いくつかの講座やグループが、校外でのフィールドワークを実施した。また、実際に訪問することができない場合には、電話やSNSを使って聞き取り調査を行った。

（３）実施内容

訪問先	活動内容	活動単位
耳岩神社	地域の寺社の由来を読み解き、上代文学の歴史的背景、目の前にあるものから知識を広げる方法を学ぶ。	文学探究講座生
吉備路文学館	地元ゆかりの作家達の作品や経歴を知り、既習の日本文学史の中でどのような位置にあったのか、作品の味わいはどのようなところにあったのかを知る。	文学探究講座生
岡山市産業観光局 観光部プロモーション ・MICE推進課	外国人観光客誘致に関わる岡山市の取組についての聞き取り。	国際理解研究班
岡山市市民協働局 市民協働部国際課	岡山市と姉妹都市提携を結んでいる海外の都市との交流の現状と成果についての聞き取り。	国際理解研究班
岡山県県民生活部 国際課	岡山県として取り組んでいる国際交流の概要とその成果についての聞き取り。	国際理解研究班
岡山県立岡山盲学校	視覚障がい者にとって住みやすい社会を実現するために必要なことについての聞き取り。	国際理解研究班
岡山市地域振興課	岡山市における点字ブロックの設置とメンテナンスに関する聞き取り。	国際理解研究班
岡山県立岡山聾学校	授業参観、演奏会に関する打合せ。	音楽学類研究班
岡山県立岡山聾学校	演奏会	音楽学類研究班
岡山イコットニコット	ストリートピアノ演奏会	音楽学類研究班

４．今年度の成果と課題、次年度の取組

（１）成果

学類ごとにグループを編成し、コア科目を研究分野の柱としたことで、学類の特色や教科の専門性を生かした研究テーマを設定できたことが、生徒たちの主体的な学びの姿勢につながったと感じる。理系の生徒は数学や理科、文系の生徒は文学、歴史、国際問題等、音楽学類は音楽に関することを研究テーマに設定しており、自分たちが好きで、興味関心が高い内容であることが、より意欲的に探究する姿勢を引き出したと思われる。

前ページの一覧にもあるように、外部講師の招聘やフィールドワークの実施も、コロナ禍でありながら一定の取組を行うこともできた。

「Glocal High School Meetings 2021」（主催：文部科学省指定 グローカル型地域協働推進校探究成果発表委員会　共催：文部科学省）において、次のとおりの結果であった。

英語発表部門　「Non-Slaughtered Meat」　銀賞、生徒審査部門で全国２位を受賞
日本語発表部門　「どれが最強の柱かしら」　銅賞を受賞

また、「WWL･SGH×探究甲子園」において、次のとおりの結果であった。

「打倒! COVID-19 !!」の研究グループ　予選通過し、3月21日にオンラインで全国発表

（２）課題

研究テーマの設定に当たっては、事業の趣旨を踏まえ、学類の特徴や教科の専門性を生かすだけでなく、SDGsに関連する世界的な解決課題や、地域社会の改善に繋がる提案などを十分に意識するべきである。コア科目の性質上、文学分野等で関連付けが難しい分野もあったが、次年度以降は、コア科目の内容の検討や改善も含めて、カリキュラム開発をしていくことが必要である。また、担当教員のうち、週３時間すべての授業に関わることができない教員もいるので、生徒への指導の一貫性、継続性が保たれるように、関係教員が緊密に連携する必要があり、苦労があった。今後の検討課題として、よりよい指導体制を整えていく必要がある。

（３）次年度の取組

２時間連続の「GLOBALⅡ」と学類コア科目において、これまでの成果と課題を踏まえた実践を行い、その成果を検証する必要がある。

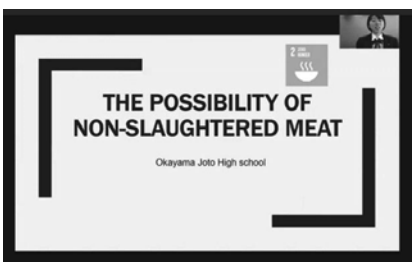
研究テーマの決定に当たっては、学類特有の科目の内容をより深めるとともに地域課題と自己との関わりから考察する視点を持って、SDGsを踏まえて研究課題を設定する。

リサーチクエスチョンの設定に当たっては、先行研究や事例からリサーチクエスチョンを設定する。また、そのリサーチクエスチョンに対する仮説を立てる。

研究計画書の作成に当たっては、研究の目的を明確にし、実行可能性を検討しながら研究計画書を作成する。

調査・研究・考察に当たっては、地域におけるフィールドワーク等によって得られた結果をもとに、分析・考察を行う。

研究内容のまとめ及び発表に当たっては、研究論文を作成するものとし、発表用のプレゼンテーション（スライド、ポスター等）を作成する。クラス発表を行い、課題研究発表会全体会でのクラス代表を選出する。



「Glocal High School Meetings 2021」の様子　他校への質疑応答・英語部門発表・日本語部門発表

岡山大学　指導教員一覧

No.	担当する課題研究の領域・テーマ	所属	職名	氏名
1	数学・データサイエンス【理数学類】	大学院環境生命科学研究科	教授	石原　卓
2	物理【理数学類】	大学院自然科学研究科	教授	岡田　耕三
3	化学【理数学類】	大学院自然科学研究科	准教授	寺西　貴志
4	化学【理数学類】	大学院ヘルスシステム総合科学研究科	助教	曲　正樹
5	生物【理数学類】	大学院環境生命科学研究科	准教授	荒川　健佑
6	文学探究【人文社会学類】	大学院社会文化科学研究科	教授	江口　泰生
7	歴史探究【人文社会学類】	大学院社会文化科学研究科	講師	松岡　弘之
8	国際理解【人文社会学類】	グローバル人材育成院	准教授	稲森　岳央
9	教育、ジェンダー【国際教養学類】	グローバル人材育成院	准教授	宮川　陽名
10	環境問題【国際教養学類】	大学院社会文化科学研究科	教授	田口　雅弘
11	音楽文化の普及【音楽学類】	大学院教育学研究科	教授	齊藤　武

外部講師、フィールドワーク等の活動

学類	活動の内容
理数	岡山理科大学の先生による講演会（5つの分科会）
理数	家電メーカー（パナソニック，小泉成器）へのメールによる質問
理数	アルギン酸ナトリウム製造の株式会社キミカへの質問
理数	マスクなどの衛生用品製造のアイリスオーヤマへの質問
理数	近隣の老人介護施設（けしごの里、白樺、）へのアンケート
理数	ロボット Palro（高齢者福祉施設向けモデル）について(株)富士ソフトへの問合せ
理数	茨城県農業総合センター農業研究所，国立環境研究所への問合せ
人文	講習会：講師　岡山県立記録資料館副館長　杉山一雄氏
人文	講習会：講師　岡山県立博物館学芸員主幹　秋山亮氏
人文	フィールドワーク　耳岩神社（岡山市東区長利）
人文	施設訪問：吉備路文学館
人文	国際協力機構（JICA）出前講座
人文	聞き取り調査：岡山市産業観光局観光部プロモーション・MICE推進課
人文	メールによる質問：岡山県中小企業団体中央会
国際	国際協力機構（JICA）出前講座
国際	日清食品グループへ、メールでのアンケート
国際	日生漁業組合へ、電話でのインタビュー
音楽	岡山県立岡山聾学校　授業観察と演奏会に関する打ち合わせ
音楽	岡山県立岡山聾学校　演奏会
音楽	岡山イコットニコット　ストリートピアノ演奏会

第３節　「GLOBALⅢ」の実施に向けて

（１）年間指導計画の作成

「GLOBALⅢ」は２単位の学校設定科目として３年次生希望者選択の個人研究とし、１～２年次生までの課題研究をさらに深化させ、生徒個人の在り方・生き方に関わるような探究課題を設定した課題研究や、海外研修での発表等を行う。また、総合的な探究の時間と連動した時程外の学習の単位認定についての研究も行う。SGH事業で実施してきた「GLOBALⅢ」も参考に、今年度に年間指導計画を作成することができた。

（２）教科・科目の目標

教科「GLOBAL」の目標は次のとおりである。

グローバル化の進展に伴い、地球規模の課題解決や、異なる文化を背景とする国際社会の在り様が問われている。そこで、本校が積み重ねてきたグローバルリーダー育成の実績を生かし、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えた人材を育成する。すなわち、国際社会や経済界、地域のリーダーとして活躍することで、我が国及び人類の未来に貢献する。

科目「GLOBALⅢ」の目標は次のとおりである。

「GLOBALⅡ」での研究テーマを継承し、「海外修学研修」で得たネットワーク等を活用し、研究に必要な情報収集や協力者を確保し、探究型学習を極める。「専門的学習」と「海外体験」の実績により、高度な思考力、コミュニケーション能力を身に付ける。探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、国際的・社会的課題解決に関わる地域の課題にも目を向け、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。グローバル人材育成に重点を置く大学や海外の大学への進学を目指す。

（３）「GLOBALⅢ」の実施に向けて

「GLOBALⅡ」の学習をもとに、生徒の主体的キャリア形成に資する研究となるよう、高度な課題研究に個人研究として取り組ませる。生徒同士で発表し合い、ディスカッションを行う。研究を深化させるために、地域におけるフィールドワークを通じて、データの独自性や信頼性を上げ、研究の充実を図る。研究成果の発信を行うため、発表資料や論文作成（英文含む。）、コンテストへの応募などを推進する。また、できるだけ多くの発表機会を確保するため、大学や学会で開催される発表会への参加を計画する。三年間の課題研究の取組の体験レポートを作成する。

またSGH事業では、高いレベルで課題探究学習を個人研究として行い、高度な思考力、コミュニケーション能力を身に付けるとともに、論理的な英語の文章を作成し、独自の発想を発信する能力と態度を養うことをねらいとして実施しており、これらの学習によって生徒の思考力、コミュニケーション能力、実践力が高められたことが各種調査から認められたことから、今後もこの内容を継承するとともに、生徒の主体的なキャリア意識の形成を支援できるよう、引き続き地域におけるフィールドワークを充実させ、発信するための発表の機会を確保する。

（４）教員間での方針の共有

「GLOBALⅢ」の時間は、原則として３年次所属の教員が指導する。教員間での方針の共有は、現在の「GLOBALⅡ」を指導している教員、カリキュラム開発の担当教員、２年次の教員、学類主任等、複数の教員で指導計画等の作成段階から関わりを持ってきた。コアメンバーでも指導の在り方、選択生徒の在り方、担当教員の在り方等の議論を重ねてきた。

生徒の選択者も決定し、次年度当初からスムーズに行えるようにしていきたい。

学校設定教科･科目　開設計画書

令和３年度

学校名　岡山県立岡山城東高等学校　　記入責任者　大西　宏和

教科	種別	１ 学習指導要領に示された教科　② 学校設定教科 ① 各学科に共通する教科　　２ 主として専門学科において開設される教科
	名称	GLOBAL
	目標	グローバル化の進展に伴い，地球規模の課題解決や，異なる文化を背景とする国際社会の在り様が問われている。そこで，本校が積み重ねてきたグローバルリーダー育成の実績を生かし，グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えた人材を育成する。すなわち，国際社会や経済界，地域のリーダーとして活躍することで，我が国及び人類の未来に貢献する。
	指導教員の免許教科	国語　地理歴史　公民　数学　理科　保健体育　芸術　外国語　家庭　情報
科目	名称	GLOBALⅢ
	目標	「GLOBALⅡ」での研究テーマを継承し，「海外修学研修」で得たネットワーク等を活用し，研究に必要な情報収集や協力者を確保し，探究型学習を極める。 「専門的学習」と「海外体験」の実績により，高度な思考力，コミュニケーション能力を身に付ける。探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、国際的・社会的課題解決に関わる地域の課題にも目を向け、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。 グローバル人材育成に重点を置く大学や海外の大学への進学を目指す。
	単位数	２
	内容	［課題研究の深化］ 総合的な探究の時間「GLOBALⅡ」で収集した情報に対し，更なる分析・考察を加えることにより課題研究を深化させる。 ［研究成果の発信］ 国内や国外で開催されるコンテストや発表会を利用して，研究成果を発信する。 ［GLOBALの集約］ GLOBALでの学びを，レポートやポスターおよびエッセイなどにまとめ，必要に応じて利用する。
	内容の取扱い	［課題研究の深化］については，以下の手法などを取り入れる。 ・校外でのフィールドワーク ・校内でのシミュレーション ・研究に関連の深い教科・科目や学際領域の自主的学習 ［研究成果の発信］および［GLOBALの集約］については，ICT機器を積極的に利用する。また，海外文化体験研修や学類研修および海外修学研修などで得た人材を利用して，英語によるプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を磨く。 校内の教職員は，生徒が自主的に研究活動を実施できる場を提供する。外部機関との連携や，外部人材の活用を積極的に進める。
	教科用図書等	各自の研究テーマに応じた文献を使用
	その他	

学 校 設 定 教 科・科 目　　年 間 指 導 計 画

令和３年度

学校名　岡山県立岡山城東高等学校　　記入責任者　大西　宏和

教科名	科目名	単位数	科・ｺｰｽ・類型	学年	講座数
GLOBAL	GLOBALⅢ	2	普通科	3	3

単元名 題材名	事項名 （教材名）	時数	形態	指導内容	指導上の留意点，教材等
課題研究の深化	先行研究の調査 校外でのフィールドワーク 校内でのシミュレーション 教科・科目の自主的学習	26	個人研究	・普遍性や独自性を確認する。 ・新聞記事や論文の検索,実地調査により，一次文献を入手する。 ・観察や実験をデザインし，再現性のあるデータを得る。 ・関連する教科・科目の学力を深める。	・深化の方針に反映する。 ・データの信頼性を上げ，研究の充実をはかる。 ・研究結果の分析や考察に客観性をもたせる。 ・行政や大学等の教育機関で企画される学習会に参加する。 ・学際的な領域についても理解を深める。 ・活動を通じて得られる人脈を大切にする。
研究成果の発信	非凡な発表資料の作成 国内の発表会やコンテストへの参加 インターネットを利用した海外への発信	26	個人研究	・ICT機器を利用して，効果的な発表資料にまとめる。 ・大学や学会で開催される発表会への参加を計画する。 ・研究成果を論文にまとめ，コンテストに応募する。 ・英語による発表資料をつくり，海外の交流校などに発信する。	・表計算ソフトやプレゼンテーションソフトを使いこなす。 ・研究発表に伴う質疑応答をこなし，研究の質を高める。 ・海外での発表に繋がるコンテストなども視野に入れる。 ・海外での研修経験を利用する。
GLOBALの集約	GLOBALでの学びを伝えるレポート 海外への進学や留学の模索 ２年次生の研究へのアドバイス	26	個人研究	・GLOBALⅠ・Ⅱ・Ⅲを通して学んだ体験をレポートにまとめる。 ・海外の大学への進学や，国内の大学に進学後の留学を視野に入れた活動を行う。 ・後輩の課題研究に対して，経験者の立場からアドバイスを行う。	・ポスターやレポート等の作成に活用する。 ・海外文化体験研修や学類研修および海外修学研修などで得た人脈を活用する。 ・研究の過程で体験した困難とその克服について紹介する。
	時数計	78			
備考					

第４節　課題研究発表会・成果報告会

１．課題研究発表会

（１）目的・実施の形態

「GLOBALⅠ」、「GLOBALⅡ」の中で取り組んできた課題研究が、グローカルな視野と主体的・協力的な実践力を備えるための取組であることを発表を通して再確認する。また、その学習成果を１・２年次全員で共有することにより、学類や年次を超えて知的好奇心の高揚を図るとともに、次年度に向けた学習への意識付けの場とする。

なお、今年度は新型コロナウイルス感染症対策の一環として、午前中のステージ発表について、体育館へは２年次生のみが入場し、１年次生は各ホームルームでのオンライン視聴の形を取った。

（２）日程　　令和３年２月３日（水）

9：00　開会行事＜体育館＞
　　開会挨拶・趣旨説明
9：15　ステージ発表＜体育館＞
　　「GLOBALⅠ」
　　「GLOBALⅡ」
11：50　昼食・休憩
13：00　教室発表＜HR教室＞
　　「GLOBALⅠ」
　　「GLOBALⅡ」
14：30　閉会行事＜放送＞
　　指導講評・閉会挨拶

（３）「GLOBALⅠ」の発表内容

【ステージ発表】

①　１年６組　「制服から変えよう　城東のジェンダーレス化」
②　１年８組　「私たちが知らないこと　～教育格差の現状～」

【教室発表】

１年１組　「いじめを身近に感じてもらうために」
　　「あなたがプラスチックごみを減らす番です」
　　「小さな違いが大きな違い」
１年２組　「日本の所得格差　世界を見て知る改善対策」
　　「循環型社会への意識改革」
　　「ミツバチを守ろう」
１年３組　「城東の英語は好きですか～English has to be spoken!～ 」
　　「Let's think!　～モノを買う・捨てる時の基準～」
　　「Don't wanna be lonely in Okayama」
１年４組　「フェアトレードによって飢餓は軽減されるのか」
　　「最高の睡眠とは？」
　　「目指せ！ジェンダーレス！～より多くの女性の社会進出を目指して～」
１年５組　「絶滅危惧種と共存するために」
　　「す語彙　～小学校の英語教育について～」
　　「城東高校の周りの用水路をきれいにする方法」
１年６組　「学校からの募金を増やすために」
　　「Saving Water ～私たちができる節水」
　　「廃棄大国日本　～廃棄・規格外野菜の利用法～」
１年７組　「児童養護施設への《正しい》支援」
　　「同性婚への第一歩～今私たちにできること～」
　　「Let's Make a Better Straw!!」
１年８組　「フードバンクを通じて私たちができること～アンパンマンは君さ！～」
　　「性別は無限大」
　　「あなたの意識が地球を救う」

（４）「GLOBALⅡ」の発表内容

【ステージ発表】

③　人文社会学類　「歴史的建造物を残していくために」
④　人文社会学類　「国際交流における姉妹都市縁組の役割と現状」
⑤　国際教養学類　「Non-Slaughtered Meat」
⑥　音楽学類　「ストリートピアノの現状と今後の活用の可能性」
⑦　理数学類　「どれが最強の柱かしら」
⑧　理数学類　「ナチュラルクリーニングの洗浄効果と環境への負荷に関する研究」

【教室発表】

・人文社会学類（国際理解）
「岡山市における新たな視点での観光の振興」
「日本における技能実習制度の実態と展望について」
「視覚障がい者にとって住みやすい世の中にするために
～点字ブロックから考える」

・人文社会学類（歴史探究）
「歴史的建造物は本当に安全なのか」
「教育格差」
「岡山県の魅力の再発見と発信」

・人文社会学類（文学探究）
「なぜ日本とギリシャで似た伝説の生き物が生まれたのか
―ヤマタノオロチとヒュドラの比較―」
「死生観―宮沢賢治と小川未明を比較して―」
「『源氏物語』と『とりかへばや物語』の比較」

・理数学類（数学）
「香川県ネット・ゲーム依存症対策条例について」
「打倒！COVID-19！！」
「AIによる介護」
「米の敵「ジャンボタニシ」への対抗策」

・理数学類（物理）
「紙飛行機の発射角と飛行距離の関係」
「防音効果の高い構造って何？」
「パスタの割れ方」

・理数学類（化学）
「高吸水性高分子の可能性」
「水質について」
「生分解性プラスチック」

・理数学類（生物）
「アルギン酸ゲルをシート状にすることの有用性」
「印象的に伝えるために～目立つ配色と伝える配色～」
「快適マスクライフ」

・国際教養学類
「Let's reduce the waste of paper」
「Relating educational videos to educational inequality」
「Women's Social Advancement Barrier
～The Gender Gap we can see～」
「Water in our life」
「What can we do to protect the sea」
「How the Fast Fashion industry affects the climate and what we can do?」

・音楽学類
「誰もが楽しめる音楽づくりに関する研究
～聴覚障がい者への支援を中心として」
「音楽がスポーツにもたらす効果」

（５）成果と課題

①「GLOBAL Ⅰ」

年度の前半でスキル学習を行い、実際に研究活動を行ったのは９月以降であった。コロナ禍のなか限られた時間内で、研究テーマを決定、計画を立て、調査、実験を経て発表できる形にまでまとめたことは評価できる。

ステージ発表に選ばれたグループについては、事前にお互いの発表を見せ合い、問題点や

想定される質疑を出し合うことで、クラスでの発表に修正を加えての発表であった。どのグループも練習の成果を発揮して堂々と発表し、質問に対してもできる限りの対応をした。一方で、ステージ発表後半の２年次生による「GLOBALⅡ」の発表では、深く掘り下げた研究内容や見やすくまとめられたスライド､興味を引きつけるわかりやすい説明などに刺激を受け、次年度への意欲を高めた。また、教室で視聴する例年と違った形になったが、２年次生の積極的な質問に刺激を受けたであろう。

午後の教室発表では、ステージ発表のグループを除き、各クラスから３グループずつが発表した。ステージ発表グループと同様、クラスで代表に選ばれてから修正を加えて発表に臨んだが、午前中のステージ発表に刺激を受けたようで、どのグループも堂々と発表した。教室での発表であり、体育館に比べてリラックスした雰囲気であったためか、質問にも自分たちなりに対応することができていた。発表以外の生徒は、発表年次に関係なく自分の興味あるテーマの発表会場に行き、ここでも積極的に質問する姿が見られた。

１日を通して、２年次生や同級生の発表を見ることで刺激を受け、次年度の「GLOBALⅡ」で自分たちがすべきことを具体的に考えることができる良い機会となった。質問については積極的な姿勢は見られたが、単に疑問を発する質問から、その場にいる者の理解がより深まり、広がり、また次なる課題が見えてくるような質問へと、質問のレベルが上がることを期待したい。

②「GLOBALⅡ」

「GLOBALⅡ」の授業で、学類ごとの学校設定科目（コア科目）ごとに編成された班で取り組んできた課題研究の成果を、プレゼンテーションソフトを使ってまとめ、それぞれのグループごとに事前グループ内発表を行い､代表を選出した｡発表会当日は午前の全体会で６班、午後の分科会で30班がプレゼンテーション形式で発表した。

各班の発表では、各学類コア科目の特徴に沿った研究内容を、プレゼンテーションソフトに加え、実物を使用したり音楽を聴かせたりして、より効果的に伝えようとする姿勢が見られた。いずれの発表も、文献調査だけでなく、校内外へのアンケートや校外施設へのフィールドールドワーク、実験を取り入れたものであった。また、学類ごとの班編成にしたことで、英語による発表や音楽に関する発表等、バラエティに富んだ内容となった。

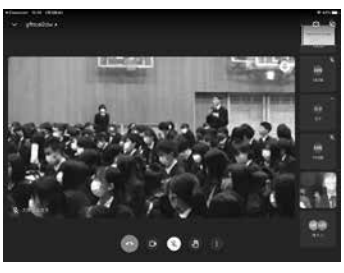
午前の全体会では、いずれの発表班も大勢の聴衆の前で堂々と発表を行い、その後の質疑応答も大変活発であった。中には、的確な質問とそれへの応答によって、聴衆全体の理解が深まる場面も見られた。午後の分科会では、10会場に分かれて発表を行い、午前同様に活発な質疑応答が行われた。午後は３回の発表にしたことで生徒の発表機会が増え、より多くの生徒が充実感、達成感を得ることができた。また、コア科目ごとに教室を割り当てたことで各発表会場の特徴が明確になり、聴衆は聴きに行く発表を選びやすくなった。

課題としては、日程的な厳しさが挙げられる。特に今年度は新型コロナウィルス感染症による休校のため、研究のスタートが遅れ、発表会直前まで発表内容がまとまらない班が多数あった。そして、代表発表班決定から発表会までの短い期間中に他の行事もあり、とても多忙な中、昼休みや放課後を使うことを余儀なくされた。課題研究の成果をプレゼンテーションソフトにまとめ、より効果的な発表の形に仕上げるには、やはり時間が必要である。それをいかに授業時間の中で対応していくかは課題である。

③全体

実施後の教員に対してのアンケート結果から、「１年の教室視聴はよかった」、「さすがは２年だと思った」、「質疑応答の場面で１人の生徒が繰り返さず、多くの生徒に質問の機会を提供させたい」、「遠隔で行う際、１年生も質疑応答ができるようにしてはどうか」、「午後の部での１年の教室がさみしい」といった記載があった。次年度以降に生かしたい。

体育館での発表の様子



発表・質疑応答の様子を１年次の教室にオンラインで配信

２．成果報告会

（１）目的

研究指定第２年次の研究成果を分析し報告するとともに、本校教職員が成果と課題を共有することで、今後の事業の取組や学習指導の改善に資する。

（２）日程　　令和３年２月３日（水）

15：15～15：20　開会・校長挨拶
15：20～16：10　成果報告
・概要説明・「GLOBAL Ⅰ」（グローバル係主任）
・「GLOBAL Ⅱ」・カリキュラム開発等（教務課長）
・異文化交流の深化（国際課長）
・自主性・自律性を育成する取組（生徒課長）
16：10～16：25　意見交換
16：25～16：40　指導助言　岡山県教育庁高校教育課
閉会

成果報告会の様子

（３）概要

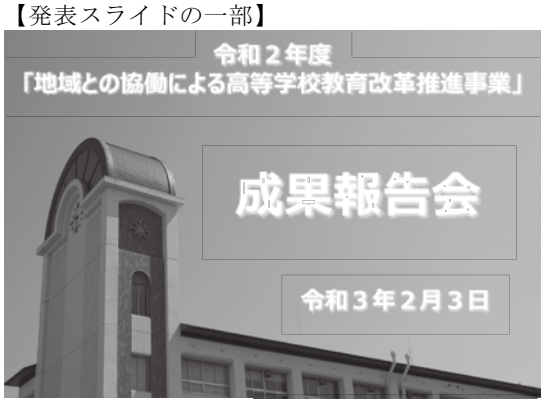
他の高等学校等や大学、小中学校、さらに県内企業等の地域に対しても、広く周知するため、成果報告会を毎年度実施することとしている。様々な外部機関から学校の研究に対する意見を受けることで、学校の研究開発を加速させることをねらいとしている。

管理機関をはじめ、課題研究で御指導いただいた岡山大学の先生、コンソーシアム委員、県内他校の先生方にお越しいただき、本校の取組や成果と課題について発表を行った。

当日は、本校職員も事前にiPadに配付した資料を見ながら参加した。成果と課題を共有することで、今後の事業の取組や学習指導の改善を図りたい。

iPadを持参し本校職員も参加

【発表スライドの一部】



岡山県立岡山城東高等学校

１年次生　発表成果

令和２年１０月１９日　地域と連携した「高校の魅力化」フォーラム

全生徒による統計グラフコンクールへの応募作品の作成。
優秀な１９作品を応募。

２年次生　発表成果

○**WWL・SGH×探究甲子園**
データサイエンス１チームが応募、予選通過、３月21日全国発表。

○**Glocal High School Meetings 2021**（全国オンライン課題研究発表）

日本語発表部門 銅賞

←他校の発表への質疑

英語発表部門 銀賞
生徒審査部門 全国２位

令和３年１月30日　オンラインミーティングに参加

JOTO STEEEEM 2020
（Science,Technology,Engineering,Environment,Entrepreneurship,English,Math）

初日、講師による説明。
その後、全グループの現時点での英語による課題研究発表。

その後は、現地アメリカとオンラインを活用し、課題研究を深める。

第５節　JLP の取組

（１）はじめに

JLP とは、Joto Learning Project の略称で、生徒の主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を促す授業の在り方についての研修会を企画・運営し、授業改善を図るものである。スタッフは、教務課長、生徒課長、進路指導課長、各教科主任である。

（２）取組と成果

今年度は、教務課、進路指導課、生徒課と協働して、創造的・批判的思考力を持ち、何事にも自主的・自律的に行動できる生徒の育成も目指し、各種研修会を通して授業改善を図ることとした。

・教務課との協働

教務課の 0JT 担当者と授業参観や研修会を企画・運営することができた。第１回は、各教科内でグループを作り９月に相互授業参観、その後、グループ内と教科内で研修会を行い、10 月に全職員で 0JT Ⅰを実施し、授業の在り方を共有した。第２回は、11 月に異なる教科でグループを作り他教科授業参観を行い、12 月に 0JTⅡ研修会をグループ内で行い、授業の在り方や育てたい生徒の力についての共有化を図った。

・生徒課との協働

生徒課長と部活動の在り方について意見交換を行った。勉強と部活動の両立に悩む生徒が多いことが、学校自己評価アンケートでも明らかとなっていた。これを改善するため、部内交流会や部活動合同研修会を企画し、部内や部外から、先輩から後輩へと生徒間で問題解決策を話し合う場を提供する予定であった。残念ながら今年度はこの企画は実施に至らなかったが、生徒会が中心となって、このテーマを扱った広報新聞を発行し、その中で先輩達からの勉強方法に関する助言があり、後輩を励ましてくれた。

・進路指導課との協働

若手教員が増える中、様々な指導方法の共有化が必要となり、小論文伝達講習会と教科研修会を実施した。８月の小論文伝達講習会では、採用２～３年目の若手教員が講師となり、小論文に取り組む手法の確立や新たな視点を用いた題材の扱い方の共有化を図った。講師となった若手教員は講習会の準備のため外部講習会で得た知識をもとに資料を作成し、ベテラン教員は若手の活躍を楽しみながら講習会に参加し、会は大変盛況であった。また、５教科を中心に、各教科で外部講師を招いて新学習指導要領と大学入学共通テストに対応するための教科研修会を 12 月に実施することができた。忙しい時期であったが、今後の指導方法や授業改善のため、精力的に会に参加された姿が印象的であった。

（３）課題と次年度の取組

教務課、生徒課、進路指導課と考え方や意見を共有し、協働を推進することができた。教務課とは、0JT 担当者と引き続き協力して、授業改善の一端を担い続け、授業の更なる改善や定期考査の在り方を検討していきたい。生徒課とは、今年度実施することができなかった部活動合同研修会を次年度に是非実施したいと考えている。進路指導課とは、教員研修会を引き続き実施したいと考えている。さらに、次年度は教員を対象に面接指導講座や外部講師を招いて生徒の面接対応講座なども企画したい。

第３章　異文化交流の深化

１．先進的な取組を取り入れた英語の授業の実施

（１）実施内容

グローバル人材に求められる英語の実践的コミュニケーション能力を強化し、海外体験や国際交流の効果を最大限のものにするため、３年間の英語の指導過程や指導法、評価方法の研究開発を行う。これまで国際教養学類で指導を行ってきた様々な言語活動、例えば、スピーチ、ディベート、ディスカッションなどを他の学類の授業においても取り入れる方策を研究する。GTEC の成績分析をもとに、英語力を向上させる授業展開について研究開発を行う。

（２）３年間の指導過程・指導内容の策定

昨年度末、次期学習指導要領における４技能５領域、CEFR との整合性を意識し、文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」拠点校指定時（平成 24 年、25 年）に作成した CAN-DO リストの改訂を行った。このリストの内容は、各年次、年度当初に、1 年間もしくは卒業時の達成目標として示した。また、本年度実施した研究授業の指導案も、このリストに基づいて作成された。年次によって取り組む内容にばらつきがあることが本校外国語科の課題であったが、CAN-DO リストの改訂で３年間の見通しが持てたこと、また授業を見合う風土が本事業によって醸成されたことで、各年次、リテリングを中心に、それぞれの年次で取り組むべきアウトプット活動を充実させていくという授業が、外国語科全体を通してデザインされている。

（３）指導法の改善

実践の共有、指導法の改善を目指し、以下の公開研究授業を行った。

日　時	科　目	授　業　内　容
９月 14 日	コミュニケーション英語Ⅲ（３年次）	読解した内容のリテリング
10 月 26 日	コミュニケーション英語Ⅰ（１年次）	ドラマ形式のリテリング
11 月 16 日	コミュニケーション英語Ⅱ（２年次）	リテリングを中心とした４技能統合型言語活動
12 月 18 日	英語表現Ⅰ（１年次） ＊外国語指導助手との共同授業推進研修会と兼ねる	ディベート
２月１日	コミュニケーション英語Ⅲ（２年次） ＊校内のみ	サマリーライティングを中心とした４技能統合型言語活動

（４）評価方法の開発

本年度は、毎週月曜日５限に、外国語科会議を開き、完成した CAN-DO リストの内容を、いかに各授業の評価、ルーブリックに落とし込むかを中心に協議を行った。これらの会議と公開授業における助言者として、就実大学教授小山敬一氏に複数回来校していただいた。

（５）成果

GTEC における４技能総合の CEFR が、昨年度の B1 割合が 8.8%だった本年度２年次生の B1 の割合が、22.6%と大きく伸びた。本年度３年次の B1 の割合は、昨年度 26.5%から 39.0%とこちらも大きく伸びた。本年度 1 年次は、昨年度 12 月受検に対して、8 月の受検であったが、概ね例年並みの力をつけていると考えられる。英検準１級取得者が、昨

年度 11 人に対して、本年度 35 人となったことは特筆すべきことである。その他、外部試験の活用に関しては、人数、受験する試験の種類（TOEFL,TEAP,IELTS など）ともに増えており、英語学習に対するモチベーションが高まっていると考えられる。また、以下のように、昨年度以上に、英語運用能力を評価された。

・第 15 回全国高校生英語ディベート大会 24 位（64 校中）
・第 10 回上智大学全国高校生英語弁論大会優勝 1 名、３位 1 名
・全国高校生第 69 回チャーチル杯争奪全日本高等学校生英語弁論大会５位
・第 59 回全国高等学校生徒英作文コンテスト入選
・第 25 回岡山県高校生英語エッセイコンテスト入選
・Glocal High School Meetings 2021 英語発表部門銀賞、生徒審査部門全国第２位

（６）次年度に向けて

CAN-DO リストの運用をさらに進めるため、授業内での具体的な活用を考察・検証し、生徒自身が４技能５領域に関する能力の到達度評価を行う自己評価シートの作成を行う。また、公開研究授業をさらに積極的に行い、そこで得られる知見をシラバス、CAN-DO リスト、自己評価シートに反映させるとともに、これらの授業改善の中で、高度な英語運用能力の育成につながるスピーキングを中心とした言語活動､評価の手法を蓄積する。

公開研究授業の様子

２．海外研修の充実（JOTO STEEEEM 2020）

２年次国際教養学類に向けた新たな取組

（１）プログラムの概要と導入の経緯

コロナ感染拡大の影響により、例年行われている海外への学類研修や、昨年度から行われていた岡山大学留学生との交流が今年度は中止となった。そのため２年次国際教養学類の生徒を対象とした異文化交流の機会が減少した。そこで、11月から今年度新たな試みとしてISA・GIP US協力のもと、STEEEEM（Science,Technology,Engineering,Environment,Entrepreneurship, English and Math）を実施した。オンラインで現地のオーディエンス(大学生・大学院生、研究者、ビジネスパーソンなど)とつなぐ。アメリカで行われているStudent Centered Learningと探究型学習法に基づいた授業であり、これは生徒を中心とした参加型授業である。これにより、生徒のリーダーシップ性、理系的思考力、プレゼンテーション力、課題解決能力等の育成を図る。本来同プログラムは１年間という長期の実施を想定されているが、今年度は２・３学期にかけ計４回行われる。

（２）概要

コロナの世界的な終息が見通せない中、生徒は海外研修を通して新しい人に出会い、新しい考え方に触れる貴重な機会が失われている。一方で、「with コロナ」の新しい生活様式、新しい学び方の模索も始まっている。海外研修でしか得ることができなかった体験を、日本国内での研修とオンラインプログラムを通して実現するハイブリット型グローバル教育プログラムを実施する。日本に居ながらグローバル社会を身近に感じ、グローバル社会の一員として自分の将来を考えさせたい。

（３）目的・ねらい

国際教養学類の生徒がこれまでに進めてきた課題研究をさらに深め、英語でのプレゼンテーションでアウトプットすることを最終ゴールとする。最終プレゼンテーションではオンラインでアメリカと繋ぎ、現地のオーディエンス（大学生・大学院生、研究者、ビジネスパーソンなど）に向けて研究成果を発表する。生徒が自ら考え、意見を創り、アウトプット（発信）していくことに重点を置いた生徒を中心とした参加型の授業を実践する。

（４）グローバル・リーダーシップのコンセプト

①リーダーシップ

・社会問題に共感する･、枠にとらわれない考え方、アクションを起こすことの大切さへの理解を深める(CONNECT:Design Thinking)。
・本質的な問題・課題を分析することを通して課題解決力を磨く。

②高大接続の考え方と理系的思考力

・大学、大学院（特に理系分野）で求められる理系的思考力、プレゼンテーション能力の向上を目指す。
・理系分野の知識を身に付けることが目的ではなく、正しく物事を捉え、自分なりの意見・アイデアを創造し、論理的に表現する理系的思考を身に付けることを目的とする。

③SDGs

・国際的な目標であるSDGsについて考え方を学び、SDGsの観点からどのような社会課題が身の回りに存在するのかを考えることで、課題解決の発想力を磨く。

④English（コミュニケーションのツールとしての英語）

・課題の指摘、課題解決策の提案をより広いオーディエンスに向けて発信するためのツールとしての英語力の向上を目指す。
・コミュニケーション、チームワーク、リーダーシップに重要な「語る力」を磨くことで、自分のアイデアに対して共感を得るスキルを身に付ける。自分のストーリーを考えるプロセスを通して自分の個性を見つけ、自分自身に対する理解を深める(STEEEEM:Passion & CONNECT:Storytelling)。

（５）日程・内容

	7組	8組		言語
Day 1 11月13日 (金)	1時間目 8:45am - 9:30am	-	Kick Off STEEEEM: Global/Passion	日本語
	2時間目 9:40am - 10:25am	-	Presentation	英語
	-	3時間目 10:35am – 11:20am	Kick Off STEEEEM: Global/Passion	日本語
	-	4時間目 11:30am - 12:15am	Presentation	英語
Day 2 11月20日 (金)	-	1時間目 8:45am - 9:30am	CONNECT: Design Thinking (1)	英語
	-	2時間目 9:40am - 10:25am	CONNECT: Design Thinking (2)	英語
	3時間目 10:35am – 11:20am	-	CONNECT: Design Thinking (1)	英語
	4時間目 11:30am - 12:15am	-	CONNECT: Design Thinking (2)	英語
Day 3 12月11日 (金)	1時間目 8:45am - 9:30am	-	CONNECT: Storytelling (1)	英語
	2時間目 9:40am - 10:25am	-	CONNECT: Storytelling (2)	英語
	-	3時間目 10:35am – 11:20am	CONNECT: Storytelling (1)	英語
	-	4時間目 11:30am - 12:15am	CONNECT: Storytelling (2)	英語
Day 4 1月15日 (金)	-	1時間目 8:45am - 9:30am	Design Thinking /Storytelling Reflection	日本語
	-	2時間目 9:40am - 10:25am	CONNECT: Final Presentation	英語
	3時間目 10:35am – 11:20am	-	Design Thinking /Storytelling Reflection	日本語
	4時間目 11:30am - 12:15am	-	CONNECT: Final Presentation	英語

〇STEEEEMと振り返りのセッション
- 本校で対面実施
- 各組の授業を日本人講師１名が担当

〇CONNECTセッション
- Zoom,Google Classroomを使いオンラインで実施
- 生徒との比率、最大６：１で現地からDiscussion Leaderが参加
- 各組にネイティブのFacilitator１名、Head Coordinator１名がオンラインで参加し授業を担当

[DAY1]　11月13日(金) Kick Off ― STEEEEM : Global/Passion, Presentation
[DAY2]　11月20日(金) Design Thinking
[DAY3]　12月11日(金) Storytelling
[DAY4]　 1月15日(金) Final Presentation

[DAY1] プログラムの説明、自己発信力、人生におけるPassionの大切さについて講義をいただいた。その後生徒は現段階での課題研究内容を発表し、今後の研究についての質問、アドバイス等を受けた。

[DAY2] Zoomのブレイクアウトセッション機能を使い、２～３人１組で、現地のファシリテーターとオンラインで繋いで活動を行った。ディスカッションのテーマは「なぜアメリカ人はマスクを着用しないのか」「マスクをつけてもらうにはどうすべきか」だった。グループ内で意見を出し合い、大勢に向けたプレゼンを想定し発表する練習をし

た。生徒は柔軟に発想をめぐらせ、自信をもって意見を出し合っていた。

[DAY3]　[DAY2]と同じファシリテーターとつながり、生徒がそれぞれ何に興味を持ち、なぜその課題研究テーマにしたのかをグループで共有した。原点に立ち返ることで、生徒は研究の意義を再度認識し、発表の際も「自分事」として内容を理解した上で他者に伝えることの大切さを理解した様子であった。

[DAY4]　これまで学んだことを踏まえ､最終の課題研究発表の形式と同様英語で発表をする。

（６）オンラインの活用

①使用機器

・Surface20台（生徒２人で１台）
・Wi-Fiルータ10個（１個につきPC２台を接続）

②使用アプリケーション

・Zoom（オンラインミーティング時に使用）
・Google Classroom（課題提出時に使用）

（７）次年度以降の課題及び改善点

現地アメリカと繋ぐオンライン形式のプログラムであったため、時差の関係上午前中の実施が決まっており、時間割の変更が必須であった。１クラス２時間連続であるということ、今年度の２年次の複雑な時間割構成を考えると、次年度以降長期的に実施する際あまり現実的ではない。早い段階でプログラム実施が決定するのであれば、次年度の時間割を決める段階で考慮されることが望ましい。

また、これは長期プログラムであることから、本来は時間をかけて生徒と現地のファシリテーターが深い関係を築くことができると聞いた。実施するならば長期期間を見据え、随時生徒が質問に答えてもらうというような、生徒各自のペースで研究を進める環境を整えたい。また環境整備という点において、今回図書館のパソコンを用いたが、Wi-Fi環境を整えるための環境整備に苦労した。一人一台端末機器の整備がされれば、教員の負担はかなり削減できると感じた。

（８）取組の様子

初日、講師による説明。その後、全グループの現時点での英語による課題研究発表。

その後は、現地アメリカとオンラインを活用し、課題研究を深める。

Google Classroomの活用

３．海外研修の充実（令和元年度海外修学研修の実施）

「GLOBALⅡ」での活動を通じて、選考されたメンバーを欧米諸国へ派遣し、課題研究の成果をもとに海外の大学や高校、国際機関などで意見交換を行うことにより、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を身に付けることをねらいとしている。前年度も 10 名の２年次生をイギリスへ派遣する予定で準備を進めた。しかし残念ながら、全ての事前研修を終えた後、出発目前で新型コロナウイルス感染症蔓延による政府からの不要不急の海外渡航禁止の要請を受け、やむなく中止となった。

主な計画は次のとおりである。現地高校として、新たな学校 ST JOHN THE BAPTIST SCHOOL を訪問することを予定していた。交流する現地高校の確保が非常に難しい中、受け入れを決めてくださった学校であっただけに、訪問できなかったことが大変残念だった。また、これまではロンドン郊外にある語学学校の寮に宿泊していたが、ロンドン市内のホテルに宿泊するよう変更したため、各研修地へのアクセスが良く、ミュージカル鑑賞など、内容がさらに充実したものになるよう計画していた。

なお、旅行日程の概要を下に示す。

旅行日程（概要）

月日	地　名	内　　容
3/6(金)	岡山空港発 羽田空港着 羽田空港発 ヒースロー空港着	
3/7(土)	ケンブリッジ大学	キャンパスツアー 日本人留学生との意見交換会
3/8(日)	ロンドン	フィールドワーク （複数方面に分散）
3/9(月)	ロンドン	ビジネス地区、シティー地区見学 大英博物館見学
3/10(火)	現地校 Cranford Community College	交流活動 （プレゼン、ディスカッション等）
3/11(水)	現地校 ST JOHN THE BAPTIST SCHOOL	交流活動 （授業参加、ディスカッション等）
3/12(木)	国際機関 The Commonwealth Marlborough House	見学、講義等 （ミュージカル「オペラ座の怪人」鑑賞）
3/13(金)	ヒースロー空港発	
3/14(土)	羽田空港着 羽田空港発 岡山空港着	

令和元年度　海外修学研修実施までのスケジュール

日　程	時　間	場　所	内　　容
10 月　30 日　(水)			応募〆切
11 月　12 日　(火)			希望理由書提出〆切
11 月　18 日　(月)			一次（書類）選考結果発表
11 月　21 日　(木)	16:00～ 18:30	e-スタジオ	応募者面接
11 月　26 日　(火)	職員会議後	指導会議室	選考会議
11 月　29 日　(金)			結果発表
12 月　18 日　(水)	16:20～ 17:30	e-スタジオ	第１回事前研修（業者、保護者、生徒）
1 月　9 日　(木)	16:20～ 17:30	PC 教室	第２回事前研修（業者、生徒）
1 月　15 日　(水)	16:20～ 17:30	PC 教室	第３回事前研修（業者、生徒）
1 月　29 日　(水)	16:20～ 17:30	PC 教室	第４回事前研修（生徒）
2 月　5 日　(水)	16:20～ 17:30	PC 教室	第５回事前研修（生徒）
2 月　19 日　(水)	16:20～ 17:30	e-スタジオ	第６回事前研修（業者、保護者、生徒）
3 月　4 日　(水)	中止		出発直前打ち合わせ
3 月　6 日　(金)			出発
3 月　14 日　(土)			帰国
3 月　19 日　(木)			終業式にて帰朝報告

令和元年度　海外修学研修　事前研修計画

	日　時	場　所	内　　容
第1回	12/18（水） 16:20-17:30	e-スタジオ	業者説明会（旅行計画の詳細、旅行代金の支払い、海外旅行保険加入の案内など)、事前研修計画の説明　　※保護者参加
第2回	1/9（木） 16:20-17:30	PC 教室	キックオフガイダンス（目的再確認、海外研修の心得など)、ロンドン・フィールドワーク準備、研究テーマ設定
第3回	1/15（水） 16:20-17:30	PC 教室	グローバル社会で活躍するために（アイデンティティ、ポジティブシンキングなど)、プレゼン準備
第4回	1/29（水） 16:20-17:30	PC 教室	ロンドン・フィールドワーク準備、プレゼン準備、 大学交流準備、高校交流準備
第5回	2/ 5（水） 16:20-17:30	PC 教室	ロンドン・フィールドワーク準備、プレゼン準備、 大学交流準備、高校交流準備
第6回	2/19（金） 16:20-17:30	e-スタジオ	業者説明会（集合、旅程詳細、服装、持ち物、出入国書類、海外旅行保険証など）　　※保護者参加

４．海外研修の充実（海外文化体験研修）

本研修は、言語活動を通じて様々な文化体験を深めることを目的として、１年次の希望者生徒を対象に計画していたが、新型コロナウイルス感染症蔓延のため中止となった。
以下には、今年度の計画をまとめた。

（１）コース

ホームステイ体験を優先しているため、今年度もオーストラリアとカナダの２コースを企画した。

・オーストラリア
訪 問 先：ブリスベン　１家庭に本校生徒１名でのホームステイプラン。
研修形態：南半球のオーストラリアでは、この時期に学校が通常授業をしている。そこで、「サンドゲイト地区公立中等学校」を訪問し、交流会をしたり、授業を受けたりするプログラムを設定した。カナダコースにあるような英語レッスンもその学校にお世話になり、大学訪問や観光も行う計画をした。

・カナダ
訪 問 先：バンクーバー　１家庭に本校生徒１名でのホームステイプラン。
研修形態：午前は語学学校での英語レッスン、午後はアクティビティやエクスカーション、週末は各家庭で過ごすプログラムを設定した。研修には、大学キャンパスツアーなどもあり、カナダの多様な文化体験ができるよう計画した。

（２）期間と募集人数

・オーストラリア：７月 19 日(日)～８月２日(日)　15 日間　募集生徒　20 名程度
・カナダ：７月 19 日(日)～８月 2 日(日)　15 日間　募集生徒　80 名程度

（３）今後の課題

新型コロナウイルス感染症蔓延のため、海外で研修を行うことが難しい状況が続いている。その代案として、オンラインを活用して海外交流や研修を行うこと、また、県内や国内で異文化に触れることのできる研修を行うことも検討中である。生徒が有意義な研修を行えるよう何らかの方法を考えたい。

５．海外姉妹校・提携校等の受け入れ、外国人留学生の受け入れ

（１）海外交流校の受け入れ

本校には韓国に、金海外国語学校、慶南外国語学校２校の交流校がある。毎年、本校国際教養学類２年次生が６月に学類研修の一環として両校を訪問し、９月、10 月には両校からの修学旅行の受け入れを行うという相互訪問による交流を行っている。今年度は新型コロナウイルス感染症蔓延のため、本校から交流校への訪問も交流校からの本校への訪問も中止となった。昨年度訪問した生徒たちはバディーやホストファミリーと交流を続けている。今後の状況を考慮しながら、引き続き交流を継続させるよう方策を検討したい。

（２）外国人留学生の受け入れ

本校では、長期留学生の受け入れも積極的に行っている。ホストファミリーを本校生徒の中から募集し、学校生活でも家庭生活でも留学生と交流する機会を設けている。本年度はのべ２名の留学生を受け入れた。

一人は、ドイツ・リューネブルクより留学しているマレーネ・ソフィ・ルチェさんで、令和元年９月から令和２年５月初旬まで滞在した。マレーネさんは、昨年度１月末のITC(Intensive Training Camp)ではディベートにも積極的に参加するなど、様々な活動に貢献した。感じたことや、日々の生活のことなど、ネイティブのような流暢な英語でスピーチを行ってくれており、本校生徒に大きな影響を与えていた。残念ながら、新型コロナウイルス感染症予防のため、本校の休校が決定した後、滞在期間を２ヶ月短くして５月初旬に帰国した。

もう一人は、同じくドイツ・ルートヴィッヒスフェルデより留学しているメラニー・アントニウスさんで、令和２年 11 月から令和３年７月末までの滞在予定である。両親からの影響を受けて日本に興味を持つようになり、その後、自身でもマンガやアニメをきっかけにして日本のことを積極的に調べ始めたことが、今回の留学へと繋がった。

当初は９月から留学を開始する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で渡航延期が余儀なくされた。11 月よりようやく留学を開始することができたものの、日本での滞在は東京での２週間のホテル生活で始まった。

本校では２年次国際教養学類に所属している。学校生活が始まると、できるだけ多くの授業を受けたいと、充実した時間割を作成した。特に、週５回の本校教員による日本語のレッスンは毎回大変楽しみにしているようである。はじめは、主なやりとりが英語であったが、みるみる日本語が上達してきている。部活動ではバレーボール部と茶道部の活動に参加している。茶道部の活動では、ノートにメモをとりながら、熱心にお点前の手順を覚えており、他の部員へも良い刺激となっている。

いつも礼儀正しく、誠実な人柄で、友人からはもちろんのこと、教員やホストファミリーからも厚い信頼を得ている。新型コロナウイルス感染症予防で制約が多い中ではあるが、あらゆる機会を利用して、本校での、また日本での留学生活を精一杯楽しんで帰国してもらいたい。また、本校の生徒たちにとっても、彼女と過ごす時間が貴重な異文化交流の機会となることと期待している。

コロナ禍で、今年度も新たに留学生を迎えることができたのは、ひとえにホストファミリーとして協力してくださる多くのご家庭の御理解、御協力のおかげであり、本当に感謝している。

ITC で skit を演じるメラニーさん

６．今年度の成果や課題、次年度の取組

（１）成果

コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱの授業では、ウォームアップ帯活動として、スピーキングを取り入れ、教科書の各レッスンの内容と関連性のある話題を設定しショートスピーチややり取りの活動を行い、コミュニケーション英語Ⅱ・Ⅲの授業では、各レッスンのパート毎またはレッスンのまとめとして、スピーキングやライティングを通してリテリングや内容要約を行う活動をそれぞれ１年間継続することができた。１年次では、ALT との協同授業でもスピーキング活動に力を入れ、プレゼンテーションやディベートを取り入れているので、生徒は意欲的かつ活発に活動することができた。２年次では 11 月よりコミュニケーション英語Ⅲの教科書を活用して、予習不要で１レッスンの概要を２時間で把握し、その後に内容理解を深めるためのスピーキングやライティング活動を行う生徒の自主性を高めるための授業を導入することができた。また、スピーキング能力の向上を確認するために、７月下旬から８月上旬にかけて１・２年次が、３月には１年次が校内スピーキングテストを実施することができた。

CAN-DO リストを２学期に全生徒へ配布し各年次の達成目標を明示した。それにより、授業立案において教員間の意思疎通がスムーズとなり、各年次担当者間で継続可能な活動と各課に特化できる活動を計画でき、外国語科の研修会（公開授業等を含む）で、指導方法や各種活動を共有することができた。

各授業の取組の成果として、英語外部試験の成績が顕著に向上し、３年次生の約４割の生徒が CEFR における B1 レベルを取得していること、１・２年次生の各種大会やコンテストでの優勝や入賞、ESS 部の全国英語ディベート大会での健闘、Stanford e-Japan 講座のオンライン受講、トビタテ！留学 JAPAN や AIG 高校生外交官プログラムへの応募など、生徒の意識も向上し積極的に活動することができた。

英語授業の改善の一環として、年に３回の公開授業を予定していたが、今年度は ALT との共同授業推進研修会と校内研修会を含めて合計５回の公開授業を実施することができた。新型コロナウイルス感染症の影響で様々な行事が中止となる中、校外から延べ 54 名の先生方に参加して頂き、アドバイザーとして就実大学教授小山敬一氏から指導講評を頂くという有意義な研修会を開催でき、本校外国語科教員の意識も益々高められた。

海外体験や国際交流が新型コロナウイルス感染症の影響で殆ど中止となったが、新たな取組として国際交流プログラム STEEEEM が 12 月より導入され、短期間ではあるが国際教養学類の生徒に国際交流の場を提供することができた。また、例年実施している国際教養学類の行事である ITC（Intensive Training Camp）も形態を変えて本校で実施することができた。

（２）課題、次年度の取組

外国語科教員の授業改善に対する意識が向上し様々な活動に積極的に取り組んでいるが、CAN-DO リストとの整合性や有効性、また、生徒の達成目標に関する評価方法についての問題点が残されている。次年度は、更なる授業改善に取り組みながら、CAN-DO リストの再度の見直しと授業内での活用方法を考察・検証し、生徒自身が４技能５領域に関する到達度の評価を行えるように自己評価シートの作成を目指す。これと同時に、高度な英語運用能力の育成に繋がるスピーキング活動を中心とした言語活動や評価方法を蓄積し共有化を図る。

海外体験や国際交流に関しては、現在の状況を考えると次年度の取組にもかなりの制限があると予想される。課題としてあげられるのは、今年度導入できた STEEEEM の対象生徒や導入時期である。今年度は、国際教養学類のみを対象としたことと、アメリカの大学生と中心に交流を行ったので時差の問題があり時間割の対応とに課題が残った。また、１年次対象に実施していた海外文化体験についても、次年度は、オンラインを活用した語学や文化体験研修の企画を検討中である。何らかの形で、国際交流を継続したい。

幸いにも、生徒の国際交流に対する意欲の高さや保護者の御理解のもと、現在もドイツからの留学生を受け入れ、授業や行事を通して国際交流を深めている。次年度も、多くの方の協力を得て新たな留学生を受け入れるなど、国際交流を継続していきたい。

第４章　自主性・自律性を育成する取組

１．社会貢献活動・ボランティア活動の実施

（１）活動内容について

社会貢献活動では生徒課が主催する活動と生徒会・部活動・有志による活動と大きく分けて２つのカテゴリーで実施した。

生徒課が主催する活動では、１年次生全員を参加の対象として実施した。今年度は、あわじ宿泊研修清掃活動、小学生学習支援、スポーツ支援ボランティアは新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となったが、「献活デー」（社会貢献活動の日）では、コロナ禍の状況の中でも多くの事業所に受け入れていただき、生徒にとって大変有意義なものとなった。新たな試みとしてオンライン（Zoom）を活用した老人介護施設との交流ができたことは今後の社会貢献活動を広めていく参考になったと思われる。２年次の学類に特化した活動については、調査研究実施期間が休校になったため、来年度へ向けての準備期間に切り替えた。

生徒会・部活動・有志による活動では、活動自粛の中、参加可能なボランティア活動を模索し取り組めた。特に有志（個人）によるボランティアでは、生徒自身ができることに意欲的に取り組んだ成果だと感じられた。

①　生徒課主催の社会貢献活動

(a) 参加実績

・あわじ宿泊研修清掃活動（５月中止）
・学類に特化した社会貢献活動の調査研究（５～７月中止）
・小学生学習支援、スポーツ支援ボランティア（８月中止）
・献活デー（９、10 月１年次生全員実施）
・吉備路ウォーク清掃活動（１年次全員実施）

(b) 活動の様子

献活デー（学童保育みつばち）

献活デー（けしごの里）

献活デー（古都の森）

献活デー（オンライン交流会）

（c）生徒の感想

・みつばちクラブ（学童保育施設）

私はもともと子どもが好きだったため、学童保育での活動を選んだが、思ったより大変だった。何人もの子が一緒に遊ぼうとそれぞれ違う遊びを提案してきたり、子ども同士のトラブルが起きたりしたからだ。子どもがケガをしたとき、すぐ先生を呼びに行ったが、自分自身の判断力・行動力の無さに改めて気付かされた。小学生と遊べたことは楽しかったが、勉強を教えてあげたらその問題が解けるようになったと喜んでくれたこともうれしかった。しかし、まだ自分が子どもであるような気がした。社会貢献活動は他人を助けるための活動だと思っていたが、自分も成長させてくれるものだと感じた。

・けしごの里（特別養護老人ホーム）

大通りに面しているわけではないのに、お菓子のゴミなどが思った以上に落ちていて少し驚いた。はじめは草がたくさん生えていたが、みんなで草抜きをしたらとてもすっきりしてやりがいを感じた。日常生活で自分の住んでいる地域については考えることはあっても、自分が通っている学校の地域については深く考えたことがなく、あまり興味もなかった。しかしこの活動を通して新たな発見もあり、自分にとってはよい経験になった。こうやって学校周辺の施設をきれいにしていくことで、もっと城東高校が地域に愛されるようになるといい。

・古都の森（老人保健施設）

職員の方の指示により、外回りと中庭の草取りと落ち葉拾いをした。終わったとき「ありがとう、助かったよ」などと感謝の言葉をいただき、それを聞いただけでこの活動ができてよかったと思った。普段は入居されている方の介護など仕事が山のようにあり、外回りの掃除まで手がまわらないと思うので、私たち高校生が少しでも手助けできたらうれしい。私たちは様々なところへ出向きお手伝いをさせてもらうことで、社会の役に立てたと達成感が生まれたり、自分の将来を考えるきっかけになったりするはずだ。地域との距離が近くなり、お互いに協力し合うことが地域の活性化につながると思うので、これからもこのような活動には参加したい。

・VERZ 城東（高齢者向け住宅）とのオンライン交流

今年は新型コロナウイルスの影響で、高齢者の方とは直接触れ合うことができなかったため、Zoom を使ってオンライン交流を試みた。お互いにスクリーンに映し出される相手側の様子を見ながら一緒に「ふるさと」を歌ったのだが、私はこの時にピアノ伴奏を担当した。それから高齢者の方は手話を交えて「糸」を歌ってくださったり、戦争中の話をしてくださったりした。私たちにはとても貴重な経験になったが、これが毎年続けばさらに内容も充実するはずで、どんどん改良していってほしい。

② 生徒会・部活動・有志の社会貢献活動

（a）活動実績について

・高知県宿毛市の広報活動ボランティア（７月サッカー部）
・県立美術館ミュージックコンサート出演（８月管弦楽部）
・ファジアーノ岡山　ホームゲーム　ハーフタイム（10 月合唱部・ダンス部）
・JR 東岡山駅と協働①　医療従事者へのメッセージ（書道部・美術部）
・JR 東岡山駅と協働②　点字ブロック清掃（テニス部）
・制服業者との協働　女子スラックス採寸サポート
・山陽女子ロードレース補助員（陸上競技部）
・大会運営補助員（卓球部）
・ヘアドネーション
・小学生オンライン授業

（b）活動の様子

広報活動ボランティア（サッカー部）

制服業者との協働（採寸作業）

JR 東岡山駅との協働（美術部・書道部）

JR 東岡山駅との協働
（点字ブロック清掃　テニス部）

（c）生徒の感想

・広報活動ボランティア（高知県宿毛市　広報誌：サッカー部）

感染症対策をしっかりしてくださり遠征を受け入れてくださった黒潮町の方々に心の底から感謝しています。安心してサッカーを楽しめたお礼に、地元の広報活動に感染症対策に対するメッセージを送ることで協力させていただきました。県を越えて微力ながら、その地域の力になれたことを嬉しく思います。

・JR 東岡山駅との協働（医療従事者への応援メッセージ：書道部）

コロナ禍の中で不安な日々を過ごされている人たちに少しでも言葉で勇気を与えられるような活動がしたいと思っていたときに、東岡山駅の方から医療従事者の方々に向けてのポスター制作の依頼をいただき、今回書かせていただきました。多くの人が行き交う駅で掲示していただくことで多くの人の目に留まり、私たちの思いが届いていると嬉しいです。

・JR 東岡山駅との協働（点字ブロックの清掃活動：テニス部）

今回テニス部で JR 東岡山駅の協力のもと清掃活動をした。最初は作業が多くて大変だったが、全員が集中して作業をすると、短い時間でもとても駅をきれいにすることができた。この活動を通して一人ひとりの小さな力を合わせることで大きな力を生み出すことができる事を感じた。また、誰かのために何か自分にできる事があるということを実感できて嬉しかった。

・制服業者との協働（女子スラックス採寸）

今年から女子スラックスが導入されることになった。購入を希望する生徒の採寸作業のサポートの募集を聞いて私は参加した。販売員の方と一緒に採寸作業しながら、女子の制服に似合うように多くのデザインを考案してくださったことや「男子はズボン、女子はスカート」の固定概念に縛られているなど日頃聞けないような話を伺った。作業を通して知らない分野を学べたことは自分に取って価値ある体験となった。

２．生徒会活動や委員会活動の活性化

（１）活動内容について

代表委員会で出た案件や各委員会で対応できるものは何かを話し合い、作業を分担して、行えるようにした。現時点ではそこまで多くの活動はできていないが、今後クラス意見箱で出た意見に対して、委員会で対応できることは積極的に委員会で対応していく。話し合いの様子から、みんなが過ごしやすい学校づくりに貢献していきたいと考えている様子が見られた。コロナ禍で例年通り活動できない部分が多い中、できることは何かを考えて各委員会が活動した。自分たちの学校生活を見直し、よりよい学校にしていこうという意識が見られた。

（２）代表委員会及び各種委員会の活動

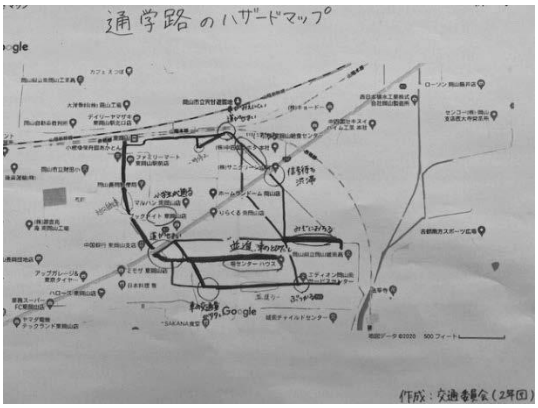
（a）実施した内容

・リーダー研修会（生徒会執行部・評議委員・各種委員会委員長・生徒有志）
・体育用品の使い方についての注意喚起（体育委員会）
・校内行事の代替となる球技大会（体育委員会）
・翠緑祭での規律ある行動の呼びかけ（風紀委員会）
・携帯電話・スマートフォンの使用マナーについてのアンケート（風紀委員会）
・携帯電話・スマートフォンの使用マナー向上に向けての啓発活動（風紀委員会）
・通学路のハザードマップ作成（交通委員会）
・体育館前トイレのスリッパを新調（美化委員会）
・女子トイレ個室内に小物棚を設置（美化委員会）
・きれいなクラス大賞（美化委員会）
・教室内にサーキュレーター設置（保健委員会）
・教室のドア・照明器具の消毒（保健委員会）
＊昨年実績は６項目。今年度は 12 項目に増加。

（b）活動の様子

リーダー研修会（討論会）

風紀委員会（校内掲示作業）



交通委員会（ハザードマップ）

風紀委員会（ポスター作品）

（c）委員会活動実践報告（風紀委員会の取組）

本校では携帯電話の使用については、平成 26 年に生徒が使用ルールを決めて携帯電話の持ち込みや使用が認められた経緯がある。しかし近年、携帯電話の機能向上や日常生活における使用形態が以前と異なってきており、様々な問題が生じている。校内での携帯電話を禁止する学校が多い中で、本校でも禁止の意見が出ることもあった。マナーやルールを守りながら携帯電話を使用できる本校独自のスタイルを持続させるために、生徒が自ら行動を起こした。風紀委員会が実態を検証し、報告することで、生徒同士で使用マナーを守るという意識の高揚を促すことができた。

◎アンケート結果　風紀委員分析

①自分自身は守れていると思っている生徒が殆どであることに対して、他人に対しては守れていないと感じている生徒が多い。

②生徒と教員で使用マナーの意識調査の結果が真逆になっている。

（生徒　よい：７　悪い：３　　教員　よい：３　悪い：７）

→①②から、他人からどう見られているかを考えて行動できていない生徒が多いことが考えられる。

③「校内で機器から音を出すこと」、「歩きながらの使用」、「校内での娯楽目的での使用」の項目で、守れていない生徒が多い。

④記述欄で「娯楽目的での使用の定義か分からない」と答えた生徒が多い。

→③④から、ルール自体を知らない（把握していない）ことや、細かく定義を設定しないと判断できない生徒が多いことが考えられる。

＜現状の課題＞
○ルール自体を理解できていない人が多い
○娯楽目的の使用が多い　→・定義に個人差　　・あいまいな表現
・セーフとアウトの区別が分からない
○自分自身の意志が弱い

＜呼びかけていくべきこと＞
○ルールの再確認
○ルールが設定されている理由まで説明する
○学校としてルールを作ることはできるが、守るのは一人一人の意識だということ

＜具体的な行動内容＞
○目に見える形で掲示
→・教室　・職員室前　・保健室前　・昇降口　など
○SHR で呼びかけ

携帯電話・スマートフォンの使用に関するアンケート

●以下の質問に該当するものに〇をしてください
1　自分の携帯電話・スマートフォンの使用マナーについて

よい　どちらかと言えばよい　どちらかと言えば悪い　悪い

2　城東生の携帯電話・スマートフォンの使用マナーについて

よい　どちらかと言えばよい　どちらかと言えば悪い　悪い

●以下の質問に対するあなたの考えを記述してください
3　城東生の携帯電話・スマートフォンの使用マナーに関して感じていることや気になっていることはありますか？

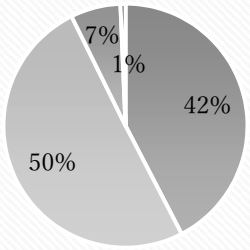
4　携帯電話・スマートフォンの使用マナー向上のために必要なことは何ですか？

●生徒会宣言の内容について、守れている場合は〇を、そうでない場合は×を記入してください
携帯電話・スマートフォンの使用マナー
（平成 26 年度生徒会宣言）
以下の行為をしない
1．　他人を誹謗中傷する書き込み　→（　）
2．　個人情報の流出　→（　）
3．　授業中・SHR での使用　→（　）
4．　校内で機器から音を出すこと　→（　）
5．　歩きながらの使用　→（　）
6．　職員室前での使用　→（　）
7．　校内での娯楽目的での使用　→（　）
8．　校内での電力を使っての充電　→（　）

令和２年度　携帯電話・スマートフォン　**使用マナーに関する意識調査集計結果**

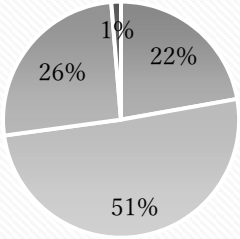
令和２年 11 月 27 日

１年次　自分自身



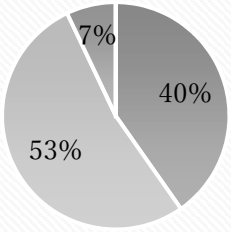
- よい 128
- どちらかといえばよい 152
- どちらかといえば悪い 20
- 悪い 2

１年次　城東生



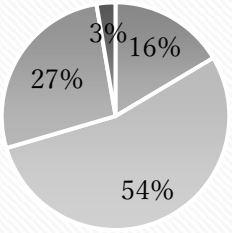
- よい 67
- どちらかといえばよい 153
- どちらかといえば悪い 78
- 悪い 4

２年次　自分自身



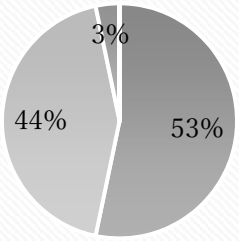
- よい 120
- どちらかといえばよい 157
- どちらかといえば悪い 21
- 悪い 0

２年次　城東生



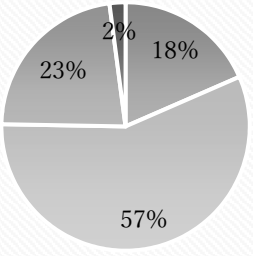
- よい 49
- どちらかといえばよい 161
- どちらかといえば悪い 80
- 悪い 8

３年次　自分自身



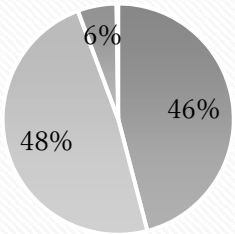
- よい 179
- どちらかといえばよい 146
- どちらかといえば悪い 11
- 悪い 0

３年次　城東生



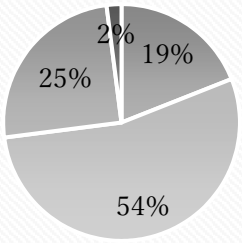
- よい 62
- どちらかといえばよい 191
- どちらかといえば悪い 76
- 悪い 7

全体　自分自身



- よい 427
- どちらかといえばよい 455
- どちらかといえば悪い 52
- 悪い 2

全体　城東生



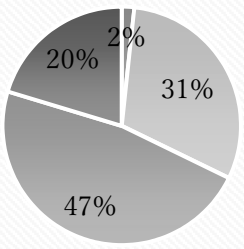
- よい 178
- どちらかといえばよい 505
- どちらかといえば悪い 234
- 悪い 19

回答数　１年次　302
２年次　298
３年次　336
生徒合計　936

教員　60

総計　996

教員　城東生



- よい 1
- どちらかといえばよい 16
- どちらかといえば悪い 28
- 悪い 12

３．今年度の成果や課題、次年度の取組

（１）社会貢献活動について

①　成果

・定期的な活動が中止になったが、実施できる社会貢献活動を生徒が模索し取り組めたことは、積極的に関わりたい意識が定着してきたと言える。
・企業との協働による社会貢献活動が新たな活動領域となった。
・昨年よりも部活動単位や生徒個人で社会貢献活動に参加した人数が増加した。
・Zoom 等、オンラインで参加できる社会貢献活動が行えた。

②　課題

・団体規模や大人数では、活動の制限や施設までの移動が困難であった。
・感染症予防の観点から、これまで行ってきた活動ができなかったことや人と対面する活動が困難であった。
・学類の特性に特化した活動は、計画や内容が不十分であった。（実施できず）

③　次年度の取組

・感染症対策や参加人数を調整し実践できる内容を計画的に生徒へ情報提供し、安心・安全を確保した上で実施する。
・リモートでできる活動を広げて ICT 環境を活用させる。
・学校と地域・企業とが連携し、持続できる社会貢献活動を定着させる。その際、学類の特性も関連づける。

（２）生徒会活動や委員会活動の活性化について

①　成果

・生徒会と代表委員会、各種委員会の内容を議論する場が増えた。
・アンケート調査や全校生徒へ呼び掛ける機会が増え、既存の行事・活動やルールについて考えることができた。
・生徒の考えや意見を教員側へプレゼンテーションなどで主張することができた。

②　課題

・校内の委員会活動から地域と関連した活動に移行できない。
・充分な調査研究などの活動時間の確保が困難であった。
・委員会の特性もあるが、委員会によって活動実績や内容に偏りがある。

③　次年度の取組

・生徒の活動を校内はもとより、地域やメディアへ向けて情報発信する。
・各種委員会において、調査研究のテーマを年度初めに設定し、年間３回を目安に実施状況を調査・分析・評価できる流れを定着させる。
・生徒主体で現状にあった改革（ルール）を進められる機会を増やす。特に、リーダーシップを取ってプレゼンテーションによる主張ができる力を向上させる。

第５章　カリキュラム開発

１．カリキュラム・マネジメントの推進

（１）目的

本事業において、生徒に習得させる資質・能力として「創造的・批判的思考力」「高度な英語運用能力」「グローバルな視野と多様性の理解」「自主的・自律的な行動力と社会貢献意識」を設定している。これらの資質・能力を習得させるためのカリキュラム開発であり、それらのカリキュラムが生徒の成長に寄与しているかどうかを検証するためのカリキュラム・マネジメントである。本来は、すべての教育課程に対して行うべきカリキュラム・マネジメントであるが、本事業においては地域との協働による探究的な教育活動に焦点を当てて行うことで、生徒の資質・能力の変容をより把握しやすくなるであろうと考えている。すなわち、カリキュラム・マネジメントの推進により、本事業の成果目標の達成度を測りながら生徒の取得すべき資質・能力を伸長させることを目的としている。

（２）カリキュラム・マネジメントの実施に向けて

①　経緯

本事業に特化したカリキュラム・マネジメントでは、一過性のものとなり継続的にカリキュラムを見直していくことができない。そこで、教科・科目、総合的な探究の時間及び特別活動を主軸として、学校行事、生徒会活動などを有機的に結びつけながら学校全体としてのカリキュラム・マネジメントの実施方法を模索してきた。つまり、将来的に令和４年度から実施される学習指導要領に対応できるようにシステムを構築する必要がある。そのシステムを構築していく中で、本事業に流用できる部分を試験的な運用として実施することで、本事業の目的にも期することができ将来的な本校の課題であるカリキュラム・マネジメントの実施に向けた準備もできると考えている。現在、計画しているものは青森県立青森高等学校のカリキュラム・マネジメントを参考にしている。

②　概念（Concept）

図１は、本校のグランドデザインを抜粋したものである。

本校の学校教育目標にある「進取の気性を持ち、自主的・自律的に行動していく態度を養う」を基本に、「育成したい生徒像」の一つとして「自主的・自律的に行動することのできる生徒」をあげている。

これをカリキュラム・マネジメントの中核をなす概念（Concept）としている。

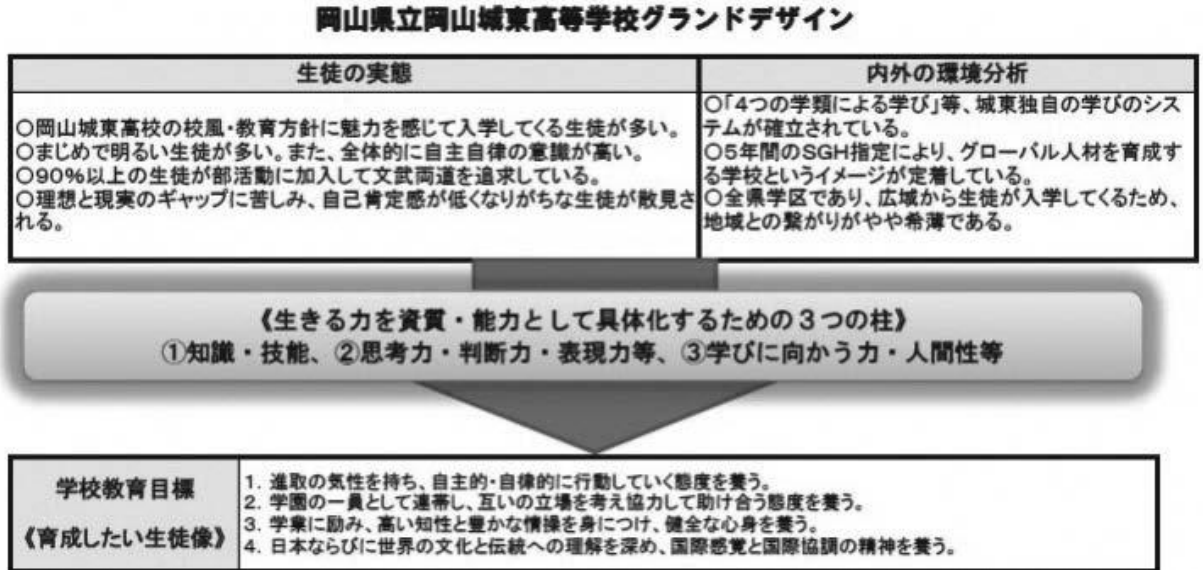


図１

③　システム（Phase Ⅰ～Ⅲ）

Phase Ⅰ

・グランドデザイン

・本事業において、生徒に習得させる資質・能力の細分化（表１）

育成したい資質・能力	細分化した資質・能力
創造的・批判的思考力	「基礎学力」「論理的思考力」「批判的思考力」 「課題解決能力」「ICT活用能力」
高度な英語運用能力	「基礎学力」「コミュニケーション能力」「自己表現力」 「グローバルな視野」
グローバルな視野と 多様性の理解	「グローバルな視野」「コミュニケーション能力」 「論理的思考力」「批判的思考力」「ICT活用能力」
自主的・自律的な行動力と 社会貢献意識	「課題解決能力」「コミュニケーション能力」 「自己管理能力」「人を大切にする心」

表１

・城東高校で育みたい「10の資質・能力」（学びのポータル）
「基礎学力」「論理的思考力」「批判的思考力」「課題解決能力」
「コミュニケーション能力」「自己表現力」「自己管理能力」「グローバルな視野」
「人を大切にする心」「ICT活用能力」
　図２は達成困難度を球の大きさで表し、自主・自律の度合いに合わせて色を変えた概念図である。

・学校行事等と「10の資質・能力」の関連づけ

・「熟達スケール」（羅針盤＝共通言語）
「習得」→「上達」→「熟練」→「探究」
資質・能力の到達度を表す基準となるものである。

Phase Ⅱ

・教育課程
令和４年度から実施の学習指導要領に対応した教育課程

・10の資質・能力(仮)のルーブリック（Big Chart）
表２を参照

・Competency Baseのシラバス（Small Chart）
第２章「GLOBAL Ⅰ」「GLOBAL Ⅱ」の実施を参照

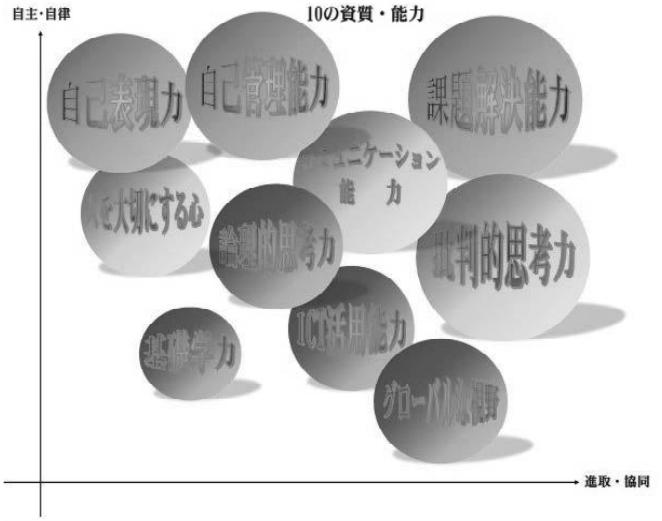


図２

Phase Ⅲ

・実践すべき課題
授業、考査、評価等の見直し

１０の資質・能力(仮)のルーブリック

10の資質・能力(仮)		基礎学力	論理的思考力	批判的思考力	課題解決能力	コミュニケーション能力	自己表現力	自己管理能力	グローバルな視野	人を大切にする心	ICT活用能力
定　義		知識及び技能として身につける必要のある学力。教科書の内容が概ね理解できる。	知識及び技能を十分に習得した上で、それらを駆使しながら客観的な根拠を提示しようえで自分の考えを組み立てることができる力。	物事を多面的な視点で捉え、自分と他者の考えを比較・検討しながら自分の意見を論理的に構築していくことができる力。	取り組むべき課題に対して、仮説を立て、協働しながら論理的に答えを導き出すことができる力。	他者の気持ちを慮り、集団の調和を保つように行動することができる力。人の話をよく聴き、自分の考えをわかりやすく人に伝えることができる力。	自分の考えや思いを、自分の言葉を使って正確に他者に伝えたり、形のあるものとして表現することができる力。	広い視野をもち、物事を効率よく処理するために、自分の内的・外的要因を適切に伸ばすことができる力。	様々な資料から、世界で起こっている事象を知り、それらの事象が地域や社会などのように関わっていくのかといったことに興味・関心をもつこと。	社会における円滑な人間関係を築くことを考え、他者の話をよく聞いて相手を理解するように努めること、自己肯定感を高め自分の事を大切にすることで、他者にも優しく接するようになること。	ICT機器を利用して、自分の考えをまとめることができる力。また、協働して課題に取り組む際にツールとしてICTを活用できる力。
三要素	知識・技能	◎	○								○
	思考力・判断力・表現力		◎	◎	◎	◎	○	○			○
	学びに向かう力、人間性等			○	○	○	○	◎	◎	◎	
熟達スケール	S：探究 主体的に自分と社会との繋がりを理解し、取り組むべき課題を発見し、その解決に向け試行錯誤することで学びに向かう力を醸成する。	知的好奇心を持ち、自らの能力を社会に活かすという視点をもっている。教科横断的に知識を活用して思考できる。	課題を自ら発見し、結論に至る論理的展開に科学的な裏付けがある。課題解決に向けて、周囲との議論を主導することができる。	社会における様々な問題に対して課題意識を持ち、必要な情報の精選・分析を踏まえて、多角的な視点から自分と他者の意見を比較・検討しながら、解決に向けての自分の意見を論理的に構築していくことができる。	課題解決後の状態を仮定し、考察、検証を繰り返すことで、新たな課題を見つけ、課題解決をさらに進めることができる。	自分の考えを含め、集団の意見をまとめ問題解決に向け行動することができる。	自分の考えや思いを、客観性を持って論理的にまとめ、効果的な表現手法を工夫して、相手に分かりやすく伝えることができる。	広い視野をもち、物事を効率よく処理するために、主体的に考えて自分の内的・外的要因を適切に伸ばすことができる。	多様性のある人たちと相互理解を深め、構造化・体系化した世界の事象を検証し、新たな課題を発見し協働して解決策を見つけることができる。	自己肯定感を高め、自身を大切にすることができ、また、他者を思いやり良好な人間関係を築きながら、自らを取り巻く人間関係や社会状況を考慮した協調的な行動を取ることができる。	情報手段を適切に用いて情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりすることができる。
	A：熟練 思考力・判断力・表現力を積極的に駆使しながら、様々な場面において課題解決に取り組む姿勢が見られる。	自己分析して課題を見つけ、計画的に学習に取り組むことができる。基本的事項を組み合わせて複雑な論理展開や表現に対応できる。	結論に至る論理展開に合理的な説得力があり、十分な水準にある。人の意見を参考に論理展開を再構築し、課題解決に取り組むことができる。	立場の違いによる意見の相違を理解し、課題解決に必要となる情報を精選・分析することで、考えをまとめ、客観的根拠を持って論理的に説明することができる。	課題解決後の状態を仮定し、自分たちの仮定を検証することができ、考察を導出したり、より良い課題解決後の状態を仮定したりできる。	集団の中で起こった課題を皆で考え、解決方法を探ることができる。	自分の考えや思いを、根拠に基づいて客観的に考察し、相手に説得力を持って伝えることができる。	広い視野をもち、物事を効率よく処理するために、主体的に考えて自分の内的・外的要因を適切に伸ばすことができる。	世界の多様性を理解し、構造化・体系化した世界の事象を用いて、論理的に自分の意見を述べることができ、地域社会での問題点の解決に向けて努力できる。	自己肯定感を高めて自身を大切にすることができ、また、他者を思いやり良好な人間関係を築くことができ、自己を取り巻く人間関係に配慮することができる。	情報手段を用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を発信・伝達したり、保存・共有したりすることができる。
	B：上達 習得した知識及び技能を活用し、課題解決において思考力・判断力・表現力を発揮できるようになる。	学習習慣が身についている。基本的な事項を活用して学習内容を正しく理解し、表現することができる。	結論に至る論理展開に説得力が加わり、習得した知識及び技能を活用し、より深く考察することができる。	自分や相手の意見を正しく捉え、課題解決に必要となる情報を取り出し、様々な観点から考えをまとめ、筋道立てて説明することができる。	課題解決に向けて、課題解決後の状態を仮定し、そのための計画を立案できる。	周りと調和して行動し、自分の意見を相手に分かりやすく伝えることができる。	自分の考えや思いを、相手によく伝わるように整理したり、まとめたりすることができる。	物事を効率よく処理するために、主体的に考えて自分の内的・外的要因を適切に伸ばすことができる。	世界的な事象を整理し、異なる文化を理解して、構造化・体系化することができ、地域社会での問題点を探ることができる。	自己肯定感を高めて自身を大切にすることができ、また、他者を思いやり円滑な人間関係を築くことができる。	情報手段を用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を発信・伝達したり、保存・共有したりすることが3つできる。
	C：習得 基礎・基本が十分に理解できる学力や技能が身についている。	予習や復習の方法が身についている。基本的な事項を正確に理解できている。	基礎・基本的な知識・技能を身につけ、結論に至る論理展開ができる。	自分や相手の意見を正しく捉えようとする姿勢が見られる。課題解決に必要となる情報を収集し、根拠を持って説明する意義を理解している。	テーマを決め、課題解決のための問いを考えることができる。	他者の気持ちや考えを理解することができる。	自分の考えや思いを、具体的な言葉でまとめることができる。	物事を効率よく処理するために、他者からの支援を受け、自分の内的・外的要因を伸ばすことができる。	資料などを通して世界で起こっている事象を整理しようとしたり、様々な文化背景を持つ人たちと交流し、異なる文化を認識することができる。	自己肯定感を高めて自身を大切にすることができ、また、他者を思いやろうとする姿勢がみえる。	情報手段を用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を発信・伝達したり、保存・共有したりすることが2つできる。

◎……10の資質・能力(仮)と特に強い関連のある観点
○……10の資質・能力(仮)と強い関連のある観点

表２（次ページ参照）

（３）進捗状況

昨年度、Phase Ⅰが完成したので、今年度はPhase Ⅱの完成を目指した。しかしながら、新型コロナウィルス感染症対策として、年度当初に休校期間が設けられたことにより１学期には十分な検討ができず、７月になって今年度最初のカリキュラム・マネジメント委員会を開催することができた。ただし、今年度は令和４年度から実施する学習指導要領に則った教育課程の編成と併せて、Phase Ⅱの検討も開始した。

いろいろと日程が遅れがちになりながらも、関係各所に検討してもらい「10の資質・能力(仮)のルーブリック」(Big Chart) と「GLOBAL Ⅱ」においては各学類ごとのCompetency Baseの「シラバス」(Small Chart) を完成することができた。これでカリキュラム・マネジメントの大枠が確定したことになる。他には、「GLOBAL Ⅰ」のシラバスについてカリキュラム・マネジメント委員会で検討し、昨年度のものと大きく変更することなくこの事業に指定されている３年間は実施していこうと考えている。また、学校行事と「10の資質・能力(仮)」の紐付けを行った。さらに、「定期考査・実力テストの目的と構成」についてもカリキュラム・マネジメント委員会で検討し、来年度からの定期考査の改善に結びつける。これらの活用方法等については、「５．今年度の成果と課題、次年度の取組」に記載する。

今年度予定していた、生徒、保護者による「自主的・自律的に行動できる生徒像」の検討は、来年度も継続して検討する。これは、「社会に開かれた教育課程」の確立への第一歩となるものであり、生徒、保護者、地域との共通理解 (Consensus) を構築することになるものと考えている。

10の資質・能力(仮)のルーブリック

10の資質・能力(仮)		基礎学力	論理的思考力	批判的思考力	課題解決能力	コミュニケーション能力
定　義		知識及び技能として身につける必要のある学力。教科書の内容が概ね理解できる。	知識及び技能を十分に習得した上で、それらを駆使しながら客観的な根拠を提示したうえで自分の考えを組み立てることができる力。	物事を多面的な視点で捉え、自分と他者の考えを比較・検討しながら自分の意見を論理的に構築していくことができる力。	取り組むべき課題に対して、仮説を立て、協働しながら論理的に答えを導き出すことができる力。	他者の気持ちを慮り、集団の調和を保つように行動することができる力。人の話をよく聴き、自分の考えをわかりやすく人に伝えることができる力。
三要素	知識・技能	◎	○			
	思考力・判断力・表現力		◎	◎	◎	◎
	学びに向かう力、人間性等			○	○	○
熟達スケール	S：探究 主体的に自分と社会との繋がりを理解し、取り組むべき課題を発見し、その解決に向け試行錯誤することで学びに向かう力を醸成する。	知的好奇心を持ち、自らの能力を社会に活かすという視点をもっている。教科横断的に知識を活用して思考できる。	課題を自ら発見し、結論に至る論理的展開に科学的な説得力がある。課題解決に向けて、周囲との議論を主導することができる。	社会における様々な問題に対して課題意識を持ち、必要な情報の精選・分析を踏まえて、多角的な視点から自分と他者の意見を比較・検討しながら、解決に向けての自分の意見を論理的に構築していくことができる。	課題解決後の状態を仮定し、考察、検証を繰り返すことで、新たな課題を見つけ、課題解決をさらに進めることができる。	自分の考えも含め、集団の意見をまとめ問題解決に向け行動することができる。
	A：熟練 思考力・判断力・表現力を積極的に駆使しながら、様々な場面において課題解決に取り組む姿勢が見られる。	自己分析して課題を見つけ、計画的に学習に取り組むことができる。基本的事項を組み合わせて複雑な論理展開や表現に対応できる。	結論に至る論理展開に合理的な説得力があり、十分な水準にある。人の意見を参考に論理展開を再構築し、課題解決に取り組むことができる。	立場の違いによる意見の相違を理解し、課題解決に必要となる情報を精選・分析することで、考えをまとめ、客観的根拠を持って論理的に説明することができる。	課題解決後の状態を仮定し、自分たちの仮定を検証することができ、考察を導き出したり、より良い課題解決後の状態を仮定したりできる。	集団の中で起こった課題を皆で考え、解決方法を探ることができる。
	B：上達 習得した知識及び技能を活用し、課題解決において思考力・判断力・表現力を発揮できるようになる。	学習習慣が身についている。基本的な事項を活用して学習内容を正しく理解し、表現することができる。	結論に至る論理展開に説得力が加わり、習得した知識及び技能を活用し、より深く考察することができる。	自分や相手の意見を正しく捉え、課題解決に必要となる情報を取り出し、様々な観点から考えをまとめ、筋道立てて説明することができる。	課題解決に向けて、課題解決後の状態を仮定し、そのための計画を立案できる。	周りと調和して行動し、自分の意見を相手に分かりやすく伝えることができる。
	C：習得 基礎・基本が十分に理解できる学力や技能が身についている。	予習や復習の方法が身についている。基本的な事項を正確に理解できている。	基礎・基本的な知識・技能を身につけ、結論に至る論理展開ができる。	自分や相手の意見を正しく捉えようとする姿勢が見られる。課題解決に必要となる情報を収集し、根拠を持って説明する意義を理解している。	テーマを決め、課題解決のための問いを考えることができる。	他者の気持ちや考えを理解することができる。

◎……10の資質・能力(仮)と特に強い関連のある観点
○……10の資質・能力(仮)と強い関連のある観点

10の資質・能力(仮)のルーブリック

10の資質・能力(仮)		自己表現力	自己管理能力	グローバルな視野	人を大切にする心	ICT活用能力
定　義		自分の考えや思いを、自分の言葉を使って正確に他者に伝えたり、形のあるものとして表現することができる力。	広い視野をもち、物事を効率よく処理するために、自分の内的・外的要因を適切に律することができる力。	様々な資料から、世界で起こっている事象を知り、それらの事象が地域や社会とどのように関わっていくのかということに興味・関心をもつこと。	社会における円滑な人間関係を築くことを考え、他者の話をよく聞いて相手を理解するように努めること。自己肯定感を高め自分の事を大切にすることで、他者にも優しく接するようになること。	ICT機器を利用して、自分の考えをまとめることができる力。また、協働して課題に取り組む際にツールとしてICTを活用できる力。
三要素	知識・技能					○
	思考力・判断力・表現力	○	○			○
	学びに向かう力、人間性等	○	◎	◎	◎	
熟達スケール	S：探究 主体的に自分と社会との繋がりを理解し、取り組むべき課題を発見し、その解決に向け試行錯誤することで学びに向かう力を醸成する。	自分の考えや思いを、客観性を持って論理的にまとめ、効果的な表現手法を工夫して、相手に分かりやすく伝えることができる。	広い視野をもち、物事を効率よく処理するために、主体的に考えて自分の内的・外的要因を適切に律することができ、他者の行動にも気遣った言動をすることができる。	多様性のある人たちと相互理解を深め、構造化・体系化した世界の事象を検証し、新たな課題を発見し協働して解決策を見つけることができる。	自己肯定感を高め、自身を大切にすることができ、また、他者を思いやり良好な人間関係を築きながら、自らを取り巻く人間関係や社会状況を考慮した協調的な行動を取ることができる。	情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりすることができる。
	A：熟練 思考力・判断力・表現力を積極的に駆使しながら、様々な場面において課題解決に取り組む姿勢が見られる。	自分の考えや思いを、根拠に基づいて客観的に考察し、相手に説得力を持って伝えることができる。	広い視野をもち、物事を効率よく処理するために、主体的に考えて自分の内的・外的要因を適切に律することができる。	世界の多様性を理解し、構造化・体系化した世界の事象を用いて、論理的に自分の意見を述べることができ、地域社会での問題点の解決に向けて努力できる。	自己肯定感を高めて自身を大切にすることができ、また、他者を思いやり良好な人間関係を築くことができ、自己を取り巻く人間関係に配慮することができる。	情報手段を用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を発信・伝達したり、保存・共有したりすることができる。
	B：上達 習得した知識及び技能を活用し、課題解決において思考力・判断力・表現力を発揮できるようになる。	自分の考えや思いを、相手によく伝わるように整理したり、まとめたりすることができる。	物事を効率よく処理するために、主体的に考えて自分の内的・外的要因を適切に律することができる。	世界的な事象を整理し、異なる文化を理解して、構造化・体系化することができ、地域社会での問題点を探ることができる。	自己肯定感を高めて自身を大切にすることができ、また、他者を思いやり円滑な人間関係を築くことができる。	情報手段を用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を発信・伝達したり、保存・共有したりすることが3つできる。
	C：習得 基礎・基本が十分に理解できる学力や技能が身についている。	自分の考えや思いを、具体的な言葉でまとめることができる。	物事を効率よく処理するために、他者からの支援を受けて、自分の内的・外的要因を律することができる。	資料などを通して世界で起こっている事象を整理しようとしたり、様々な文化背景を持つ人たちと交流し、異なる文化を認識することができる。	自己肯定感を高めて自身を大切にすることができ、また、他者を思いやろうとする姿勢がみえる。	情報手段を用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を発信・伝達したり、保存・共有したりすることが2つできる。

◎……10の資質・能力(仮)と特に強い関連のある観点
○……10の資質・能力(仮)と強い関連のある観点

２.「GLOBALⅠ」、「GLOBALⅡ」の評価

（１）評価方法の検討

SGHでは「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」「GLOBALⅢ」において、事細かにルーブリックやシラバスを作成していたが、その取組の成果を一般の教科・科目に反映できるよう、指導と評価の改善を目指してきた。「GLOBAL」の指導と評価は大きく改善されたが、引き続き一般の教科・科目の指導と評価が改善されるよう、研究を進めたい。研究指定事業で得られた経験や成果を今後に生かしてこそ、本校にとってメリットを得ることができる。負担だけが教師に残るのでは、生徒の資質・能力を伸ばすことなど到底できはしない。

そこで、現在検討中のカリキュラム・マネジメントの手法を取り入れることができないかと検討した結果、現段階の「城東高校で育みたい「10の資質・能力」(学びのポータル)」と「熟達スケール」を組み合わせて、シラバス（評価規準）を作成することにした。これは、正式なカリキュラム・マネジメントの試験運用による実験的な試みと考える。今後運用することで、問題点や改善点を浮き彫りにし、将来的なカリキュラム・マネジメントの充実に向けて修正・改良を行っていこうと考えている。

本事業の「GLOBALⅠ」、「GLOBALⅡ」は「総合的な探究の時間」に実施されており、評価は文章表記によって行われる。そのために必要なのは、生徒の活動を教師がどれだけしっかりと観察しているかということである。SGHの学校設定科目「GLOBALⅠ」では、観点に基づいて評価するためにすべての活動を点数化することで評点を計算していた。そのため、かなり煩雑な評価を担当者に強いることとなっていた。その反省を踏まえて持続可能な評価方法を検討してきた。

最終的な評価は、文章表記になるので担任の主観によって決定するところが大きい。ただし、文章表記だからといっても何らかの基準となるものがなければ評価ができない。さらに、全体での評価に偏りがあってはいけないので、評価者である担任が生徒の活動を公平公正に評価できるような指標を用意する必要がある。「GLOBALⅠ」ではその指標として、図１のシラバス（評価規準）を利用することにした。「GLOBALⅡ」はコア科目等と関連づけているので、「教科による評価」と「総合的な探究の時間の評価」の二本立てになる。そこで、各学類ごとにシラバスを作成してもらい「総合的な探究の時間の評価」はこのシラバスを一つの指標として利用することにした。

「GLOBALⅠ」のシラバスの作成には、生徒にも関わってもらっている。自分たちの活動を自分たちでも評価できるように生徒の言葉も使った。「GLOBALⅡ」については今年度に取り組んだ反省を踏まえて来年度は、より生徒の意見も取り入れたシラバスにしたいと考えている。今年度も生徒による自己評価が参考資料となるような仕組を取り入れる予定である。

当然、ルーブリックだけで評価するわけではないので、１年間の探究活動を通して評価できるようにしなければならない。そのためには、ポートフォリオを活用することが有効であると考えている。Classiによりポートフォリオを電子化して蓄積していくことで、探究活動の振り返りが容易にでき、生徒自身が自分の成長や変容を実感できるようになっている。また、教師は生徒の実態を短期的にも長期的にも把握しやすくなっている。

科目	GLOBAL Ⅰ（総合的な探究の時間）	単位数	1	担当者
		習得年次	1	1年次所属教員

目標
・課題研究を行うために必要なスキルを習得する。
・スキル学習で習得した技能や企業訪問で得た知識等から、SDGsに関連する身近な課題を見つける。
・SDGsに関連する身近な課題について調査・研究し解決方法を提案する。

◆ 何ができるようになるか［どのように資質・能力を身につけていくのか］

評価の観点 学びの三要素			知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達スケール	S	探究（究める）	自分たちの研究を論文やプレゼンをまとめることができ、他者にしっかりと伝えることができる。	仮説の検証を繰り返すことで、新たな課題を見つけ研究をさらに進めることができる。	自分たちの課題研究をもとにより大きな課題に取り組む姿勢がみられる。
	A	熟練（使える）	自分たちの仮説を検証するために学んできたスキルを活用できる。	自分たちの仮説を検証することができ、考察や新たなる仮説を導き出せる。	地域の課題解決に向けて仮説を立ててそれを協働して検証することができる。
	B	上達（わかる）	考えを整理するためにブレインストーミングやロジックツール等を利用できる。	リサーチクエスチョンに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	グループで情報を分析しながら地域の諸問題を発見しようと努力することができる。
	C	習得（できる）	スキル学習(論文の書き方、文献調査、実験検証、統計等)の内容を理解できる。	テーマを決め、リサーチクエスチョンを考えることができる。	新聞やニュースから社会で起こっていることについての情報を得ることができる。
１０の資質・能力			[論理的思考力] [ICT活用能力]	[課題解決能力] [批判的思考力]	[コミュニケーション能力] [グローバルな視野]
評価方法			授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

◆ 何を学ぶか［授業内容］

１学期	スキル学習（国語・公民・数学・理科・情報） 企業訪問
２学期	・講演会 ・ルーブリック作成 ・リサーチクエスチョンを考える ・仮説を立て、研究計画を作る ・調査・研究を行う ・研究論文を作成する。
３学期	・発表用プレゼンテーション作成 ・課題研究発表会

◆ 何を学ぶか［教材］

・課題研究メソッド
・各教科のスキル学習用プリント

◆ どのように学ぶか［主体的・対話的で深い学び］

・グループワーク等によるスキル学習
・KJ法等によりリサーチクエスチョンの決定
・シンキングツールにより仮説を立てる
・情報収集、アンケート、フィールドワーク等により調査研究を行う
・論文を作成する

図１

（２）評価方法

具体的な評価には以下のものを参考資料と考えている。

「GLOBAL Ⅰ」

・スキル学習の成果（統計グラフコンクール出品者に加点）
・「GLOBAL Ⅰ」のクラス発表における評価アンケート
・「GLOBAL Ⅰ」についての様々なアンケート（ポートフォリオ）
・シラバスによる自己評価、教師による評価（図２）

「GLOBAL Ⅱ」

・「GLOBAL Ⅱ」における活動記録（ポートフォリオ）
・「GLOBAL Ⅱ」についての様々なアンケート（ポートフォリオ）
・「GLOBAL Ⅱ」のクラス発表における評価アンケート
・シラバスによる自己評価、教師による評価（図２）

これらを、評価のためのエビデンスとしながら、担任が生徒個々人の到達度を「学びの三要素」による三つの観点で評価していく。その評価を「総合的な探究の時間」の評価の文章表記に反映させていく。

今回、「学びの三要素」を採用したのは「GLOBAL Ⅰ」、「GLOBAL Ⅱ」はともに「総合的な探究の時間」の中で行われており、総合的な探究の時間は令和４年度実施の学習指導要領の先行実施であるからである。将来的には、全ての教科・科目で「学びの三要素」に基づいたCompetency Baseのシラバスを作成し、それに則った観点別評価を実施する予定である。

「GLOBAL Ⅰ」

◆ 何ができるようになるか［どのように資質・能力を身につけていくのか］

評価の観点 学びの三要素			知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達スケール	S	探究 (究める)	自分たちの研究を論文やプレゼンをまとめることができ、他者にしっかりと伝えることができる。	仮説の検証を繰り返すことで、新たな課題を見つけ研究をさらに進めることができる。	自分たちの課題研究をもとにより大きな課題に取り組む姿勢がみられる。
	A	熟練 (使える)	自分たちの仮説を検証するために学んできたスキルを活用できる。	自分たちの仮説を検証することができ、考察や新たなる仮説を導き出せる。	地域の課題解決に向けて仮説を立てそれを協働して検証することができる。
	B	上達 (わかる)	考えを整理するためにブレインストーミングやロジックツール等を利用できる。	リサーチクエスチョンに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	グループで情報を分析しながら地域の諸問題を発見しようと努力することができる。
	C	習得 (できる)	スキル学習(論文の書き方、文献調査、実験検証、統計等)の内容を理解できる。	テーマを決め、リサーチクエスチョンを考えることができる。	新聞やニュースから社会で起こっていることについての情報を得ることができる。
１０の資質・能力			［論理的思考力］ ［ICT活用能力］	［課題解決能力］ ［批判的思考力］	［コミュニケーション能力］ ［グローバルな視野］
評価方法			授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

「GLOBAL Ⅱ（人文社会学類）」

◆ 何ができるようになるか［どのように資質・能力を身につけていくのか］

評価の観点 学びの三要素			知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達スケール	S	探究 (究める)	仮説に対する検証過程に説得力があり、その根拠となるデータ等にも具体性がある。	一つの考え方に固執することなく設定した課題に対し複数の視点から検討できている。	研究を通して気づいた諸問題についても検証を進めていこうとする意欲がみられる。
	A	熟練 (使える)	研究の発表内容が論理的であり適切にICT機器を使用することができている。	自分たちの仮説を検証することができ、導き出した考察や新たなる仮説を発表できる。	SDGsと関連づけた課題の仮説に対して他者と協働してその検証をすることができる。
	B	上達 (わかる)	実際の社会的事象について正しく理解し、仮説を立てようとすることができている。	リサーチクエスチョンに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	グループで情報を共有しSDGsに関連した諸問題を発見しようとすることができる。
	C	習得 (できる)	各教科・GLOBAL Ⅰのスキル学習を通じて基本的な知識・技能を身につけている。	テーマを決め、リサーチクエスチョンを考え、他者に伝えることができる。	新聞やニュースから社会で起きていることについての情報を得ることができる。
１０の資質・能力			［論理的思考力］ ［ICT活用能力］	［課題解決能力］ ［批判的思考力］ ［自己表現力］	［コミュニケーション能力］ ［グローバルな視野］ ［人を大切にする心］
評価方法			授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

図２

３．アカデミック・インターンシップの状況

（１）高大連携事業について

①　高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講

例年「岡大聴講」と呼ばれている高大連携事業である。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策として１・２学期は中止となり、３・４学期にオンラインでの実施となった。新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた２月末に生徒からの希望を募ったこともあり、残念ながら、生徒の希望者はいなかった。その後、７月に再度３・４学期の募集もあったが、時間割が確定しており生徒に聴講させる時間的余裕がなく今年度は参加ができなかった。

講義の内容は様々であるが、全てが大学の講義であり、高校生には難解な内容も多く含まれている。例年、３～４名程度が参加しており、半年間の講義を受ける生徒が多くいる。中には、１年間通して講義を受ける生徒もおり、参加した生徒からは「難しい内容だったが、大学の講義を体験できて良かった」「大学の学部・学科の選択に役立った」などの感想が伺えた。

来年度は岡山大学も対面授業を再開する予定であり、大学での講義を受けることもできそうである。多くの生徒が参加することを期待したい。

②　高校生のための大学講座

例年８月に岡山大学で行われる県内の高校生のための公開講座である。県内の多くの高校から多数の参加者があり、この日は岡山大学のキャンパス内で多くの高校生が見受けられる活気のある高大連携事業となっている。オープンキャンパスとは異なり、テーマに沿った講義が多くの学部で展開される。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策として８月の実施が延期になり、11月に実施することになった。こちらもオンラインでの実施であり、申込も例年は高校側で参加生徒をとりまとめていたのだが、今年度は生徒自身がHPから各自で申し込む形に変更された。今年度は６名の生徒が参加した。

オープンキャンパスと違い、大学の教授等から実際の講義を受けるという体験は、高校生にとっては新鮮な経験であり大学の実態に触れることのできる貴重な機会である。

来年度は、どのような形で実施されるか不明であるが、多くの生徒に参加を呼びかけていきたい。

③　SJPP（SAKUYO-JOTO Partnership Program）

平成18年に締結した「高大連携授業に関する協定」により開始した音楽学類における聴講制度である。毎週木曜日の６・７限にくらしき作陽大学に行き大学の授業やレッスンを受けることができる。本校の高大連携事業として従来から取り組んでおり、他の学類における高大連携の在り方にも大きく参考となっている。今年度は１学期の間は、オンラインの実施が中心であり、必要に応じてくらしき作陽大学の教授等に来校していただき指導をしていただいている。２学期以降は、例年どおり、大学に赴き講義を受ける形での実施ができた。今年度、来年度とも音楽学類の生徒が十数名受講している。

（２）アカデミック・インターンシップ

残念ながら岡山県内の大学にはアカデミック・インターンシップを実施している大学が見当たらない。社会的にもインターンシップについては高校・大学である程度の認知度があり、実際に実施したり協力したりしてくれる企業・団体は多く存在する。岡山県でも岡山県立大学が積極的な高大連携を行う予定であったが、新型コロナウイルスの影響で規模が縮小されてしまい、本校も参加を検討していたが見送る形となった。

オンラインの導入により、高大連携の形が多様になっているため、今後のアカデミック・インターンシップの可能性が大きく広がったように感じる。

４．指定３年目の「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発

（１）教育課程について

来年度の「総合的な探究の時間」において１年次では、今年度と同様に週１時間の「GLOBALⅠ」を実施する。「スキル学習」と「課題研究」を中心として行う予定である。また、「企業訪問」も生徒の希望を優先する形で実施する予定であり、地域の課題を発見させグローバルな視点から課題を解決させるとともに、キャリア教育の充実も図りたい。

２年次の「GLOBALⅡ」は教育課程上は週２時間の実施を予定している。ただし、この２時間は連続して行うものではない。２時間のうち１時間を各学類特有の学校設定科目と連続した時間割を編成し、２時間連続での授業を行う。人文社会学類は「文学探究」、「歴史探究」、「国際理解」、国際教養学類は「GlobalStudies」、音楽学類は「GlobalMusic」、理数学類は「GlobalScience」である。また、残りの１時間は全クラス同時に行う「GLOBALⅡ」を実施する。学類の特色を前面に押し出して、専門分野を十分に生かして仮説検証を繰り返し行えるようなより深い研究ができるものと期待している。

３年次では希望者になるが「GLOBALⅢ」を週時程内に２時間実施することになっている。「GLOBALⅠ」、「GLOBALⅡ」で培った経験を生かしながら、個人研究の形で実施する。「GLOBALⅡ」での研究手法を踏まえて、より自分の興味関心を深めて研究を進めていく。

（２）実施内容について

今年度、１年次の「GLOBALⅠ」では、「課題研究」を行うために必要なスキルの習得を１学期に行う予定であったが、休校期間が入ったため約１ヶ月間遅れての実施となった。「国語」「地歴公民」「数学」「理科」「情報」の５教科による教科横断的な学びをクラス単位で５回実施した。その都度、Classiでの振り返りやアンケートを実施し、課題研究に向けて興味・関心が高まるようにした。来年度は生徒一人一台端末のiPadを導入することとしており、その活用も踏まえて取組の充実を図りたい。今年度は、パソコン操作であった内容を「シンキングツール」の活用に変更し、課題研究が充実する内容にした。今年度も数学科と情報科が連携し、１年生全員に統計グラフコンクールの応募作品を作成させ、優秀な19作品を応募することができた。昨年度より完成度は上がっており、今後もグラフコンクールへの出品を目指したい。今年度はテキストを「探究ナビ」に変更したこともあり、SDGsや探究学習を行うためのヒントが多く提供されている。来年度はこれらのツールを活かした「GLOBALⅠ」を行いたい。

２年次の「GLOBALⅡ」では、学類の特色を生かす方向で実施している。SDGsの17の目標と関連付けてテーマ設定を行ったが、教科の特性が強いので、SDGsの17の目標に当てはめにくいものもあるが、169のターゲットとならば関連付けることは比較的容易である。社会をよくすることを大目標として、リサーチクエスチョンや仮設の決定を行ってもらいたい。シンキングツール利用も今年度は増えており、課題研究を指導してきた経験が活かされているようである。調査・研究における手法は、主にアンケートやインタビューが多く用いられた。コロナ禍のため施設によっては、インタビューに行けなかったりと例年どおりとはいかなかったが、フィールドワークやClassiによるアンケートなどできる範囲でできることを模索しながらの実施となった。今後も、これらの手法を取り入れながら研究を進めたい。

来年度は、「GLOBALⅢ」を実施することになる。SGHでも行っていたが、個人研究による課題研究に取り組むことになる。自分たちが考えることは、地域のことであるかもしれないがそれはグローバルな社会と何らかの形で繋がりを持っているかもしれない。逆に、グローバルな課題に興味を持つことが、地域の抱える問題点を浮き彫りにすることもあるだろう。このようなグローカルな意識への進化を促すことでよりよい社会の実現に貢献できる人材の育成を目指したい。

５．今年度の成果や課題、次年度の取組

（１）カリキュラム・マネジメントの推進について

今年度は、カリキュラム・マネジメントのPhaseⅡに取りかかり、12月の時点でほぼ予定していた内容を完了させることができた。

このシステムは青森県立青森高等学校の取組を参考にしており、昨年度からシステムの構築に取りかかり、３つのPhaseに分けて準備していく予定である。昨年度、PhaseⅠがほぼ完成したので、今年度はPhaseⅡの完成を目指していた。年度当初、休校期間に入り、思うようにPhaseⅡの内容を検討することが困難であったが、７月には今年度第１回のカリキュラム・マネジメント委員会を開くことができた。併せて令和４年度から実施する学習指導要領に対応した教育課程の編成も同時に進めた。

PhaseⅡにおいてまず決めなければならないのが「10の資質・能力(仮)のルーブリック」である。これは、本校のカリキュラム・マネジメントにおいて中核をなすものであり、このルーブリックを様々なものと関連づけながら生徒の資質・能力を育成していこうと考えている。次に完成させたのは、「GLOBALⅡ」のCompetencyBaseのシラバスである。以前のContentsBaseのシラバスを学びの三要素によるCompetencyBaseのシラバスに変更し、「GLOBALⅠ」は全体でSDGｓに関わる課題研究を行うため学年統一の１種類のみ作成したが、「GLOBALⅡ」は学類の特色を生かすことを目標にしているために各学類ごとに作成した。さらに、「10の資質・能力(仮)」と学校行事の紐付けをした。一つの行事に対していくつかの資質・能力を割り当て、各行事のたびに「この行事では○○、△△の資質・能力を伸ばすことに重点を置いています。」というようなアナウンスをして、学校行事と資質・能力との関連性を生徒に意識させることが目的である。実際に、今年度は１年次はSDGｓの講演会、２年次は進路講演会で担当者に関連づけている資質・能力を意識して行事に取り組むよう生徒に伝えてもらった。また、防災避難訓練後のアンケートは「自己管理能力」と関連づけて行った。この取組を各行事ごとに行うことで、「10の資質・能力(仮)」を教員・生徒に浸透させていこうと考えている。なお、１学期終業式において、城東生に身につけてもらいたい「10の資質・能力(仮)」として、全校生徒に周知している。

「GLOBALⅡは楽しいですか」というアンケートをClassiで行った。「楽しい」、「まあ楽しい」の割合は72.2%であった。７割以上の生徒が課題研究に楽しく取り組んでいることがわかった。また、「今までのGLOBALⅡの活動を振り返ってみてどうですか」という自由記述の問いには、「本格的な研究をする経験が今までなかったので、何からしていいのかがわからなくて進め方が難しかった」、「何度か行き詰まることもあったが、それを乗り越えて進められている」、「今まで習ってきたことを応用できる機会があって、学習の大切さを実感できた」等の記載があった。答えのない問いを自ら設定し、試行錯誤をしながら課題研究に取り組めている様子が伺えた。

次年度は、カリキュラム・マネジメントのPhaseⅢに取り組まなければならない。具体的には、令和４年度から実施する学習指導要領に即した教育課程において、各科目のシラバスを完成させることである。この事業において、課題研究を通して生徒の資質・能力をいかに伸ばすかということを、試行錯誤してきた。この経験を次期学習指導要領に照らし合わせて、各教科・科目、総合的な探究の時間及び特別活動に活かしていきたいと考えている。そのためのシラバスを完成させるのが、来年度の目標である。

（２）「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」の評価について

「GLOBALⅠ」の評価については、昨年度同様カリキュラム・マネジメントの推進のために準備しているCompetency Baseのシラバスを利用しようと考えている。生徒の自己評価と教員による評価を観点別評価の基準として、統計グラフコンクールの出品作品や、スキル学習の振り返りやアンケートをはじめとする生徒のポートフォリオなどを用いて「GLOBALⅠ」への取組を多面的に評価していきたい。

「GLOBALⅡ」の評価については、学類特有の科目と「GLOBALⅡ」を２時間連続で行っており、学類特有の科目の評価と「GLOBALⅡ」の評価とを関連づけて行わなければならない。

ただし、学類により内容は異なるので、学類ごとに用意したシラバスを用いて生徒の自己評価と教員による評価を観点別評価の基準として、課題研究の研究記録等のポートフォリオも参考にしながら多面的に評価していきたいと思う。

今年度の成果としては、Competency Baseのシラバスにより観点別評価を行うことができるようになったことが最も大きい。昨年度は、「GLOBALⅠ」だけであったものが「GLOBALⅡ」でも行えるようになり、これで「総合的な探究の時間」の観点別評価が可能となった。課題として、評価方法の検証が挙げられるが、現在のところシラバスを用いて生徒による自己評価、教員による評価を基準としているが、これら以外の評価資料となるものをポートフォリオとして蓄積している。そのポートフォリオが、後で振り返って自己の成長が実感できるものとなるよう、今後も改善を図る必要がある。まずは、「何を蓄積するのか？」、次に、「どのような内容を蓄積するのか？」、さらに、「いつ振り返るのか？」最後に「自己の成長をどうのように捉えるのか？」といったところであろう。Classiを導入することで、ポートフォリオは蓄積しやすくなっているが、生徒一人一台端末の導入も踏まえその仕組をうまく活用していきたい。

（３）アカデミック・インターンシップの状況について

アカデミック・インターンシップについては､まだまだ手探り状態と言うところである。今年度は、コロナ禍により大学側が講義等をオンラインで行っているのでアカデミック・インターンシップの実施自体が難しい状況である。となると、現状で可能な範囲での高大連携を続けるのが妥当であろうと考える。今年度参加したものは、「高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講（オンライン)」と「SJPP」の２つである。

来年度、この状況がどれほど回復するのか不透明であり、その状況下でどれほどの高大連携事業が行われるかにもよると思われる。継続可能なものを模索していかなければならない。

（４）指定３年目の総合的な探究の時間のプログラム開発について

次年度の取組として重要なことの一つに、カリキュラム・マネジメントのPhaseⅢに取り組むことが挙げられ、本格的にカリキュラム・マネジメントを実施するための準備が整うことになる。具体的には、令和４年度から実施する学習指導要領に即した教育課程において、各科目のCompetency Baseのシラバスを完成させることである。今回の事業で蓄積されたノウハウを活かしながら、生徒の資質・能力を効果的に伸ばしていく仕組を構築していかなければならない。それは、授業であったり、学校行事であったり、評価方法であったりと方策は様々である。ただ、共通するのは継続的に行うことができ、フレキシブルに実情に合わせて変化できる柔軟さを持ち合わせたカリキュラム・マネジメントにならなければならないということである。

また、探究活動としては、「GLOBALⅢ」の評価方法を検討しなければならない。今度は個人研究なので、「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」とは違う視点を盛り込みながら、観点別評価ができなくてはならない。また、「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」についてはこの２年間の取り組みを振り返って、より生徒の資質・能力を伸ばすように仕組みをBrush Upしていなければならない。やっと、道具が揃ってきたのだから、後はそれをどう生かすかである。

（５）まとめ

今年度は２年目ということで、昨年度から取り組んできたものが徐々に形となり、実際に運用することができるようになってきた。昨年度よりはカリキュラム・マネジメントも探究活動も生徒、教員間に少しずつ浸透してきたようである。まだまだ、取り組まなければならないものがあるのが現状であるが、今までの積み重ねが次年度につながる実感が湧いてきている。事業の最終年に向けて、より内容を精選しながら、事業終了後も持続可能な仕組を築いていこうと考えている。

第６章　各種委員会の開催

１．運営指導委員会・コンソーシアム運営会議

（１）第１回コンソーシアム運営会議

令和２年５月 29 日（金）９:30～11:30　セミナー室

出席者（敬称略）

【コンソーシアム】

中山　尚美	岡山県県民生活部中山間・地域振興課活力創出班　総括参事
吉原憲一郎	岡山県県民生活部中山間・地域振興課活力創出班　主幹
小川　卓志	岡山市市民協働局市民協働部 SDGs・ESD 推進課　課長
神崎　浩二	岡山県経済団体連絡協議会　事務局長
近藤　　治	岡山大学 UAA
室　貴由輝	岡山県教育庁高校教育課　参事
前川　隆弘	岡山県立岡山城東高等学校　校長

【岡山県教育委員会】

藤原　紳一	岡山県教育庁高校教育課指導班　総括副参事
大塚　崇史	岡山県教育庁高校教育課指導班　指導主事（主幹）

【岡山県立岡山城東高等学校】

平賀　　徹	副校長（司会進行）
青山奈津子	事務部長
金井　庸記	教頭
大西　宏和	主幹教諭（研究リーダー）
杉岡　和子	指導教諭（外国語教育推進係）
田中　伸明	教諭（カリキュラム開発係）
中村　　哲	教諭（地域連携係）

〔進行次第〕

１　開会
２　岡山県教育委員会挨拶
３　校長挨拶
４　出席者紹介
５　昨年度の成果と課題・本年度の計画について
(1)各取組の具体
○ 地域密着の課題研究
・「GLOBAL Ⅰ」、「GLOBAL Ⅱ」の取組の様子
スキル学習の継続、岡山大学の教員・大学院生の派遣での取組
課題の発見、SDGs をテーマにした課題研究の実施
・昨年度の訪問企業の成果・課題、生徒の感想等の報告、本年度新規訪問企業の紹介
・「統計グラフコンクール」や「地域と連携した「高校の魅力化」フォーラム」での発表
○ 異文化交流の深化
・昨年度の取組の成果と今年度できること
・スピーキング力向上のための英語の授業改善、スピーキングの評価方法の研究、年間３回の英語公開授業の実施

・コロナウイルス感染拡大のため、海外修学研修（イギリス）中止、１年次の海外文化体験研修（カナダ・オーストラリア）中止、学類研修を 10 月に延期などの対応
・海外研修の代替として異文化体験できることはないか

○ 自主性・自律性を育成する取組

・昨年度の取組の成果と課題の発表（社会貢献活動、学習支援、近隣のボランティア活動への参加実績、生徒会活動活性化のための取組など）
・社会貢献活動、近隣小学生への学習支援など、昨年度実施できたことがどこまでできるか

(2) 評価指標について（令和元年度の１年次生が対象）

・批判的思考力・創造的思考力　GPS-Academic で上位評価　30％の目標 → 批判的思考力 40%、創造的思考力 47％。
・CFER　B1 以上の生徒　70％の目標 → 11％に留まる。最初の目標設定と実際の結果の乖離の原因を探った
・自主的にボランティアに参加する生徒 450 人の目標 → 362 名
・将来地元で暮らしたい 40％の目標 → 45％

６　協議

７　その他

８　閉会

〔委員からの指導・助言〕

・「地域おこし協力隊」の活動との連携や、「集落のあり方を考えるシンポジウム」への参加。インターネットを使って意見交換ができ、現場と高校をつないで高校生が直接話ができる場となる。
・企業見学して話を聞くだけでなく、SDGs の目標達成にどのように取り組んでいるかに着目させ、学びを深める工夫も必要ではないか。また SDGs の 17 の目標はそれぞれ相互に繋がっているという視点を持ち、研究を広げて欲しい。SDGs について理解を深めてもらえるような研修等の機会も必要であれば提供していきたい。
・企業訪問については、昨年度の指定制から希望制に変化し、自分の興味関心のある企業を訪問することができたのではないか。訪問の際には自分たちで十分に調べ学習をして望んで欲しい。評価指標の「将来地元の…」の割合 45％。もちろん全ての生徒にそのまま岡山に留まって欲しい訳ではなく、一度県外、海外に出てもいずれ地元に戻って活躍してもらいたい。そのためにも今回訪問した以外の企業についてもよく知って欲しい。指導する先生方にも視野を広げ岡山の企業を知ってもらいたい。
・今の研究推進体制は、とても良いと思う。各担当の分掌間で上手く連携し学校全体で取り組めている。岡山大学からの講師派遣は回数が多く負担感がある、今年は、留学生との交流なども含めオンラインでの実施などの工夫が必要。また、岡山城東、岡山操山、和気閑谷のそれぞれのコンソーシアムを県全体のコンソーシアムに統合していくという発想が必要である。
・教育現場は依然として Society3.0 であり、Society4.0 である ICT の導入を進めようとしたときにそれさえもうまくいかない現状がある。社会、企業が変わっていく中で学校環境はもちろんのこと、授業や探究活動等のあり方も変わっていかねばならない。また、教員は生徒のニーズ、課題をどういうところとつなぐのか最適なのかというコーディネーターとしての役割が求められる。
・過疎地域自立促進特別措置法が今年度末をもって失効し、現在後継の法整備に向けて取組が進んでいる。そこで注目されているのが高校における地域に根ざした教育である。そうなれば今後、多くの学校が地域との連携を模索し始める。それを踏まえて今後の活動を考えていく必要がある。

（２）第２回コンソーシアム運営会議及び第１回運営指導委員会

令和２年 10 月 13 日（金）13:30～16:30　セミナー室

出席者（敬称略）

【運営指導委員】

岡本　弥彦	岡山理科大学 教育推進機構　教職支援センター教授
小川　正人	環太平洋大学　国際・教養教育センター　センター長
神崎　浩二	岡山県経済団体連絡協議会 事務局長
国定　啓人	山陽新聞社編集局　次長
杉山　慎策	中国学園大学・中国短期大学　副学長
谷一　　尚	一般財団法人林原美術館 館長　山陽学園大学副学長

【コンソーシアム】　＊第１回コンソーシアム運営会議参加者と同じ

【岡山県教育委員会】＊第１回コンソーシアム運営会議参加者と同じ

【岡山県立岡山城東高等学校】

第１回コンソーシアム運営会議参加者と以下のメンバー

竜門　佳弘	教諭（２年次主任）
戸田　英樹	教諭（１年次主任）

〔進行次第〕

１　開会
２　岡山県教育委員会挨拶
３　校長挨拶
４　出席者紹介
５　学校からの報告
(1)本事業について
(2)「地域密着の課題研究」について
・課題研究「GLOBAL Ⅰ、Ⅱ」　10 月までの取組状況
・企業訪問　生徒の感想など
・教育課程
(3)「異文化交流の深化」について
・英語の授業改善、評価の方法研究の取組状況
・異文化交流　海外への訪問ができない現状等について
(4)「自主性・自律性を育成する取組」について
・社会貢献活動の実施状況について
・東岡山駅との連携活動について
・生徒会活動・委員会活動の活性化について
６　協議Ⅰ
(1)コンソーシアム運営会議
(2)運営指導委員会
７　協議Ⅱ
・全体協議
８　その他
９　閉会

〔委員からの指導・助言〕

○コンソーシアム運営会議

・学校からの発表の中で地域課題への取組や教員のスキルアップ、SDGs への意識付けが課題ということだが、具体的にどのような点で課題だと捉えているのか。また、教員のスキルアップは、教師自身が普段から地域の課題にどう課題意識を持って向き合い、どう地域との結びつきをもっているかということが大切。県として何かサポートできるのではないかと考えている。

・企業訪問の後の企業からの意見として、「参加した生徒、教員からのフィードバックがもっと欲しい」というのがあった。例えば、生徒の感想にあった「自分がその企業に対して事前に予想していた SDGs の目標番号とは違った目標番号も当てはまることに気づいた」といったことを企業側にフィードバックすれば企業にとっても非常に有効な気づきになるのではないか。

・「GLOBALⅢ」の選択者が少ないという問題は、どうしても進路実現との兼ね合いもあるかと思うが、「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」において、教科横断的な学習が進み、地域課題の探究と各教科との結びつきが意識されていけば、自分が考えていきたいテーマと進路実現とがしっかりと結びつき、自ずと「GLOBALⅢ」の選択にもつながっていくのではないか。いかに課題解決型の学習が、自分事として生徒の中に落ちていくかが重要である。

・本事業では様々なつながりが大切になってくる。相手の企業にしても、海外の学校にしても、いかに互いにメリットがあって継続できるかということが重要であり、難しいところだ。企業訪問についても、コロナ禍にあっても受け入れてくれる企業があった。今後、このつながりを継続していくためには、受け入れる企業にとってもメリットが必要。

・このコロナ禍は、もちろんマイナスな面が大きいが、この状況だからこそ気付かされた新たな学びもあったのではないか。新型コロナウイルス感染症の課題と向き合うこと自体が、まさにグローバルな課題であるし、地域の課題ともつながっている。誹謗中傷の問題であったり、医療従事者の苦労であったり、それぞれの生徒が必ず何らかの形で身近な課題として触れているのではないか。そうした新たな考え、気付きを共有していくことが大きな学びであり、そうした学びについて取組のなかに位置付けていく必要があるのではないか。

・５月のコンソーシアム運営会議の時と比べ、それぞれの取組がしっかりとつながってきている。この事業をなぜ行うのかということに対する校内での共通理解が進んできているという印象を受けた。生徒自身に地域社会とのつながりについて自ら考えさせ、地域に根ざし、地域社会を支えていくこれからの人材を育てていく。この事業の目的に、岡山城東高校の取組が合致してきていると感じた。このことが具体化されているのが、「10の資質・能力」である。ここに示されている力は、高校３年間だけではなく大学進学後、卒業後も重要になってくるものである。このようなコンピテンシーをもった生徒を学校教育のなかで、地域と協働しながら育てていく、そしてルーブリックなどを用いて、コンピテンシーベースの評価をしていくということは、これからの学校教育のあるべき方向性とも合致している。正解がない課題の中で、何が最適解かを考えていく姿勢を高校の頃から身に付け、大学へと進学していくことによって、大学を使いこなしていく力につながっていくのではないかと考える。

・生徒がコロナ禍でも、自分たちで見付けてきたボランティアに参加したという説明があったが、この部分がまさに課題発見につながる部分ではないかと考える。岡山城東高校にとっての地域とは何かを考えたとき、学校周辺の地域はもちろんだが、生徒が住んでいる地域も含まれる。しかし、実際に生徒が挙げている課題を見ると、学校周辺の地域のものが多いようだ。これが生徒が住んでいる地域に根ざした課題になっていけば、さらに課題発見、課題探究の幅が広がっていくのではないか。

・事業を通して何ができるようになっていかなければならないか、ということがより明確となり、全ての事業が線としてつながってきているという印象を受けた。
・同じ岡山市内、岡山県内であっても、地域によってかなり差がある。この差を比較するだけでも大きな研究となるし、さらに、県外、国外へと広げるとどういう課題になっていくかまで考えていくと、地域と世界的なものとのつながりにまで広がっていくのではないかと思う。

○運営指導委員会
・四つの「育成したい資質・能力」と「10 の資質・能力」のつながりについて、はっきりと示しておいた方が良い。その上で、この事業において大切なのは、持続可能な社会づくりであり、そのためにどのような資質・能力を育むのかということだろう。それが、全体構想図における四つの「育成したい資質・能力」であり、「10 の資質・能力」という位置付けにしていくのがよい。
・「10 の資質・能力」を今後ブラッシュアップしていくのであれば、SDGs だけではなく、ESD についても考えてもらいたい。SDGs は目標であり、ESD はその目標を達成するためにどういう理念で教育を進めていくかということである。国立教育政策研究所やユネスコなどがそのために必要な資質・能力について示しているので、それらも参考にしてもらいたい。これらの資質・能力は探究のための力、問題解決のための力であり、新しい学習指導要領で求められている資質・能力とも結び付いてくるものである。
・教員のスキルアップについて、例えば小・中学校では、夏休み中の研修として教員がグループに分かれて学区の地域に出て、その地域の課題を見つけ、互いに発表しあうといった取組がある。高校においても、教員自身が地域課題をどのように見ていくかということと同時に、探究活動をどう進めていくかということを身をもって考えることは大切である。また県教委には、スーパーサイエンスハイスクールなど他の指定事業を受けている学校相互の連携を通して、生徒の合同の発表会だけでなく、教員の研修や情報交換の機会を設け、教員のスキルアップにつなげてもらいたい。
・昨年度と比べて取組は整理されてきてわかりやすいが、厳しい言い方をすれば、面白味に欠けている。本事業の様々な取組を通して、生徒や教員は本当に楽しんでいるのか。岡山城東高校には、もっと「とんがった人材」を育ててもらいたい。OB には全国で、あるいは世界的に活躍している人材が多くいる。そのような人材をたくさん輩出してもらいたい。
・地域の課題を見つけ、調べて共感し、それを第三者に伝えていくという取組は、新聞記者の仕事と同じ。このカリキュラムの理念や具体的なアプローチの方法は非常にすぐれた取組である。生徒の全員がそうである必要はないが、このような取組を通して、高校生の多感な時期に、地域の課題に気付き、考える生徒が出てくるのは大切なことである。
・地域という言葉は色々な定義がある。高校生のときに、そうした様々な地域で生活を営んでいる人たちがいる現地に赴き、どのような課題があるのかを自ら見つけ、それを社会に訴えていく経験ができるということは、非常に貴重である。コロナ禍でどうしても様々な取組がリモートになってしまいがちであるが、例えば少人数であってもよいので、ゲストスピーカーを招くなどして、地域の人の生の声を聞く機会は大切にしてほしい。対面の強さはリモートには代えられない。
・「グローバル」から「グローカル」になって焦点がぼけていないか。岡山城東高校の伝統として、英語教育と音楽教育が柱であったはず。その原点を大切にした上で、「グローカル」へと発展させ、岡山城東高校にしかないユニークな研究課題を見付けていってほしい。生徒たち自身の尺度で地域課題を見出させていかなければ、借り物になってしまう。
・岡山城東高校のバックボーンを大切にしながら、それをこの事業を通してどう発展させていくのかを考えてもらいたい。例えば岡山城東高校の卒業生が日本の若手の音楽界をリードしている。そういった人材を創立当初から輩出してきた歴史は岡山城東高校の強み

であり、その強みが地域にどう生かせるのか、という視点から取組を考えてもらいたい。
・新型コロナウイルスの影響で、できない事業も多いかとは思うが、オンラインなども活用しながらなんとか乗り越えて意義のある取組を進めてもらいたい。今、日本の教育が大きな転換点を迎えており、大学入試制度も大きく変わろうとしている。高校の三年間でやってきたこと、がんばったことが全て正当に評価されていく仕組が作られていると思う。本事業において生徒たちががんばっていることも、彼らの進路にしっかりとつながっていくのではないかと思う。
・岡山城東高校はニュータイプの高校として新設された歴史があり、卒業生が様々な分野の第一線で活躍していることが何よりの財産である。こうした先輩たちを在校生たちが目標として、世界に羽ばたく人材に育っていってもらいたい。まさにそうしたバラエティに富んだ人材を育てるのが、この事業における「GLOBALⅢ」なのではないかと思うので、選択者の少なさは、やはり残念だ。

○全体協議
・「個別最適化された学び」は ICT で解決できるわけではない。大切なことは、まず学習環境を多様化していくということだ。その点で、ICT を活用することが効果的な生徒もいれば、グループワークが得意という生徒もいるし、町に出て実践的に学ぶ生徒や音楽を通して学んでいく生徒もいる。それぞれの生徒に適した学習環境を整えるということが重要である。こうしたことは、これまで公教育のなかでは実現が難しいとされてきたが、アメリカでは既に実践もされている。そういった余裕をもった学習環境を築いていくことで、徒たちに自らの学習スタイルを見付けさせていくということが大切になってくると思う。
・来年度から生徒一人一台端末の iPad が導入されるということだが、どのように活用するかが大切である。この事業のなかで、いかに効果的な活用ができるのかということについて、来年度を見据えてしっかりと研究し、準備していってもらいたい。ICT は使いようによって、それまでの授業ではできなかったようなことが可能になるのではないかと思う。ICT でしかできないことを生かしていってほしい。

２．教育改革推進委員会

（１）設置の目的

県教育委員会と連携しながら、事業の成果や課題を共有し、本事業の進捗管理を行う。

（２）構成員

設置の目的を達成するため、次のような構成員とした。

(コアメンバー)

校長、副校長、教頭、事務部長、主幹教諭、教務課長、学類主任、年次主任

(必要に応じて出席するメンバー)

カリキュラム開発係主任（教務課長補佐)、地域連携係主任（生徒課長)、国際交流係主任（国際課長)、外国語教育推進係主任（外国語科研究主任)、情報発信係主任（総務課長)、記録係主任（図書課長)、会計係主任（事務室）

（３）開催期日と内容

［第１回］期日　令和２年４月15日
内容　本事業の研究内容及び研究体制について　他

［第２回］期日　令和２年５月19日
内容　課題研究発表会について、第１回コンソーシアム運営会議について　他

［第３回］期日　令和２年６月18日
内容　本年度実施計画について、広報資料について、第１回コンソーシアム運営会議の報告　他

［第４回　期日　令和２年７月９日
内容　「10の資質・能力（仮)」について、１年次生企業訪問について　他

［第５回］期日　令和２年８月20日
内容　これまでの進捗状況の確認について　他

［第６回］期日　令和２年９月23日
内容　第２回コンソーシアム運営会議及び第１回運営指導委員会について　他

［第７回］期日　令和２年10月21日
内容　令和４年度入学生の教育課程について、研究開発実施報告書の作成について　他

［第８回］期日　令和２年11月17日
内容　研究開発実施報告書の作成について、第２回コンソーシアム運営会議及び第１回運営指導委員会の報告　他

［第９回］期日　令和２年12月17日
内容　令和２年度課題研究発表会について、成果報告会について　他

［第10回］期日　令和３年１月14日
内容　令和３年度研究開発実施計画書の提出について　他

［第11回］期日　令和３年２月５日
内容　第３回コンソーシアム運営会議及び第２回運営指導委員会について　他

［第12回］期日　令和３年３月４日
内容　令和３年度本事業の研究内容及び研究体制について　他

第７章　広報活動

１．はじめに

本校の魅力や特色を、広く中学生・保護者・一般の方々に理解してもらうことを目的に、様々な機会を捉えて広報活動を行っている。校風や学校行事、４つの学類の特長などに加えて、令和元年度からは本事業の理念や取組についても紹介している。特に、本事業の３つの柱、「地域密着の課題研究」、「異文化交流の深化」、「自主性・自律性を育成する取組」を重点的に取り上げている。

２．広報媒体

（１）スクールガイド 2021

17,000 部を作成し、県内全中学校（３年生全員と全学級数）や近隣の塾に配付している。一部県外からの問い合わせにも対応した。また、学校説明会やオープンスクールの参加者全員にも配付している。今年度は、本事業の取組が具体的な活動として一層充実したので、関連するスクールガイドのページを増やし、詳細を紹介することができた。

（２）学校紹介ビデオ

学校紹介ビデオを更新し、本事業における各年次の取組の紹介を加えた。学校説明会や中高連絡会、学校評議員会で上映し、本校の取組への理解を深めてもらうための一助としている。従来から本校が取り組んできた海外修学研修や学類研修、留学生の受け入れ、姉妹校との交流、ITC 英語集中合宿などの活動を分かりやすく紹介している。

（３）活動紹介スライド

中学生及び保護者対象の学校説明会用のスライドでは、本事業の理念や育成したい力、具体的な活動などを詳しく説明している。本校の特徴的な取組として課題研究や事業所訪問の様子、ボランティア活動などを紹介している。

（４）ホームページ

トップページを更新し、本事業のアイコンを加え、そこから本事業に関する記事を開けるようにした。ブログ「岡山城東な日々」では、「GLOBAL Ⅰ」「GLOBAL Ⅱ」における活動や自主性・自律性を育成する取組の様子を伝えている。スマートフォンやパソコンで本校の日常を簡単に見ることができるため、非常に多くの方に閲覧されている。

３．広報活動

（１）中学生・保護者対象学校説明会

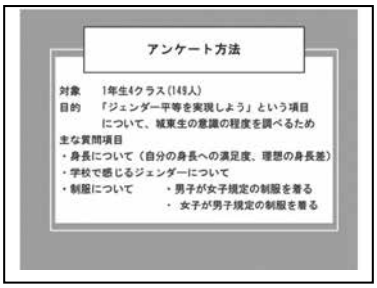
本校を会場で２回、地区別（赤磐市・備前・瀬戸内市・倉敷市・津山市）会場で４回の学校説明会を実施し、延べ 501 名の参加があった。また各中学校での説明会には７校、塾説明会には２ヶ所に参加した。いずれの説明会においても、「これからの社会に必要な資質・能力の育成を目標とした取組は大切だと思う」などの感想が聞かれ、本取組における課題研究や企業訪問、ボランティア活動が高い関心を集めていた。

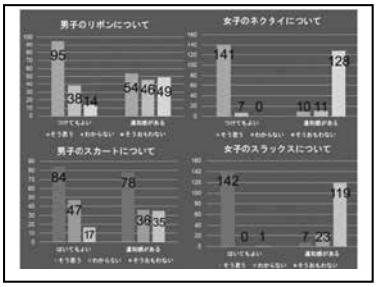
（２）中高連絡会

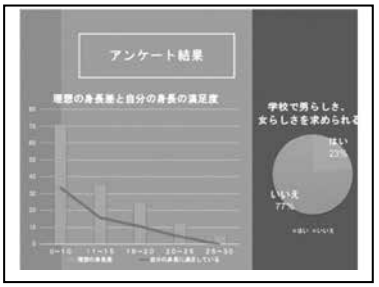
中学校教員を対象に、本校の特徴や取組に加えて本事業の説明を行った。ここでは本事業について概要から目的までを詳細に説明しており、中学生が本校の取組をよく理解した上で志望校決定ができるように、中学校の先生方には中学生への情報提供をお願いしている。

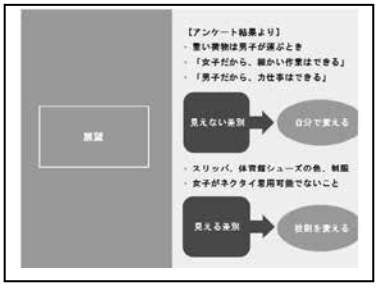
（３）オープンスクール

夏のオープンスクールは中止とした。秋のオープンスクールは参加人数を制限して実施し、594 名が参加した。２年次の在校生による学類紹介では、各学類の特色を活かした課題研究の面白さや苦労が紹介され、参加した中学生からは「プレゼンテーションが上手くてレベルが高いと思った」、「色々な取組の中で課題解決能力を伸ばしていると感じた」などの感想が寄せられた。









制服から変えよう　城東のジェンダーレス化

1年次6組　Group 4　　河合　遥音　　北原　望那
久次　あづさ　小野　紗英花　　森木沙耶香

背景・意義

城東高校には、男子と女子で差別化された制服の校則がある。しかし 2020 年冬、女子も「防寒対策」としてズボンの着用が認められた（ジェンダーレスの意図はなし）。また、班員はネクタイも着用可能にしてほしいと考えていた。

ジェンダーレスとは、生物学的差別による社会的、文化的な差別をなくそうという意味である。これによれば、男子もスカートを着用する権利があるし、リボンやネクタイはもちろん選択可能であるべきではないだろうか。実現するためには、まず生徒側のジェンダーに対する理解、意見が必要不可欠だ。今回の研究で、城東高校が制服のジェンダーレス化を進めるために必要な、私たち生徒の姿勢について調べていきたい。

研究手法

1年次4クラス計 149 名へのアンケート調査

結果・考察

男子がリボンをつけること、スカートをはくことに関して、容認はするが違和感があるという人が多かった。対して、女子がスラックスを着用することに抵抗感がある人は少数であり、ネクタイに関しては賛成派が約9割だった。。既に身近に例があるものには抵抗感が少ないと考えることができる。

理想の身長差が大きいほど、自分の身長に満足している人は減る傾向にあった。心の中での男性像、女性像の固定概念が強いのではないだろうか。
アンケートにおいて学校での性差による差別を受けたことがあるかという質問に関して、「ある」と回答した人は全体の 2 割弱で、残り 8 割の人はその性差別を無意識に容認していることがわかった。

結論・課題

私たちが学校生活でジェンダーレスを実現するには、制服やスリッパなどの可視化された差別だけでなく、まず私たちの日常に潜む見えない性差別から変えていかなくてはならない。そのためには城東生の気づきが必要だ。アンケートの中には、「先生の態度」に関する項目が多く目立った。違和感を感じたら、その場で質問してみよう。また、その違和感を感じ取れるようになろう。

また、制服の男女差をなくすことは自分の好みに合った制服を着たい気持ちに対応するだけでなく、個人が性別を特別意識せずに、快適な学校生活を送れることにもつながる。現代を生きる私たちにとって最も身近である制服のジェンダーレス化から、性への価値観をアップデートしてみてはどうだろうか。

展望

今回の調査は一部対象だったため、制服に関する生徒の意見は肯定が過半数とは言い難い。次回研究の機会があれば全校生徒に対して調査を行いたい。

アンケート結果で先生方のジェンダーに対する価値観についての疑問視が多くあがった。城東全体でジェンダーレス化を実現するには、、世代間によるジェンダーギャップの差も検討する必要があると感じた。

参考文献
https://withnews.jp/article/f0180330006qq000000000000000G00110601qq000017068A

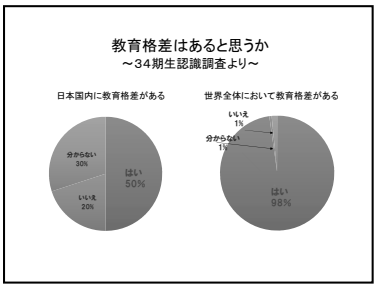
私たちが知らないこと～教育格差の現状～

1年次8組　Group4　　福田真鈴　　小川すみれ　　小野田七海
杉谷優斗　　山口泰平

背景・意義

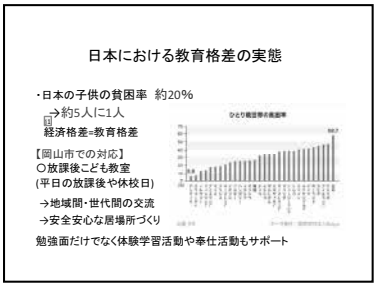
“教育”の当事者である私たちが、一番身近に考えられる課題としてSDGs4「質の高い教育をみんなに」について考えようと思った。「みんな」とは性別、国籍、家庭環境などによらないということを指しているのではないかと考える。

そこで、特に注目した事が“教育格差”だ。その中で、日本国内、また世界における教育格差の実態をより深く理解し、世界中の子供たちが平等に教育を受ける為に、高校生の私たち一人一人が出来ることはあるのか、あるとしたらどんな事があるのかを探ろうと考えた。



研究手法

・アンケート(対象：城東高校34期生)
目的：高校生が日本と世界の教育格差についてどれだけ認知しているかを探る。
・NPO法人ACEに対するZoomでのインタビュー
目的：海外で教育が満足に受けられていない子供たちを現地で支援している団体に直接インタビューをすることで、現状をより深く理解する。

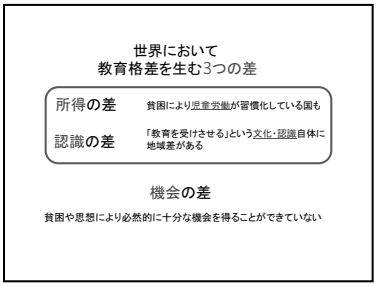


結果・考察

＜「教育格差はあると思うか」というアンケートの結果＞
日本：「ある」50%,「ない」20%　世界：「ある」98%,「ない」1%より
・日本の教育格差を認知している人に比べて、世界の教育格差を認知している人が約2倍と非常に多い。→多くの人は世界の教育格差を認知しているとわかる。では、なぜ教育格差がなくならないのか？

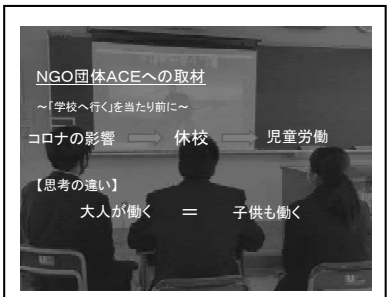
＜NGO法人ACEへのインタビューより＞
・世界で教育を満足に受けることができない発展途上国における子供たちは、‘児童労働’をしている子がほとんど。例)繁忙期に学校に行かせてもらえず、農業をさせられる子供。
・児童労働でなくても、貧困で学校に通わせる資金がない世帯やそもそも「子供に教育を受けさせる」という文化が無い地域がある。

＜私たちの考え＞
教育格差が生まれる要因には所得、認識、機会の三つの差があるのではないか。



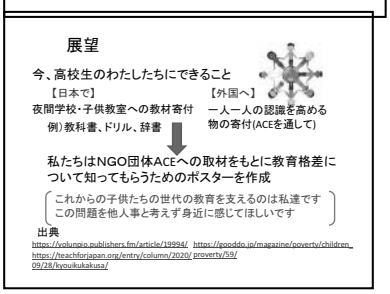
結論・課題

・世界の教育格差が認知されているにもかかわらず、教育格差がなくならない理由は、世界の中で子供の教育に対する認識に差があるからだと考えられる。
・認識の差がなくならなければ、その認識の差が次の世代まで受け継がれ、教育格差は、減少するどころか更に拡大していくと考えられる。



展望

＜教育に対する認識の差を減らすために私たちが出来ること＞
・国連が定めている子どもの権利条約について多くのひとに知ってもらう。
→ポスターを作成、掲示する。
・海外の教育を受けられない子供達を支援する団体を知る、興味を持つ。



参考文献
「わたし8歳、職業、家事　使用人。」　日下部尚徳　合同出版　2018
gooddoマガジン編集部　データで見る教育格差
https://gooddo.jp/magazine/poverty/children_poverty/59/ 2020/12/22
日本における教育格差 https://teachforjapan.org/entry/column/2020/09/28/kyouikukakusa/

研究協力　　NGO法人ACE

どれが最強の柱かしら

２年次グローバルⅡ　理数学類　物理　７班
研究者氏名　綾部愛華　大津寄優衣　金田優里　佐藤真亜子　田中菜々海

１　はじめに

平成３０年７月、私たちが住む岡山県で西日本豪雨が起きた。避難所での不便な生活の実態を知り、身近な素材で簡単に作成できる災害時グッズを作ろうと考えた。そこで、テーブルやベッドの脚の基本構造である柱の強度について探究した。

２　研究方法

実験①　三角柱、四角柱、五角柱、六角柱、八角柱、円柱を作成し、その上におもりをのせることで強度を測定した。周囲 24cm に統一したものと、断面積を 36 ㎠に統一したものを使用した。仮定として、角の数が多い柱ほど、強度が大きいと考えた。

実験②　三角柱、四角柱、六角柱、八角柱、円柱をそれぞれ４つつなげた構造を作成し、その上におもりをのせることで強度を測定した。次のような仮説を立て実験した。
‘複数個の柱での耐荷重’＝‘単体の柱での耐荷重’×‘繋げた柱の数’。

３　結果・考察

実験①　円柱が最も強いということが分かった。考察として、円は角を無数にした多角柱と考えることで仮説が成り立つ。

実験②　円柱を４つつなげた構造が最も強いということが分かった。しかし、仮説から予想される強度と実験から得られた強度に相違があった。そこで、組み合わせた柱の断面において、共有する辺の長さが長いほど、強度の増加率が大きいと考えた。

４　結論　今後の展望

薄い紙を用いても、２千倍の強度の大きい柱をつくることができた。柱のくっつけ方によって、より強い構造を作ることができると考えられる。すぐに応用することは難しいが、災害時に役立つベッド、椅子などの脚となる構造について迫ることができた。

５　参考文献

各種ハニカム構造の強度について
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsms1963/42/478/42_478_823/_pdf
構造による紙の強度の変化 https://gakusyu.shizuoka-c.ed.jp/science/ronnbunshu/h28/162097.pdf
大田和彦　これならわかる！構造力学　ナツメ社　2011 年発行

ナチュラルクリーニングの洗浄効果と環境負荷

２年次グローバルⅡ　理数学類　化学２班
研究者氏名　片山優和　岡田萌々子
川上佳苗　鳥越麻央

１　はじめに

合成洗剤は自然界に流出したときの環境への負荷が大きいことを知り、よりよい洗浄方法を調査する中でナチュラルクリーニングを知った。ナチュラルクリーニングとは合成洗剤などの人工的な薬品を使わず、重曹やクエン酸などの自然由来の物質を使って汚れを落とす方法のことで、汚れを中和することで洗浄効果を得ることができる。重曹やクエン酸は界面活性剤を含んでいないため、合成洗剤と比べて洗浄力が低いが日常的な洗浄に支障はないのではないか、生物によって分解されやすい物質であるため環境負荷が小さいのではないか、という２つの仮説を立てた。

２　研究手法

認知度と使用方法についての知識に関するアンケートを岡山城東高校の生徒 134 人に行った。実験１では皮脂汚れに見立てたオレイン酸を布に付着させ、重曹水、クエン酸水、合成洗剤水、精製水に入れて攪拌し、洗浄効果を調査した。実験２ではシンクの水垢に重曹、クエン酸、合成洗剤、精製水を塗布し、洗浄効果を調査した。実験３では重曹水、合成洗剤水の化学的酸素要求量（COD）を測定し、環境負荷を調査した。

３　結果・考察

ナチュラルクリーニングの認知度、使用方法の理解度はともに低かった。実験１では合成洗剤のほうが洗浄効果が高いが、重曹でも汚れは落ちた。クエン酸はあまり変化がみられなかった。皮脂汚れにはクエン酸より重曹が適していることがわかる。実験２では合成洗剤は洗剤残りが多く、洗浄に時間を要した。重曹はある程度汚れが落ちた。クエン酸は最も汚れが落ちた。水垢には重曹よりクエン酸が適していることがわかる。実験３では合成洗剤よりも重曹の方が遙かに数値が低く、化学的酸素要求量が小さい。よって環境負荷が小さいことがわかる。

４　結論・今後の展望

酸性の汚れには重曹、アルカリ性の汚れにはクエン酸を用いて掃除をすると、環境への負荷を抑えつつ十分な洗浄効果が得られる。しかし、その認知度は低く、合成洗剤を用いる場合が多い。基本の掃除ではナチュラルクリーニングを、ひどい汚れには合成洗剤を用いる、という掃除方法を提案し、普及させることが今後は重要だ。また今後は、条件を様々に変えて実験１，２を行い、どのような条件で最大の洗浄効果を発揮するかを明確にする実験を行う必要がある。

５　参考文献

簡易な方法による、肌着の皮脂汚れ洗浄テストについて　名古屋市消費生活センター等

歴史的建造物を残していくために

２年次グローバルⅡ　人文社会学類　歴史探究　７班
研究者氏名　伊藤　孝太　塚本　翔大　田中　結郁子　房延　穂乃香

１　はじめに

歴史的建造物がどのように現代まで保護されてきたのかについて気になり研究していたところ「文化財保護法」という法律があるのを知った。法律を作ってまでも保護している理由や意義等を知り、意味のある建物を保護しながら後世に残していくために必要なことを考え、宮大工という職業にスポットを当てて研究を行った。

２　研究手法

・任意に選んだ４クラスにアンケートを行い、歴史的建造物や宮大工に対する意識を調査した。
・宮大工の方にLINEでインタビューを行い現場の生の声を聞いた。

３　結果・考察

城東生約150人に宮大工についてのアンケートを行ったところ、宮大工という職業の認知度は低くないが、具体的な仕事内容などを知らない人や、宮大工に対して「大変そう」、「難しそう」というネガティブなイメージを持っている人が多いことが分かった。これらのことから、宮大工という職業に対してプラスのイメージが少なく、就職希望者が少ない現状に繋がっていると考えた。一方で、歴史的建造物が焼失や災害などの被害にあったとき、国民の税金を使い再建することに対する項目では９割以上が賛成した。その理由として、「日本が誇る伝統建築物であり、日本の伝統的な技術を後世に残していきたい」といった意見があった。伝統を守ることは大切であると感じながらも、そのための方法や宮大工という職業の必要性が十分に理解されていないことが分かった。

ホームページや宮大工の方へのインタビューからは、人手不足である現状や魅力について理解を深めることができた。また、宮大工の職に就いている人数や就職希望者は少ないが、宮大工養成塾や宮大工の会社など、宮大工の現状に対して様々な取り組みを行っている企業もあることが分かった。

４　結論・今後の展望

今回の調査を通して、歴史的建造物を後世に残していくためには宮大工という職業が必要不可欠であることが分かった。今後は、伝統を次世代へ残していくために、宮大工の必要性や魅力を発信し、仕事の担い手を確保するための効果的な方法を考えていきたい。

国際交流における姉妹都市縁組の役割と課題

2年次グローバルⅡ　人文社会学類　国際理解　3班
研究者氏名　大石　一翔　太田　暁星　白石　遥　松浦　奉希
山田　夏葵　川本　七穂　野田　笑可

1. はじめに

姉妹都市縁組とは、文化交流や親善を目的として結びついた国際的な都市同士の連携のことであるが、近年、様々な問題点が指摘されている。私たちは姉妹都市縁組実効性のあるものにするためには何が必要かを考察した。

2. 研究方法

文献やインターネットでの調査に加え、岡山市市民協働局市民協働部国際課と岡山県県民生活部国際課をそれぞれ訪問し、インタビューを行った。また、二年次生を対象とした姉妹都市縁組の認知について、アンケート調査を実施した。

3. 結果・考察

インタビューから、岡山市の課題は、若者の認知度が低いことだと分かった。

そこで、城東高校二年次生を対象に姉妹都市縁組の認知度についてのアンケート調査を行った。アンケートの結果より、コスタリカの商品を購入できるイベントを行うことで、若者の認知度を上げることにつながるのではないかと考えた。

4. 結論・今後の展望

私たちの提案する企画内容は次の三つである。

① サルサソースを作ったタコス作り
② 民族衣装体験
③ ＶＲを使った観光スポット巡り

これらの企画は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、実現は叶わなかったが、研究を進めることで、姉妹都市を広める第一歩を踏み出すことができたのではないかと思う。

5. 参考文献

古性摩里乃・諸井克英・天野太郎「日中の友好都市交流の現状と課題」
「地域社会における『姉妹都市』提携の機能と課題(1)~(3)」『同志社女子大学生活科学』
Vol.50 51(2016,2017)

船井英史・大西佑宜・柿村健太郎
(一財)自治体国際化協会 北京事務所 CLEAR REPORT No.486 (2019)

The possibility of NON-SLAUGHTERED-MEAT

2-7 Group C Honoka Maruo, Hina Nonaka
Hana Matsumoto, Mai Tanaka, Nanami Tanimoto

1. Introduction

Now, there are two problems which will cause the shortage of food in the world in the near future. First, the world population has been increasing rapidly. The demand for food will increase greatly following the population explosion. Second, sea level has been increasing every year because of global warming, which has caused the great harm of storm surge in some area. If it continues rising, the world farmland will be lost and the soil salinization will become worse. Then, the crop decrease rapidly, and agricultural products have big damages, this can lead to the rise in prices of transported food, and more and more people will have difficulty in getting as much food as they need. And here, we focused on one kind of meat, NON-SLAUGHTERED-MEAT, called "培養肉" in Japanese, which would help these problems. This meat enables us to reduce CO2 from livestock. Second, NON-SLAUGHTERED-MEAT can reduce the amount of grain. Third, we can produce more meats faster and at the same time don't need to kill animals to eat.

2. Research Methods

To spread the acknowledgement of NON-SLAUGHTERED-MEAT to people around us, we referred to the Internet articles first. We checked that history of NON-SLAUGHTERED-MEAT, especially about how to and how long does it take to produce it, prediction of the world population, global warming, and above sea level, how much CO2 are discharged and how much grains are eaten by livestock. Also, we conducted a questionnaire survey for NISSIN FOOD Holdings which has been developing a kind of NON-SLAUGHTERED-MEAT, "cultured steak". We asked three questions on their motivation for starting the development of NON-SLAUGHTERED-MEAT, the way of spreading it, and their final goals to develop it.

3. Result and Discussion

According to the questionnaire for NISSIN FOOD Holdings, they said that they started developing NON-SLAUGHTERED-MEAT to solve the world problems and to supply meals to people all over the world. The biggest difficulty is to increase the acceptance of the meat in public. Also, their final goal of developing the NON-SLAUGHTERED-MEAT is to add the meat to the market as one choice among other normal meats. From their answers, we realized the one thing that we have to do first is to spread correct knowledge and turn the negative images into the positive images. We thought of what the effective way of spreading NON-SLAUGHTERED-MEAT is. As a result, we created an Instagram account dedicated to NON-SLAUGHTERED-MEAT.

4. Conclusion

Through our research, if the positive images about the meat spread around us, NON-SLAUGHTERED-MEAT will be one of our food choices and many people who have difficulty in getting food will be helped. At last, we want to tell people that NON-SLAUGHTERED-MEAT is "healthy" for both the earth and us.

ストリートピアノの現状と今後の活用の可能性

グローバルⅡ　音楽学類１班
小川　桜　　笠原　璃音　　田中　里佳　　廣田　麗

１．はじめに

近年、全国にストリートピアノが増え、岡山市に設置されたことにより、私たちもストリートピアノの存在をより身近に感じた。今後、街中にストリートピアノが設置されている環境が当たり前になっていくことを考え、改めて、その存在意義を考え、関わる人々の声や問題を調査したいと考えた。また、本研究を通して、新たなストリートピアノの活用方法や、ストリートピアノを活かした音楽文化の普及を考えたい。

２．研究手法

インターネットを用いて、全国のストリートピアノの設置場所や設置日、ピアノの種類について調べた。また、岡山県内でストリートピアノを設置している施設へ、設置目的や設置状況についてインタビューを行った。研究経緯で、イコットニコットのストリートピアノが 2020 年 12 月末に撤去されることを知り、イコットニコットで独自に企画したコンサートを開き、ストリートピアノのすばらしさを伝えたいと考えた。

３．結果・考察

2019 年と 2020 年は、合わせて 100 台以上のストリートピアノが設置された。また、設置されているストリートピアノの台数は、都道府県によって大きく異なる。ストリートピアノの設置目的は、地域の方や観光客に音楽を楽しんでもらうことを目的としている。しかし、騒音や演奏マナーなど、課題はある。

４．結論・今後の展望

近年、ストリートピアノが増えてきている。設置していく上で騒音や維持費、環境的な問題などがあることが明らかになった。また、ストリートピアノを活用した演奏会を開いてみて、多くの人に立ち止まって聴いてもらえたことで、ストリートピアノの必要性を知った。そして、その場にいた人や演奏を聴いてくれた人達に、音楽の楽しさやストリートピアノの良さを伝えることができた。

５．参考文献

・東京都　Tokyo　Metropolitan　Government（閲覧日 2021 年 1 月 29 日）
https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2019/04/04/18.html
・ぐるっと岡山（閲覧日 2021 年 1 月 29 日）https://okayama-grt.com/event/115/
・宇野駅ストリートピアノ（閲覧日 2021 年 1 月 29 日）
https://www.city.tamano.lg.jp/soshiki/2/11378.html
・ストリートピアノ設置場所情報専門サイト誰でもピアノ（閲覧日 2021 年 1 月 29 日）
https://pianomitsuketa.com/
・LovePiano　ヤマハ（閲覧日 2021 年 1 月 29 日）
https://jp.yamaha.com/products/contents/pianos/lovepiano/index.html

平成31年度入学生〔33期生〕 単位制教育課程編成表 その1

岡山県立岡山城東高等学校

科目群	教科	正式科目	校内名称	(標準)単位	1年	人文社会学類 2年	人文社会学類 3年	理数学類 2年	理数学類 3年	国際教養学類 2年	国際教養学類 3年	音楽学類 2年	音楽学類 3年
必履修科目等	国語	国語総合	国語総合	4	5								
必履修科目等	国語	現代文B	現代文B	4		2	2	2	2	2	2	2	2
必履修科目等	国語	古典B	古典	4		4	4			4	4	4	4
必履修科目等	国語	古典B	理系古典	4				3	3				
必履修科目等	地理歴史	世界史A	世界史A	2			(ア) (イ)	(ウ) 2 (エ)			(ア) (イ)	(ウ) 2 (エ)	
必履修科目等	地理歴史	世界史B	世界史BⅠ	4		3		(エ) 3		3		(エ) 3	
必履修科目等	地理歴史	世界史B	世界史BⅡ	4			(ア) 3 (イ) 3		3		(ア) 3 (イ) 3		3
必履修科目等	地理歴史	日本史A	日本史A	2				2				2	
必履修科目等	地理歴史	日本史B	日本史BⅠ	4		3		3		3		3	
必履修科目等	地理歴史	日本史B	日本史BⅡ	4			3 3		3		3 3		3
必履修科目等	地理歴史	地理A	地理A	2				2				2	
必履修科目等	地理歴史	地理B	地理BⅠ	4		3		3		3		3	
必履修科目等	地理歴史	地理B	地理BⅡ	4			3 3		3		3 3		3
必履修科目等	公民	現代社会	現代社会	2	2								
必履修科目等	数学	数学Ⅰ	数学Ⅰ	3	3								
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	数学Ⅱ	4	1								
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	文系数学Ⅱ	4		3				3		3	
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	標準数学Ⅱ	4				4 ④					
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	速修数学Ⅱ	4				3					
必履修科目等	数学	数学Ⅲ	数学Ⅲ	5				1	3				
必履修科目等	数学	数学A	数学A	2	2								
必履修科目等	数学	数学B	文系数学B	2		2				2		2	
必履修科目等	数学	数学B	理系数学B	2				2					
必履修科目等	数学	＊数学特論	＊数学特論	3					3				
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	総合数学A	4			3				3		3
必履修科目等	数学	数学B	総合数学B	2			2				2		2
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	総合数学C	4					3				
必履修科目等	理科	物理基礎	物理基礎	2	2								
必履修科目等	理科	化学基礎	化学基礎	2	2								
必履修科目等	理科	生物基礎	生物基礎	2	2								
必履修科目等	理科	物理	文系物理	4			4				4		4
必履修科目等	理科	物理	理系物理Ⅰ	4				3					
必履修科目等	理科	物理	理系物理Ⅱ	4					4				
必履修科目等	理科	物理	速修物理	4					3				
必履修科目等	理科	化学	文系化学	4			4				4		4
必履修科目等	理科	化学	理系化学Ⅰ	4				3					
必履修科目等	理科	化学	理系化学Ⅱ	4					4				
必履修科目等	理科	生物	文系生物	4			4				4		4
必履修科目等	理科	生物	理系生物Ⅰ	4				3					
必履修科目等	理科	生物	理系生物Ⅱ	4					4				
必履修科目等	理科	生物	速修生物	4					3				
必履修科目等	理科	＊物理研究	＊物理研究Ⅰ	3		1				1		1	
必履修科目等	理科	＊物理研究	＊物理研究Ⅱ	3			2				2		2
必履修科目等	理科	＊化学研究	＊化学研究Ⅰ	3		1				1		1	
必履修科目等	理科	＊化学研究	＊化学研究Ⅱ	3			2				2		2
必履修科目等	理科	＊生物研究	＊生物研究Ⅰ	3		1				1		1	
必履修科目等	理科	＊生物研究	＊生物研究Ⅱ	3			2				2		2
必履修科目等	保健体育	体育	体育	7～8	2	2	3	2	3	2	3	2	3
必履修科目等	保健体育	保健	保健	2	1	1		1		1		1	
必履修科目等	芸術	音楽Ⅰ	音楽Ⅰ	2	2								
必履修科目等	芸術	音楽Ⅱ	音楽Ⅱ	2		1				1		1	
必履修科目等	芸術	音楽Ⅲ	音楽鑑賞法	2									1
必履修科目等	芸術	美術Ⅰ	美術Ⅰ	2	2								
必履修科目等	芸術	美術Ⅱ	美術Ⅱ	2		1				1			
必履修科目等	芸術	書道Ⅰ	書道Ⅰ	2	2								
必履修科目等	芸術	書道Ⅱ	書道Ⅱ	2		1				1			
必履修科目等	外国語	英語コミュニケーションⅠ	英語コミュニケーションⅠ	3	3								
必履修科目等	外国語	英語コミュニケーションⅡ	英語コミュニケーションⅡ	4		3		3		3		3	
必履修科目等	外国語	英語コミュニケーションⅢ	英語コミュニケーションⅢ	4		1	4	1	4	1	4	1	4
必履修科目等	外国語	英語表現Ⅰ	英語表現Ⅰ	2	2								
必履修科目等	外国語	英語表現Ⅱ	英語表現Ⅱ	4		2	2	2	2			2	2
必履修科目等	家庭	家庭基礎	家庭基礎	2	2								
必履修科目等	情報	情報の科学	情報の科学	2	2								
必履修科目等	音楽	＊Global Music	＊Global Music	1								1	
必履修科目等	英語	英語表現	英語表現	4～8						2			
必履修科目等	英語	総合英語	総合英語	4～13							2		
学類コア科目	音楽	音楽理論	音楽理論Ⅰ	2～8								1	
学類コア科目	音楽	音楽理論	音楽理論Ⅱ	2～8									1
学類コア科目	音楽	ソルフェージュ	ソルフェージュⅠ	6～12								2	
学類コア科目	音楽	ソルフェージュ	ソルフェージュⅡ	6～12									2
学類コア科目	国語	＊Global Arts A	＊文学探究	2		1	1						
学類コア科目	地理歴史	＊Global Arts B	＊歴史探究	2		1	1						
学類コア科目	公民	＊Global Arts D	＊国際理解	2		1	1						
学類コア科目	数理科学	＊Global Science	＊Global Science	2				1	1				
学類コア科目	英語	＊Global Studies	＊Global Studies	2						2			
学類コア科目	英語	＊プラクティカル・ライティング	＊プラクティカル・ライティング	2							2		
GLOBAL		＊GLOBAL Ⅲ	＊GLOBAL Ⅲ	2			2		2		2		2
		総合的な探究の時間		3～6	1	2	0	2	0	2	0	2	0
		LHR			1	1	1	1	1	1	1	1	1

○ ＊は学校設定科目である。
○ 卒業に必要な単位数は、74単位以上である。
○ 単位数と学類ごとの配当は標準的なものであり、学類を越えて選択することも可能である。

・地歴(ウ)の場合は、世界史Aに加え、日本史BⅠ・地理BⅠのいずれかを選択する。
・地歴(エ)の場合は、世界史BⅠに加え、日本史A・地理Aのいずれかを選択する。

・地歴(ア)の場合は、2年次に選択したB科目と同じBⅡ科目を1つ選択する。
・地歴(イ)の場合は、世界史BⅡに加え、2年次に選択したB科目と同じBⅡ科目を1つ選択する。

平成31年度入学生〔33期生〕　単位制教育課程編成表　その2

岡山県立岡山城東高等学校

年次	系	教科	正式科目名	校内名称	標準単位	選択単位	学類
1年次		英語	海外文化体験研修	海外文化体験研修	2	2	
2年次	人文社会学系	国語	古典B	国文法特講α	4	1	
2年次	人文社会学系	国語	古典B	国文法特講β	4	2	
2年次	人文社会学系	外国語・英語	コミュニケーション英語Ⅱ	英語精読α	4	1	(人)(国)(音)
2年次	人文社会学系	外国語・英語	コミュニケーション英語Ⅱ	英語精読β	4	2	(人)(国)(音)
2年次	人文社会学系	外国語・英語	異文化理解	異文化理解α	2～6	1	
2年次	人文社会学系	外国語・英語	*フランス語	*フランス語	2	2	
2年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	Basic数学	4	1	(人)(国)
2年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅰα	4	1	
2年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅰβ	4	2	
2年次	芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅰα	2～16	1	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅰβ	2～16	2	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅰα	2～16	1	(理)
2年次	芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅰβ	2～16	2	(理)
2年次	芸術・体育系	書道	書道Ⅱ	書道Ⅱ特講α	2	1	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	書道	書道Ⅱ	書道Ⅱ特講β	2	2	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	音楽	器楽	ピアノⅠ	2～12	1 }	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	声楽	声楽Ⅰ	2～12	1 }	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	声楽	合唱Ⅰ	2～12	1 }	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	音楽理論	和声学Ⅰ	2～8	1 }	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	アンサンブル	2～8	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	弦楽アンサンブルⅠ	2～8	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	*SJPP	*SJPP（聴講）	2	2	(音)
2年次	芸術・体育系	保体	*アスリート	*アスリート	2	2	
2年次		英語	*海外修学研修	*海外修学研修	1	1	

年次	教科	正式科目名	校内名称	標準単位	選択単位	学類
履修年次を問わない科目	国語	*作品熟読	*作品熟読α	1～2	1	
履修年次を問わない科目	国語	*作品熟読	*作品熟読β	1～2	2	
履修年次を問わない科目	公民	倫理	倫理	2	2	
履修年次を問わない科目	公民	政治・経済	政治・経済	2	2	
履修年次を問わない科目	家庭	子ども文化	子ども文化	2～4	2	
履修年次を問わない科目	家庭	フードデザイン	フードデザイン	2～6	2	
履修年次を問わない科目	理科	*環境科学	*環境科学	2	2	

【選択の留意事項】
パッケージの自由選択枠で、進路希望や興味・関心に応じて選択科目から選ぶ。

○ ＊印は、学校設定科目を示す。
○ 表中の ︸ は、1単位ものの科目を2つまたは3つセットで選択することを意味する。
○ 表中の学類欄の（　）は、その科目の選択可能な学類を示している。表記がない場合は、すべての学類からの選択が可能である。
○ 校内名称にα・βが付いた同一名称の科目は、同一年次で同時に履修することはできない。
○ 履修するための要件を設定している科目があるので、授業ガイドの「履修上の留意点」をよく読むこと。
○ 以下の科目は、同一年次に選択することはできない。
「倫理」と「政治・経済」、「子ども文化」と「フードデザイン」
○ 時間割の編成上、以下のことを選択要件とする。
① 音楽学類2年次パッケージ②では、「ピアノⅠ＋声楽Ⅰ」を選択しなければならない。
② 音楽学類3年次パッケージⅡでは、「ピアノⅡ＋声楽Ⅱ」を選択しなければならない。
○ 実技系の選択科目は、2～3年次に継続して選択することが望ましいが、進路希望の変更に応じて選択を変えることもできる。

年次	系	教科	正式科目名	校内名称	標準単位	選択単位	学類
3年次	人文社会学系	国語	古典A	古典講読	2	2	
3年次	人文社会学系	国語	国語表現	国語表現	3	2	
3年次	人文社会学系	地理歴史・公民	世界史B	世界史B研究α	4	1	
3年次	人文社会学系	地理歴史・公民	世界史B	世界史B研究β	4	2	
3年次	人文社会学系	地理歴史・公民	日本史B	日本史B研究α	4	1	
3年次	人文社会学系	地理歴史・公民	日本史B	日本史B研究β	4	2	
3年次	人文社会学系	地理歴史・公民	地理B	地理B研究α	4	1	
3年次	人文社会学系	地理歴史・公民	地理B	地理B研究β	4	2	
3年次	人文社会学系	地理歴史・公民	現代社会	現代社会研究	2	2	
3年次	人文社会学系	外国語・英語	コミュニケーション英語Ⅲ	英語講読α	4	1	(人)(国)(音)
3年次	人文社会学系	外国語・英語	コミュニケーション英語Ⅲ	英語講読β	4	2	(理)
3年次	人文社会学系	外国語・英語	英語表現	英会話	4～8	1	
3年次	人文社会学系	外国語・英語	時事英語	時事英語	2～6	1	
3年次	人文社会学系	外国語・英語	英語理解	英語理解	4～10	2	(国)
3年次	人文社会学系	外国語・英語	*LL演習	*LL演習	1	1	
3年次	人文社会学系	外国語・英語	*英語基礎	*英語基礎	2	2	
3年次	人文社会学系	外国語・英語	*ドイツ語	*ドイツ語	2	2	
3年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅱα	4	1	
3年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅱβ	4	2	
3年次	自然科学系	理科	物理	テーマ物理α	4	1	(人)(国)(音)
3年次	自然科学系	理科	物理	テーマ物理β	4	2	(人)(国)(音)
3年次	自然科学系	理科	化学	テーマ化学α	4	1	(人)(国)(音)
3年次	自然科学系	理科	化学	テーマ化学β	4	2	(人)(国)(音)
3年次	自然科学系	理科	生物	テーマ生物α	4	1	(人)(国)(音)
3年次	自然科学系	理科	生物	テーマ生物β	4	2	(人)(国)(音)
3年次	自然科学系	理科	物理	物理特論α	4	1	(理)
3年次	自然科学系	理科	物理	物理特論β	4	2	(理)
3年次	自然科学系	理科	化学	化学特論α	4	1	(理)
3年次	自然科学系	理科	化学	化学特論β	4	2	(理)
3年次	自然科学系	理科	生物	生物特論α	4	1	(理)
3年次	自然科学系	理科	生物	生物特論β	4	2	(理)
3年次	芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅱα	2～16	1	(人)(国)
3年次	芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅱβ	2～16	2	(人)(国)
3年次	芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅱα	2～16	1	(理)
3年次	芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅱβ	2～16	2	(理)
3年次	芸術・体育系	書道	書道Ⅲ	書道Ⅲα	2	1	(人)(国)
3年次	芸術・体育系	書道	書道Ⅲ	書道Ⅲβ	2	2	(人)(国)
3年次	芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	新曲視唱	6～12	1	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	音楽基礎演習	6～12	1	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	音楽発展演習	6～12	1	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	音楽Ⅱ	実践実技基礎	2	1	(人)(理)(国)
3年次	芸術・体育系	音楽	鑑賞研究	オペラ鑑賞法	2～12	2	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	器楽	ピアノⅡ	2～12	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	声楽	声楽Ⅱ	2～12	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	伴奏法（声楽）	2～8	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	声楽	合唱Ⅱ	2～12	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	弦楽アンサンブルⅡ	2～8	2 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	伴奏法（弦楽）	2～8	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	音楽理論	和声学Ⅱ	2～8	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	音楽史	音楽史	2～8	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	鑑賞研究	作曲家研究	2～12	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	音楽理論	和声学基礎	2～8	1	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	弦楽アンサンブル基礎	2～8	1	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	音楽Ⅲ	総合実技演習	2	1	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	音楽理論	音楽理論演習	2～8	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	ソルフェージュ発展演習	6～12	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	専攻実技演習	2～8	1 }	(音)
3年次	芸術・体育系	音楽	*SJPP	*SJPP	2	2	(音)
3年次	芸術・体育系	保体	*トップアスリート	*トップアスリート	2	2	

令和2年度入学生〔34期生〕 単位制教育課程編成表 その1

岡山県立岡山城東高等学校

科目群	教科	正式科目	校内名称	(標準)単位	1年	人文社会学類 2年	人文社会学類 3年	理数学類 2年	理数学類 3年	国際教養学類 2年	国際教養学類 3年	音楽学類 2年	音楽学類 3年
必履修科目等	国語	国語総合	国語総合	4	5								
必履修科目等	国語	現代文B	現代文B	4		2	2	2	2	2	2	2	2
必履修科目等	国語	古典B	古典	4		4	4			4	4	4	4
必履修科目等	国語	古典B	理系古典	4				3	3				
必履修科目等	地理歴史	世界史A	世界史A	2			(ア) (イ)	(ウ) 2 (エ)			(ア) (イ)	(ウ) 2 (エ)	
必履修科目等	地理歴史	世界史B	世界史BⅠ	4		3		(エ) 3		3		(エ) 3	
必履修科目等	地理歴史	世界史B	世界史BⅡ	4			(ア) 3 (イ) 3		3		(ア) 3 (イ) 3		3
必履修科目等	地理歴史	日本史A	日本史A	2				(エ) 2				(エ) 2	
必履修科目等	地理歴史	日本史B	日本史BⅠ	4		3		(ウ) 3		3		(ウ) 3	
必履修科目等	地理歴史	日本史B	日本史BⅡ	4			(ア) 3 (イ) 3		3		(ア) 3 (イ) 3		3
必履修科目等	地理歴史	地理A	地理A	2				(エ) 2				(エ) 2	
必履修科目等	地理歴史	地理B	地理BⅠ	4		3		(ウ) 3		3		(ウ) 3	
必履修科目等	地理歴史	地理B	地理BⅡ	4			(ア) 3 (イ) 3		3		(ア) 3 (イ) 3		3
必履修科目等	公民	現代社会	現代社会	2	2								
必履修科目等	数学	数学Ⅰ	数学Ⅰ	3	3								
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	数学Ⅱ	4	1								
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	文系数学Ⅱ	4		3				3		3	
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	標準数学Ⅱ	4				4 ④					
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	速修数学Ⅱ	4				3 ④					
必履修科目等	数学	数学Ⅲ	数学Ⅲ	5				1 ④	3				
必履修科目等	数学	数学A	数学A	2	2								
必履修科目等	数学	数学B	文系数学B	2		2				2		2	
必履修科目等	数学	数学B	理系数学B	2				2					
必履修科目等	数学	＊数学特論	＊数学特論	3					3				
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	総合数学A	4			3				3		3
必履修科目等	数学	数学B	総合数学B	2			2				2		2
必履修科目等	数学	数学Ⅱ	総合数学C	4					3				
必履修科目等	理科	物理基礎	物理基礎	2	2								
必履修科目等	理科	化学基礎	化学基礎	2	2								
必履修科目等	理科	生物基礎	生物基礎	2	2								
必履修科目等	理科	物理	文系物理	4			4				4		4
必履修科目等	理科	物理	理系物理Ⅰ	4				3					
必履修科目等	理科	物理	理系物理Ⅱ	4					4				
必履修科目等	理科	物理	速修物理	4					3				
必履修科目等	理科	化学	文系化学	4			4				4		4
必履修科目等	理科	化学	理系化学Ⅰ	4				3					
必履修科目等	理科	化学	理系化学Ⅱ	4					4				
必履修科目等	理科	生物	文系生物	4			4				4		4
必履修科目等	理科	生物	理系生物Ⅰ	4				3					
必履修科目等	理科	生物	理系生物Ⅱ	4					4				
必履修科目等	理科	生物	速修生物	4					3				
必履修科目等	理科	＊物理研究	＊物理研究Ⅰ	3		1				1		1	
必履修科目等	理科	＊物理研究	＊物理研究Ⅱ	3			2				2		2
必履修科目等	理科	＊化学研究	＊化学研究Ⅰ	3		1				1		1	
必履修科目等	理科	＊化学研究	＊化学研究Ⅱ	3			2				2		2
必履修科目等	理科	＊生物研究	＊生物研究Ⅰ	3		1				1		1	
必履修科目等	理科	＊生物研究	＊生物研究Ⅱ	3			2				2		2
必履修科目等	保健体育	体育	体育	7〜8	2	2	3	2	3	2	3	2	3
必履修科目等	保健体育	保健	保健	2	1	1		1		1		1	
必履修科目等	芸術	音楽Ⅰ	音楽Ⅰ	2	2								
必履修科目等	芸術	音楽Ⅱ	音楽Ⅱ	2		1				1		1	
必履修科目等	芸術	音楽Ⅲ	音楽鑑賞法	2									1
必履修科目等	芸術	美術Ⅰ	美術Ⅰ	2	2								
必履修科目等	芸術	美術Ⅱ	美術Ⅱ	2		1				1			
必履修科目等	芸術	書道Ⅰ	書道Ⅰ	2	2								
必履修科目等	芸術	書道Ⅱ	書道Ⅱ	2		1				1			
必履修科目等	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3								
必履修科目等	外国語	コミュニケーション英語Ⅱ	コミュニケーション英語Ⅱ	4		3		3		3		3	
必履修科目等	外国語	コミュニケーション英語Ⅲ	コミュニケーション英語Ⅲ	4		1	4	1	4	1	4	1	4
必履修科目等	外国語	英語表現Ⅰ	英語表現Ⅰ	2	2								
必履修科目等	外国語	英語表現Ⅱ	英語表現Ⅱ	4		2	2	2	2			2	2
必履修科目等	家庭	家庭基礎	家庭基礎	2	2								
必履修科目等	情報	情報の科学	情報の科学	2	2								
必履修科目等	音楽	＊Global Music	＊Global Music	1								1	
必履修科目等	英語	英語表現	英語表現	4〜8						2			
必履修科目等	英語	総合英語	総合英語	4〜13							2		
学類コア科目	音楽	音楽理論	音楽理論Ⅰ	2〜8								1	
学類コア科目	音楽	音楽理論	音楽理論Ⅱ	2〜8									1
学類コア科目	音楽	ソルフェージュ	ソルフェージュⅠ	6〜12								2	
学類コア科目	音楽	ソルフェージュ	ソルフェージュⅡ	6〜12									2
学類コア科目	国語	＊Global Arts A	＊文学探究	2		1	1						
学類コア科目	地理歴史	＊Global Arts B	＊歴史探究	2		1	1						
学類コア科目	公民	＊Global Arts D	＊国際理解	2		1	1						
学類コア科目	数理科学	＊Global Science	＊Global Science	2				1	1				
学類コア科目	英語	＊Global Studies	＊Global Studies	2						2			
学類コア科目	英語	＊プラクティカル・ライティング	＊プラクティカル・ライティング	2							2		
	GLOBAL	＊GLOBAL Ⅲ	＊GLOBAL Ⅲ	2			2		2		2		2
総合的な探究の時間				3〜6	1	2	0	2	0	2	0	2	0
LHR					1	1	1	1	1	1	1	1	1

○ ＊は学校設定科目である。
○ 卒業に必要な単位数は、74単位以上である。
○ 単位数と学類ごとの配当は標準的なものであり、学類を越えて選択することも可能である。

・地歴（ウ）の場合は、世界史Aに加え、日本史BⅠ・地理BⅠのいずれかを選択する。
・地歴（エ）の場合は、世界史BⅠに加え、日本史A・地理Aのいずれかを選択する。

・地歴（ア）の場合は、2年次に選択したB科目と同じBⅡ科目を1つ選択する。
・地歴（イ）の場合は、世界史BⅡに加え、2年次に選択したB科目と同じBⅡ科目を1つ選択する。

令和２年度入学生〔34期生〕　単位制教育課程編成表　その2

岡山県立岡山城東高等学校

２年次選択科目（1年次を含む）

年次	系	教科	正式科目名	校内名称	標準単位	選択単位	学類
1年次		英語	海外文化体験研修	海外文化体験研修	2	2	
2年次	人文社会学系	国語	古典B	国文法特講α	4	1	
2年次	人文社会学系	国語	古典B	国文法特講β	4	2	
2年次	人文社会学系	外国語・英語	英語コミュニケーションⅡ	英語精読α	4	1	(人)(国)(音)
2年次	人文社会学系	外国語・英語	英語コミュニケーションⅡ	英語精読β	4	2	(人)(国)(音)
2年次	人文社会学系	外国語・英語	異文化理解	異文化理解α	2～6	1	
2年次	人文社会学系	外国語・英語	＊フランス語	＊フランス語	2	2	
2年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	Basic数学	4	1	(人)(国)
2年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅰα	4	1	
2年次	自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅰβ	4	2	
2年次	芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅰα	2～16	1	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅰβ	2～16	2	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅰα	2～16	1	(理)
2年次	芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅰβ	2～16	2	(理)
2年次	芸術・体育系	書道	書道Ⅱ	書道Ⅱ特講α	2	1	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	書道	書道Ⅱ	書道Ⅱ特講β	2	2	(人)(国)
2年次	芸術・体育系	音楽	器楽	ピアノⅠ	2～12	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	声楽	声楽Ⅰ	2～12	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	声楽	合唱Ⅰ	2～12	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	音楽理論	和声学Ⅰ	2～8	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	アンサンブル	2～8	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	演奏研究	弦楽アンサンブルⅠ	2～8	1	(音)
2年次	芸術・体育系	音楽	＊SJPP	＊SJPP（聴講）	2	2	(音)
2年次	芸術・体育系	保体	＊アスリート	＊アスリート	2	2	
2年次		英語	＊海外修学研修	＊海外修学研修	1	1	

履修年次を問わない科目

教科	正式科目名	校内名称	標準単位	選択単位
国語	＊作品熟読	＊作品熟読α	1～2	1
国語	＊作品熟読	＊作品熟読β	1～2	2
公民	倫理	倫理	2	2
公民	政治・経済	政治・経済	2	2
家庭	子ども文化	子ども文化	2～4	2
家庭	フードデザイン	フードデザイン	2～6	2
理科	＊環境科学	＊環境科学	2	2

【選択の留意事項】

パッケージの自由選択枠で、進路希望や興味・関心に応じて選択科目から選ぶ。

○ ＊印は、学校設定科目を示す。
○ 表中の ⏟ は、1単位ものの科目を2つまたは3つセットで選択することを意味する。
○ 表中の学類欄の（　）は、その科目の選択可能な学類を示している。表記がない場合は、すべての学類からの選択が可能である。
○ 校内名称にα・βが付いた同一名称の科目は、同一年次で同時に履修することはできない。
○ 履修するための要件を設定している科目があるので、授業ガイドの「履修上の留意点」をよく読むこと。
○ 以下の科目は、同一年次に選択することはできない。
　「倫理」と「政治・経済」、「子ども文化」と「フードデザイン」
○ 時間割の編成上、以下のことを選択要件とする。
　① 音楽学類2年次パッケージ②では、「ピアノⅠ＋声楽Ⅰ」を選択しなければならない。
　② 音楽学類3年次パッケージⅡでは、「ピアノⅡ＋声楽Ⅱ」を選択しなければならない。
○ 実技系の選択科目は、2～3年次に継続して選択することが望ましいが、進路希望の変更に応じて選択を変えることもできる。

３年次選択科目

系	教科	正式科目名	校内名称	標準単位	選択単位	学類
人文社会学系	国語	古典A	古典講読	2	2	
人文社会学系	国語	国語表現	国語表現	3	2	
人文社会学系	地理歴史・公民	世界史B	世界史B研究α	4	1	
人文社会学系	地理歴史・公民	世界史B	世界史B研究β	4	2	
人文社会学系	地理歴史・公民	日本史B	日本史B研究α	4	1	
人文社会学系	地理歴史・公民	日本史B	日本史B研究β	4	2	
人文社会学系	地理歴史・公民	地理B	地理B研究α	4	1	
人文社会学系	地理歴史・公民	地理B	地理B研究β	4	2	
人文社会学系	地理歴史・公民	現代社会	現代社会研究	2	2	
人文社会学系	外国語・英語	英語コミュニケーションⅢ	英語講読α	4	1	(人)(国)(音)
人文社会学系	外国語・英語	英語コミュニケーションⅢ	英語講読β	4	2	(理)
人文社会学系	外国語・英語	英語表現	英会話	4～8	1	
人文社会学系	外国語・英語	時事英語	時事英語	2～6	1	
人文社会学系	外国語・英語	英語理解	英語理解	4～10	2	(国)
人文社会学系	外国語・英語	＊LL演習	＊LL演習	1	1	
人文社会学系	外国語・英語	＊英語基礎	＊英語基礎	2	2	
人文社会学系	外国語・英語	＊ドイツ語	＊ドイツ語	2	2	
自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅱα	4	1	
自然科学系	数学	数学Ⅱ	数学演習Ⅱβ	4	2	
自然科学系	理科	物理	テーマ物理α	4	1	(人)(国)(音)
自然科学系	理科	物理	テーマ物理β	4	2	(人)(国)(音)
自然科学系	理科	化学	テーマ化学α	4	1	(人)(国)(音)
自然科学系	理科	化学	テーマ化学β	4	2	(人)(国)(音)
自然科学系	理科	生物	テーマ生物α	4	1	(人)(国)(音)
自然科学系	理科	生物	テーマ生物β	4	2	(人)(国)(音)
自然科学系	理科	物理	物理特論α	4	1	(理)
自然科学系	理科	物理	物理特論β	4	2	(理)
自然科学系	理科	化学	化学特論α	4	1	(理)
自然科学系	理科	化学	化学特論β	4	2	(理)
自然科学系	理科	生物	生物特論α	4	1	(理)
自然科学系	理科	生物	生物特論β	4	2	(理)
芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅱα	2～16	1	(人)(国)
芸術・体育系	美術	素描	文系素描Ⅱβ	2～16	2	(人)(国)
芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅱα	2～16	1	(理)
芸術・体育系	美術	素描	理系素描Ⅱβ	2～16	2	(理)
芸術・体育系	書道	書道Ⅲ	書道Ⅲα	2	1	(人)(国)
芸術・体育系	書道	書道Ⅲ	書道Ⅲβ	2	2	(人)(国)
芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	新曲視唱	6～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	音楽基礎演習	6～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	音楽発展演習	6～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	音楽Ⅱ	実践実技基礎	2	1	(人)(理)(国)
芸術・体育系	音楽	鑑賞研究	オペラ鑑賞法	2～12	2	(音)
芸術・体育系	音楽	器楽	ピアノⅡ	2～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	声楽	声楽Ⅱ	2～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	演奏研究	伴奏法（声楽）	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	声楽	合唱Ⅱ	2～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	演奏研究	弦楽アンサンブルⅡ	2～8	2	(音)
芸術・体育系	音楽	演奏研究	伴奏法（弦楽）	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	音楽理論	和声学Ⅱ	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	音楽史	音楽史	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	鑑賞研究	作曲家研究	2～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	音楽理論	和声学基礎	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	演奏研究	弦楽アンサンブル基礎	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	音楽Ⅲ	総合実技演習	2	1	(音)
芸術・体育系	音楽	音楽理論	音楽理論演習	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	ソルフェージュ	ソルフェージュ発展演習	6～12	1	(音)
芸術・体育系	音楽	演奏研究	専攻実技演習	2～8	1	(音)
芸術・体育系	音楽	＊SJPP	＊SJPP	2	2	(音)
芸術・体育系	保体	＊トップアスリート	＊トップアスリート	2	2	

令和2年度　総合的な探究の時間　全体計画

岡山県立岡山城東高等学校

生徒の実態
・基礎学力は高く、自主活動への取り組み意欲も旺盛である。全体的に素直で明るい生徒が多く、ほぼ全員の生徒が大学進学を希望している。

本校の教育目標
・進取の気性を持ち、自主的・自律的に行動していく態度を養う。

保護者の願い
・普通科進学校としての進路実績に加えて、部活動、HR活動や学校行事等の自主活動において、本校独自の魅力ある教育実践が期待されている。

地域・社会の実態
・市の中心部からは離れており、周辺は閑静で学習環境には適している。

本校において定める目標
・自分の在り方や生き方・将来についての意見や考えをもち、論理的な思考を駆使して議論することで、社会に潜む課題と向き合うことができる能力を育成する。

・日本ならびに世界の文化と伝統への理解を深め、国際感覚と国際協調の精神を身につけさせ、グローバルな問題を解決する能力を育成する。

地域の願い
・全県学区普通科として、将来的に地域の活性化に携わる人材を輩出することが期待されている。

学校の実態
・素直な性格の生徒が多く、学校行事などには協働的に取り組むことで、学校全体が明るい雰囲気に包まれている。

教職員の願い
・自己管理をきちんと行い、世界・社会に強い関心を持ちながら物事をより深く考える姿勢を持ち続けてもらいたい。

本校において定める内容

目標を実現するにふさわしい探究課題
一例として以下のようなものが考えられる。

・国内外の文学の比較による多様な価値観

・政令指定都市の比較から考える地域創生

・古典芸能から見える伝統的価値観

・先進国における子供の貧困

・日本における外国人労働者の福利厚生

・日韓関係における草の根レベルの交流の有用性

・音楽による国際交流が拓く社会

・音楽療法による認知症に対する効果

・AIの可能性と社会の変容

・統計資料の必要性と信頼度について

探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力

知識及び技能
・さまざまな社会や文化の多様性と独自性を理解するための、正確かつ一般的な知識を身につけることができる。

・社会事象や芸術作品および人物に対して一般的に必要とされる正確な知識を身につけることができる。

・日本語資料に限らず英文資料の中からも必要な情報を検索し、取捨選択することができる知識や読解力を養える。

・研究内容を深めていくために、ネイティブのアドバイザーに英語で質問したり説明したりすることのできる英語の運用能力を養える。

思考力、判断力、表現力等
・先行研究や他者の意見を批判的に検討し、必要な情報を収集・統合して自分の考えを論理的にまとめ、効果的に発信することができる。

・収集した情報をもとに、ディベート、ディスカッションを通し、自らの意見を論理的に述べ、他者を説得したり、異なる意見をまとめたりする論理的思考力を養える。

・探究した内容を英語でプレゼンテーションすることのできる表現力、疑問点等をその場で英語での質疑応答によって深めることができる即興的な英語力を養える。

・それぞれ音楽の特徴が生み出す雰囲気を感受しながら、楽曲の背景とかかわらせて、どのように演奏するかという表現力を養える。

学びに向かう力、人間性等
・興味・関心のある事に対して常に意欲的に知識を身につけようとし、他者の意見を踏まえた上で、より深いテーマへの「気づき」ができる。

・社会や文化に対して、興味・関心を持ち、他者との関わりを通して新たな課題を発見し、課題解決に向うことができる。

・探究活動を通して、日本を含めた世界を取り巻くあらゆる問題について自ら積極的に考え、解決に尽力することでより良い世界を作ろうとする姿勢を育成することができる。

・自分自身の考えや意見を持ち、それを発信し他者と共有することで、物事を新たな視点からもとらえ相手と相互に理解し合おうとする態度を養える。

学習活動
・1年次は課題研究を行うための基礎分野の学習、2年次は学類特有の科目との連携による課題研究を行う。

・1年次では2学期後半から身近な課題についてのプレゼンテーションを作成する。

・年度末には発表会を設けるなど単元展開を工夫する。

指導方法
・生徒の課題意識を深化させる支援。

・各教科・科目との関連的な指導の重視。

指導体制
・教育課程委員会における校内の連絡調整と支援体制の確立。

・各年次教員による相互支援体制による協力。

学習の評価
・活動の状況などの観察記録による評価

・レポートなどの製作物による評価

・学習記録などを集積したポートフォリオによる評価

・成果発表などによるパフォーマンス評価

・評価カードによる自己評価や相互評価

各教科等との関連
・教科横断的な学習の中に、各教科の専門性を活かした活動を取り入れる。特に進路実現を目標とした取り組みを展開するなかで、知的好奇心を喚起する。

地域や大学との連携
・地元の大学や企業の支援による講演会などを実施し、グローバルな視点による社会性を育成する。

・卒業生から職業選択や進路選択にかかわる助言を得て、キャリア教育を推進する。

小・中学生や他の高等学校との連携
・オープンスクールで中学生に高校生活を紹介したり、出身中学校を訪問して情報提供をするなど、自らの役割と責任を果たす態度を養う。

・「社会貢献活動」においては、地域の人々、子どもたちとの交流を通じて、自己探求に努め、自己の特性・進路等についての理解を深める。

キャリア教育の全体計画

学校名　岡山県立岡山城東高等学校

学校教育目標

・進取の気性を持ち、自主的・自律的に行動していく態度を養う。
・学園の一員として連帯し、互いの立場を考え協力して助け合う態度を養う。
・学業に励み、高い知性と豊かな情操を身につけ、健全な心身を養う。
・日本ならびに世界の文化と伝統への理解を深め、国際感覚と国際協調の精神を養う。

保護者・地域の願い

・全県学区普通科としての実績は、中学校の生徒、保護者、また地域から高く評価されており、期待も大きい。
・普通科進学校としての進路実績に加えて、部活動、HR 活動や学校行事等の自主活動において、本校独自の魅力ある教育実践が期待されている。
・地域やＰＴＡは大変協力的であり、学校への信頼も厚い。

生徒の実態

・ほぼ全員の生徒が大学進学を希望している。
・基礎学力は高く、自主活動への取組意欲も旺盛である。全体的に素直で明るい生徒が多い。
・歴史と伝統は浅いが、文武両道を実践し実績を上げている。
・校地周辺は閑静で、学習に適した環境に位置している。しかし、通学には多くの時間を要する生徒が少なくない。
・「城東の自由」と呼ばれる校風の中で、生徒会活動や委員会活動が活性化しつつあり、自治意識が高まりつつある。

キャリア教育の重点目標

・課題研究やフィールドワークを通して、論理的な思考力や創造的・批判的思考力を育成する。
・高度な英語運用力とグローバルな視野を持ち、地域や国際社会に貢献できる人材を育成する。
・何事にも自主的・自律的に取り組む態度を涵養する。

育成したい能力

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
自分の考えや思いをきちんと伝えることができ、相手を尊重しつつ、よりよい関係や集団を築いていく力	広い視野と、何事にも積極的にチャレンジする進取の気性を持ち、自主的・自律的に行動できる力	自ら課題を見つけ、世界や地域にも目をむけながら協働し、仮説を立てて論理的に解決を導こうとする力	多面的な視点から、諸活動を振り返って、自らが果たすべき役割を考え、主体的に生きていこうとする力

各教科・科目におけるキャリア教育

国語：古典分野の教材から先人の思想や価値観を学び、現代に生きる我々のあるべき姿を考察する。また、現代文の指導の中で、現代の情勢や課題を認識し探究する態度を養う。

地歴公民：我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色について理解と認識を深め、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に貢献しようとする態度を育てる。

数学：数学的根拠に基づいて論理的に判断する態度を育て、工夫して生活や学習をしようとする態度を育てる。

理科：身近な事象や生物に対する興味・関心をもち、課題発見、探究の姿勢を育成する。

保健体育：運動の実践を通して、ルールやマナーの大切さを身につけるとともに、集団における公正、協力、責任などの態度を育成する。

芸術：芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

外国語：外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献できる人材を育てる。

家庭：家族・家庭の意義を理解させ、家族への敬愛の念を育てることにより、家庭や地域社会の一員として生活をよりよくしようとする態度を育てる。

情報：授業を通じて、情報社会の中で気をつけるべきマナーやモラルなどを身につけ、他の人の立場に立って、物事を考えることができるようにさせる。

・各学類コア科目：地域や大学などと連携して、グループ、あるいは個人による課題研究に取り組み、思考力、判断力、表現力を養う。

各学年（年次）ごとの重点目標

1学年	自己理解 ・自己の在り方や生き方､将来について真剣に考え、よりよい進路を主体的に選択する能力を育成する。 ・各自が進路の実現に向けて設定した課題を克服するために必要なことを考え、計画を立てて実践する中で、学び方や自らの価値観を身につけ、論理的思考力や表現力の深化を図る。 ・グループでの課題研究を通して現代社会の諸問題を学び、自ら課題を設定して取り組む中で、論理的思考力、コミュニケーション力、表現力などを培う。
2学年	進路設計 ・自己の能力・特長・適性など、自己理解に基づいて進路を設計することの重要性を知り、自らに適した進路を考える力を育成する。 ・多様化する進路について概要を知り、的確に進路設計ができる力を養う。 ・学部･学科の内容を理解し、自己の適性を考えて、具体的な進路設計を考え、実践できる力を養う。
3学年	自己実現 ・広い視野をもち、自らの生き方について考え、将来の目標を持って進路を決定できる力を身につけさせる。 ・自己実現のための課題を明確にして、その解決にむけて主体的に取り組む態度を育てる。 ・変化する世界の現状と課題に興味、関心を持ち、地域との関わりにも目を向けつつ、自らの果たすべき役割を考え、取り組もうとする態度を涵養する。

進路指導

・自分の個性や特長を十分理解し、それを伸長する態度を養い、具体的な目標設定のもと、充実した高校生活が送れるようにする。
・進路に関する活動を通して、世界をステージとして自らの人生を切り拓いていく姿勢を涵養する。
・オープンキャンパスなどを通して大学、学部についての理解を深める。

生徒指導

・生徒自らが学校生活における問題点やいじめなどについてとりあげ、討議し解決にむけて取り組む姿勢を育て、城東の自由と責任、共同の意識を涵養する。
・生徒会活動や委員会活動を通して生徒主体の自治意識を育成する。

家庭・地域との連携

・世界に目を向ける中で、地域の課題にも真剣に向き合い、解決法を探究する。
・社会貢献活動への自主的な参加を勧める。
・1年次生全員が県内の企業体験をする。
・２、３年次では、学類のコア科目の課題研究や校外学習、グローバルサイエンスやグローバルスタディーズでの学習活動を通して、地域の歴史や文化、産業、最新の技術などを学び、社会人として必要な力を身につける。

総合的な学習（探究）の時間におけるキャリア教育

《１年》
・高校生としての学習方法の確立
・生き方、在り方を考える　（講演など）
・学部・学科についての研究と発表
・課題研究
　（スキルの習得
　身近な課題についての研究）
・企業訪問

《２年》
・課題研究
　SDGs…各学類のコア科目と連携
・キャリア形成
　講演、先輩の話を聞く会、など
・進路について考える
　志望理由書の作成など

《３年》
・現代における諸課題について考える
　（小論文講演会など）
・キャリア形成（講演など）
・進路実現にむけての学習
　（学部学科を選ぶ際の考え方、入試制度、受験科目、講演会、実習生の話を聞く会など）

特別活動におけるキャリア教育

《HR 活動》
・集団宿泊研修準備（１年次）
・ウォーキング大会（１年次）
・社会貢献活動
・翠緑祭準備
・学類研修準備（２年次）
・進路指導 HR
・保健安全講話
・小論文
・百人一首大会(１年次)
《生徒会活動》
・新入生歓迎会
・翠緑祭（文化の部、体育の部）
《学校行事》
・各種式典
・集団宿泊研修（１年次）
・学類研修（２年次）
　（関東、マレーシア、韓国、台湾など）
・球技大会（２，３年次）
・ウォーキング大会（１年次）

各種資格試験の結果

（１）GTEC４技能版受検者数における CEFR 別人数割合（%）

	B2	B1	A2
令和２年度１年次（288 名８月受検）	0.7%	5.9%	90.6%
令和元年度１年次（293 名 12 月受検）	1.8%	8.8%	89.4%
令和２年度２年次（288 名８月受検）	2.1%	22.6%	73.6%
令和元年度２年次（336 名 12 月受検）	0.3%	26.5%	73.2%
令和２年度３年次（326 名８月受検）	0.9%	39.0%	59.5%
令和元年度３年次（311 名８月受検）	2.6%	33.8%	63.6%

（２）実用英語技能検定合格人数（人）

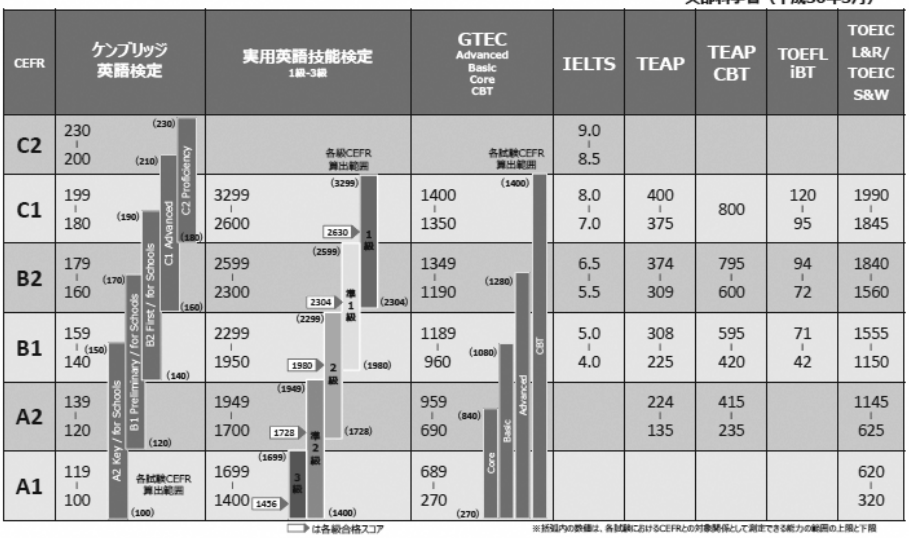
	１級	準１級	２級	準２級
令和２年度１年次	1	0	3	4
令和元年度１年次	0	1	2	13
令和２年度２年次	0	12	17	9
令和元年度２年次	0	3	23	17
令和２年度３年次	0	23	24	4
令和元年度３年次	0	7	52	34

（３）その他資格試験における CEFR 別人数（人）

	C1	B2	B1	A2
令和２年度１年次	0	0	1	1
令和元年度１年次	0	1	5	12
令和２年度２年次	0	10	16	10
令和元年度２年次	0	2	24	18
令和２年度３年次	0	18	26	6
令和元年度３年次	0	2	2	0

各資格・検定試験とCEFRとの対照表

文部科学省（平成30年3月）



○ 表中の数値は各資格・検定試験の定める試験結果のスコアを指す。スコアの記載がない欄は、各資格・検定試験において当該欄に対応する能力を有していると認定できないことを意味する。

※ ケンブリッジ英語検定、実用英語技能検定及びGTECは複数の試験から構成されており、それぞれの試験がCEFRとの対照関係として測定できる能力の範囲が定められている。当該範囲を下回った場合にはCEFRの判定は行われず、当該範囲を上回った場合には当該範囲の上限に位置付けられているCEFRの判定が行われる。

※ TOEIC L&R/ TOEIC S&Wについては、TOEIC S&Wのスコアを2.5倍にして合算したスコアで判定する。

※ 障害等のある受検生について、一部技能を免除する場合等があるが、そうした場合のCEFRとの対照関係については、各資格・検定試験実施主体において公表予定。

令和２年度学校自己評価アンケート分析（抜粋）

１．実施状況

実施期間　　令和２年 11 月 20 日～11 月 26 日
対　　象　　生徒　保護者　教職員
回 答 率　　生徒　97.2%　保護者　88.7%　教職員　92.4%

※　保護者と教職員の質問項目⑱は「城東高校は、生徒にとって入学前に抱いたイメージ通りの学校であると感じていると思う」としている。

２．アンケート結果

（１）全体的には大きな変化は見られない。
（２）生徒・保護者・教職員ともに、4.0 以上の高評価は質問①②③④⑤⑦⑨⑬⑭⑯⑳の 11 項目。うち、⑤⑦⑨の評価が非常に高い。
（３）生徒・教職員ともに、評価が低かった項目は、質問⑧⑪の２項目。
（４）質問項目⑱「城東高校は、生徒にとって入学前に抱いたイメージ通りの学校であると思う」は、3.4 で、ほぼイメージ通りであったと判断できる。
（５）質問項目⑳「城東高校に来て良かったと思う」の生徒・保護者の評価は 4.4 と高く、生徒の評価は、過去４年では最も高い。

３．分析と今後の対応

（１）質問項目⑤「学校行事は、生徒が中心となって取り組んでおり、充実したものとなっている」について

コロナ禍の影響から、学校祭をはじめとする多くの行事が中止または縮小となったが、生徒会、委員会、学類などが中心となり、工夫を重ねることで実施できた行事もあった。生徒の高評価は、この生徒主体の活動を評価しているものと思われる。

（２）質問項目②「城東高校の授業は主体的な学びを促すように工夫している」、質問項目⑬「城東高校は、他者と協力してさまざまな課題を解決する力がつく学校である」、質問項目⑭「城東高校は授業や学校行事、講演会などを通じてグローバルな視野を育てようとしている」について

特に１年次生は高評価で、本事業の目的を理解した上で、学習活動に取り組んでいることが分かる。今年度はコロナ禍の影響から、企業訪問やボランティア活動の実施が困難であったが、一方でオンラインによる交流や学習が進められた点は大きな成果であった。本校の様々な学習活動を通して、批判的な視点を持って物事を多面的に捉え、理解し、発言する習慣も身に付き、課題解決の力が涵養されていると考える。

４．自由記述について

（１）授業・課題研究について

様々な活動について、意欲を持って積極的に取り組む姿が窺える。１年次では「授業ではみんなの前でスピーチをしたりプレゼンをしたりする機会がとても多いので、いろいろな場面で役に立った。」「ディベート、ペアワークでは、お互いに高めあえる雰囲気がいい。」「周りと協力して課題を解決するのが楽しい。」「GLOBAL の時間などを通して自分の視野を広げることができた。」など、活動の成果に触れる記述が多かった。

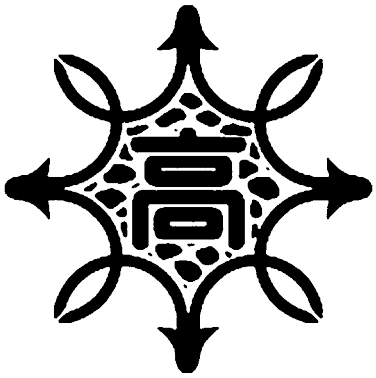
（２）城東高校について

３年次生の記述では、「課題研究を通して研究の仕方を学びつつ、他の友達と協力する力を付けられた。」「主体的な勉強を心がけるようになった。」「勉強と部活動の両立ができ充実している。」「多様な観点から物事を考えられるようになった。」「自分の未熟さに気付かせてくれ、成長を促してくれた。」「自分のやりたいことに全力で取り組めた。」など、高校生活の３年間を振り返っている。それぞれの取組が様々な能力の育成に繋がったことを実感し、それを自身の人間的な成長と捉えているものが多かった。

R2 学校自己評価アンケートまとめ

評価は「5. そう思う 4. どちらかと言えばそう思う 3. どちらとも言えない 2. どちらかといえばそう思わない 1. そう思わない」の5段階評価。

⑱については 5. 入学前に抱いていたよりも良い 4.やや良い印象 3. 入学前からのイメージ通りの学校である 2. 入学前に抱いていたよりもやや悪い 1. 悪い印象 （保護者・教職員：と感じていると思う。）

	質問項目（生徒用）	生徒											保護者								教員							
		平均値	R1 平均	H30 平均	平均値			内訳					平均値	R1 平均	H30 平均	内訳					平均値	R1 平均	H30 平均	内訳				
					1年	2年	3年	5	4	3	2	1				5	4	3	2	1				5	4	3	2	1
1	城東高校は、生徒の進路や興味・関心・適性に応じた学習ができる。	4.1	4.0	4.0	4.2	4.0	4.1	317	489	119	27	9	4.2	4.1	4.1	294	408	113	10	2	4.1	4.2	4.2	12	45	7	0	0
2	城東高校の授業は、生徒の主体的な学びを促すよう工夫している。	4.1	3.9	3.8	4.2	3.9	4.1	313	452	153	31	12	4.0	4.0	3.9	231	415	167	12	3	4.0	4.1	4.0	12	43	9	0	0
3	城東高校は、進路通信「時計台」やロングホームルームなどを通じて進路を考えるのに必要な情報を提供している。	4.3	4.2	4.1	4.3	4.1	4.4	416	412	112	17	5	4.1	4.1	4.1	272	411	132	13	0	4.1	4.0	4.2	21	34	5	4	0
4	城東高校は、自分の進路選択に向けて、面談や講演会などを通じてきめ細かな指導を行っている。	4.1	4.0	4.0	4.2	4.0	4.2	347	429	155	24	7	4.0	4.0	4.0	237	408	154	23	7	4.0	4.0	4.0	15	37	9	3	0
5	学校行事は、生徒が中心となって取り組んでおり、充実したものとなっている。	4.6	4.7	4.5	4.7	4.5	4.6	652	251	49	3	6	4.4	4.7	4.6	462	276	81	6	2	4.2	4.3	4.2	24	29	10	1	0
6	生徒会・委員会活動が活発に行われている。	3.9	3.8	3.8	4.0	3.7	3.8	244	418	225	64	11	3.9	4.1	3.9	212	371	230	12	2	3.8	4.0	3.8	9	37	15	3	0
7	城東高校は、生徒が部活動に熱心に取り組み、充実感を得られる学校である。	4.5	4.4	4.3	4.6	4.3	4.5	580	294	76	6	6	4.4	4.4	4.4	430	308	81	10	0	4.4	4.3	4.3	32	26	6	0	0
8	城東高校は、部活動と勉強との両立が出来るように、配慮している。	3.5	3.2	3.1	3.6	3.3	3.5	167	330	279	142	42	3.8	3.7	3.7	210	339	212	51	17	3.2	3.2	3.0	3	24	24	13	1
9	城東高校は、自由で明るい雰囲気の学校である。	4.5	4.4	4.3	4.6	4.3	4.4	560	299	87	11	5	4.5	4.6	4.6	495	277	48	6	3	4.3	4.3	4.2	31	26	7	1	0
10	城東高校の生徒は、品位のある制服の着こなしができている。	3.7	3.5	3.5	3.9	3.7	3.5	190	397	273	80	22	4.0	4.0	4.0	242	417	139	19	9	3.2	3.1	3.0	0	23	36	5	1
11	城東高校はマナー（交通など）がよい学校である。	3.2	3.1	2.8	3.2	3.3	3.1	83	283	396	160	39	3.8	3.8	3.7	152	412	235	21	6	2.8	3.0	2.9	0	12	33	15	5
12	城東高校は、社会貢献活動やボランティアなどの体験を通じて、生徒を高める機会をもうけている。	3.8	3.8	3.7	4.1	3.6	3.7	217	388	287	61	9	3.8	3.9	3.7	138	382	278	24	5	3.7	4.0	3.8	6	37	17	5	0
13	城東高校は、他者と協力してさまざまな課題を解決する力がつく学校である。	4.1	4.0	4.0	4.4	3.9	4.1	358	413	165	20	6	4.0	4.0	3.9	210	440	164	11	2	4.1	4.0	4.0	20	34	10	1	0
14	城東高校は、授業や学校行事、講演会などを通してグローバルな視野を育てようとしている。	4.2	4.0	4.0	4.4	4.0	4.2	376	420	138	23	4	4.1	4.2	4.2	269	416	136	7	1	4.2	4.1	4.1	22	33	9	1	0
15	生徒が悩んだり困ったことがあれば、面談などさまざまな機会に教員などに相談することができる体制にある。	4.1	3.9	3.8	4.2	3.8	4.1	344	398	167	36	17	3.9	3.8	3.8	208	379	203	25	12	4.2	4.1	3.8	22	31	12	0	0
16	城東高校は、教育活動全般において、人権やプライバシー・生徒の個人情報の保護に配慮している。	4.2	4.1	4.0	4.3	4.1	4.2	422	360	163	14	3	4.1	4.1	4.0	261	404	149	8	3	4.0	4.0	4.1	15	36	14	0	0
17	城東高校は、防災訓練やホームルーム活動などを通して、身の安全についての指導をしている。	4.0	3.8	3.7	4.0	3.9	4.0	289	392	238	35	7	3.8	3.8	3.6	160	381	271	9	3	4.0	4.2	3.9	15	36	14	0	0
18	城東高校は、生徒にとって入学前に抱いたイメージ通りの学校であると思う。	3.4	3.3	3.1	3.4	3.3	3.5	167	248	350	183	12	3.5	3.6	3.5	166	195	387	71	7	3.3	3.1	3.2	3	19	38	4	1
19	城東高校は、生徒を成長させている学校である。	4.3	4.2	4.1	4.4	4.1	4.3	439	380	123	13	3	4.3	4.2	4.2	341	363	110	10	1	3.8	3.8	3.8	7	41	16	1	0
20	城東高校に来て良かったと思う。 （教職員：城東高校は良い学校だと思う。）	4.4	4.3	4.2	4.4	4.2	4.5	531	281	116	23	7	4.4	4.4	4.4	489	234	91	8	4	4.0	4.0	4.0	20	30	12	3	0

令和２年度
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」
研究開発実施報告書・第２年次
発行日　令和３年３月
発行者　岡山県立岡山城東高等学校
　　校長　前川　隆弘
所在地　〒703-8222
　　岡山県岡山市中区下 110
　　電　話　086-279-2005　　ＦＡＸ　086-279-9913
印刷所　昭和印刷株式会社